

キャプテン

谷口キャプテンの巻



原作 **ちばあきお**

文 小澤茂昌

目次

第1章 特訓

1・1 放課後・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1・2 次の日・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1・3 谷口の家で・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1・4 守備練習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1・5 御岳神社で・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1・6 練習中・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1・7 新キャプテン誕生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第2章 ほやほやキャプテン

2・1	新キャプテンの朝	24
2・2	学校で	25
2・3	授業中	27
2・4	新入部員へのあいさつ	27
2・5	ノック練習	31
2・6	練習風景	32
第3章 初めての試合		
3・1	一回戦は江田川中	34
3・2	試合前	37
3・3	プレイボール	39
3・4	最終回の攻撃	44
3・5	試合後のミーティング	47
3・6	帰り道で	49
第4章 チームワーク		
4・1	野球部の練習中	52

4・2	谷口の家で	55
4・3	次の日の練習	56
4・4	練習後部室前の手洗い場で	58
4・5	金成中のデータ野球	61
4・6	静かな墨谷ベンチ	64
第5章 決勝戦にむけて		
5・1	野球部の練習中	66
5・2	練習後の部室で	68
5・3	青葉学院見学	69
5・4	青葉学院見学後、部室で	71
5・5	練習中	72
5・6	練習後の部室	73
5・7	谷口の家	75
第6章 対決青葉学院		
6・1	対決の朝	78

6・2	選手更衣室	80
6・3	応援席	81
6・4	一回表青葉の攻撃	82
6・5	一回裏墨谷の攻撃	86
6・6	青葉エース登場	93
6・7	青葉一軍登場	96
6・8	最終回の青葉の攻撃	101
6・9	松下負傷！ ピッチャーイガラシ	106
6・10	三点差をおう最後の攻撃	111
第7章 対青葉再試合決定		
7・1	新聞部のインタビュー	120
7・2	選抜大会出場決定！	122
7・3	新聞取材	125
7・4	全国中学野球連盟	128
7・5	野球部の部室の中で	130

7・6	練習後、学校からの帰り道で	131
7・7	練習前の野球部部室で	131
7・8	谷口の家で	133
7・9	グラウンドが見える教室で	135
7・10	試合まであと一週間とせまった練習中	135
7・11	練習が終わったあと部室の前で	136

第8章 白熱！！ 決勝戦

8・1	緊張感	140
8・2	大観衆	141
8・3	反撃！ 墨谷二中！	149
8・4	谷口のケガ	155
8・5	死闘！ 墨谷対青葉	159
8・6	ピッチャー谷口	163
8・7	栄光の日本一	171

第9章 谷口の苦悩

付録A 付録

9・1	野球部の部室	182
9・2	病院の待合室	184
9・3	野球部部室	186
9・4	練習を終わっての帰り道	187
9・5	谷口の家で	187
付録A 付録		
A・1	キャプテンの時代	192
A・1・1	野球漫画の系譜	192
A・1・2	キャプテンの衝撃	194
A・1・3	野球漫画の新しい方向	197
A・2	イチロー『キャプテン』を語る	203
A・3	「原作者 ちばあきお」について	209
A・4	あとがき	209

第1章 特訓

無名の墨谷二中の野球部にある日、野球の名門・青葉学院から二年生の転校生がやってきた。名前は谷口タカオ。といっても彼は青葉では二軍の補欠、レギュラーなど夢のまた夢という選手だった。ところが青葉のユニフォームを着た彼は青葉のレギュラー選手が転校してきたとかんちがいされてしまう……

1・1 放課後

谷口「あのう、すみません、や、野球部の練習場はどこでしょうか？」
生徒「この校舎のうらがわだよ、そのろつかをまっすぐいって右がわ。」
谷口「ありがとう。」

谷口「あ、あの、ちょっと」

丸井「なんスか？」

谷口「キャプテンにあいたいんですけど。」

丸井「キャプテン？ キャプテンは選抜でかけてますが…」

谷口「じゃあ副キャプテンは？」

丸井「ほら！ あそこでノックをしている人がそうス。」

グラウンドにいた一年生らしい野球部員に声をかけ、入部したいことを伝えてほしいことをつげた。

丸井「あのー先輩…」

中村「ちよつとまつてろ！」

谷口「は、はい。」

副キャプテン中村がノックをしているあいだ、谷口は入部届けをにぎりしめ、ベンチに腰をかけてシートノック練習を見ていた。谷口は「この学校だったらなんとかやっていけそうだ。一生懸命やればレギュラーだってなれるかもしれない。」そんなことを考えながら練習をみていた。

中村「あ、またせたな！」

谷口「あ、あのう……入部したいんですが…」

中村「入部？ また時期はずれだな…」

谷口「きょう転校してきたんです。」

といって入部届けを副キャプテンに手わたした。

谷口はバックネットのそばで制服からユニフォームにきがえた。ユニフォームのマークは前の学校の青葉学院のままであった。それに気がついた二、三年生の部員が谷口のまわりに集まってきた。

中村「わかった！ キャプテンがかえったらわたしとけ。」
丸井「はい！」

谷口「あー、タマひろいしてもいいですか……」

中村「すきにしろ。」

丸井「どうぞ、どうぞ。」

谷口「では……はい。」

一年生A「もっと、ほかで着がえてもらえませんか。」
谷口「ご、ごめん。」

一年生A「バックじゃなからうか、キザなユニフォーム着ちゃってさ。」

中村「きみ、青葉学院の野球部にいたのかい？」
谷口「え……？ ええ、でも、どうして……？」

中村「やっぱり……、そのユニフォームみりやあだれだつてわかるさ。ここたてつづけ全日本で優勝しているじゃないの。」

谷口「あ、そうか、青葉は野球では有名だもんね！」

中村「そんならそうと、なぜはじめにいつてくれなかつたんだい。」

一年生A「お、おかげでばくなんかとんだ失礼しちゃってさ……」

谷口「いや、べつに……ばくは……」

一年生A「先輩！ 青葉学院のバッティングをみせてもらいましょうよ。」
中村「よし、みんな守備につけいっ！」

谷口は気がすまないながらも、一年生にあとおしされてバッターボックスにはいった。相手ピッチャーの投げるボールが速すぎてみおくるも、たまたまボール球とわかる。二球目にはからだのちかくにとんできたボールにたいしてバットを振ると……まぐれにもホームランとなつてしまった。

部員「オウ！」
松下「おうい外野、バックバック！」

佐々木「なにを、さわいどるかっ！」

中村「キャプテン！」

一年生A「あのう……」

佐々木「青葉から……」

谷口「二年の谷口です。よろしくおねがいます！」

一年生B「キャプテンにもみせたかったですね、あんなとんでもない暴投をホームラ

ンにしちゃうんだから。」

一年生C「それもライナーで……」

谷口「あ、あれはまぐれですよ。」

中村「まぐれだつてさ、けんそんしちやつて……」

三年生A「なっなっ。」

谷口「もう……」

佐々木「よし入部を認めよう。」

谷口「ど、どうも。」

佐々木「さあ、みんな練習練習！ 日が暮れてしまつぞ！」

部員「はい。」

中村「キャプテン谷口くんのポジションですがどうします？」

谷口「ボジ…、とんでもない、タマひろいでけっこうです。ぼくなんか。」

三年生A「タマひろいだとき。」

三年生B「やっぱり大物のいうことはニクイね、ねえ青葉ではどこを守ってんだい？」

谷口「ちよつ、ちよつと、ねえ、ぼくは…」

佐々木「まあ、うちではいけばん新米だ。きょうのところはタマひろいでいいだろう。」

谷口「では…」

谷口は外野にむかつて走った。やっとでみんなの目から解放されたことでホツとし一年生にまじってタマひろいをはじめた。

1・2 次の日

谷口が入部した翌日、学校ではとんでもない転校生が野球部にはいつてきたと評判になる。そんなことは知らない谷口は一年生にまじってグラウンド整備をしているが……

一年生A「先輩……」

谷口「ん…、どうかしたのか？」

一年生A「どうかしたのかじゃありませんよ、いまや先輩のうわさで学校中たいへんなんすから。」

女生徒A「こつちをむいたわ！」

女生徒B「かわいいじゃない。」

一年生A「先輩、手ぐらいふってあげたら。」

谷口「バカをいうなまったく！」

男生徒A「おい一年生！、例の大物ってあいつかい。」

丸井「はい！」

男生徒A「うわさではすげえ大物ってきいたが、グランドの整備をやらされているよ
うじやたいしたことはねえんだな。」

丸井「し、失敬なことをいわないでください！ この学校ではまだ新米だからっ
て自発的にやってらしやるのです……」

男生徒A「ほーっ、で、そんなにすごいのか？」

丸井「そりゃあもう！、あのバツティングだったらプロでも通用しますね、きつ
と！」

男生徒A「へーっプロ……、それで守備のほうはどうなんだ。」

男生徒B「そうよポジションはどこなんだい。」

丸井「ポジ……、ハテ……？ ちよつとまつてくさいね、きいてきます。」

丸井「あんのー谷口さんのレギュラーポジションはどこだっただんでスカ？」

谷口「いいかようくきけつ、いずれはなすつもりだったかな……サードだ……、
といつても補欠さ、それも二軍のな……」

丸井はポジションだけきくとまた三年生の男子生徒のもとにいそいでかけていった。

丸井「サードだそうです。」

男生徒B「へーっ青葉のサード、まだ二年生でなあ！」

丸井「どうです、これでよくわかったでしょう。」

男生徒A「こいつは地区予選がたのしみだぜ。」

丸井「ま、おおいに期待しててください、わが野球部に谷口さんあります！　ハハハ。」

谷口の耳にも丸井と三年生との話がとどいた。その話を聞いているとなんだか気持ちが暗くなってきた。

1・3 谷口の家で

谷口「せっかく、こんどの学校ではのびのび野球を楽しめるとおもってたのに……どうすりゃいいんだ……」

学校からかえりながら、誤解からとんでもないことになっていることに谷口もようやく気づいた。うつむきながら家のドアをあけ帰宅した。父親は仕事道具のかななをていれしているところだった。

父「よう、ばかにはええじゃねえか。」

谷口「……」

父「こんどの学校でなんかあったのかい？」

谷口「と、とうちゃん！」

父「なんだと、転校したい？」

谷口は父親の顔を見ると気がゆるんだのか思わず涙ぐんだ。そして谷口は今までのことを父親に話した。

父「フー、なるほど、そういう事情があったのか。」

谷口「おれの立場わかるだろ……」

父「しかしオメガもずいぶんかいがぶられたものじゃねえか、うらやましいね
学校中のスターってわけか。」

谷口「とうちゃん！ おれ真剣なんだぞ！ どうすりゃいいんだよ……」

父「そんなことがわかんねえのか、ようするに青葉の選手として通用するぐれ
いに腕をみがきやいいのよ。」

谷口「しあわせだよとうちゃんは、ま、野球をしらないからムリもないけど。」

父「やかましいやい！ てめえそれでも男か！ やりもしないうちからゴタク
をならべやがつて！ こいとうちゃんがおしえてやる！」

谷口は父と二人で家の近くの御岳神社にやってきた。

父「さあ、とうちゃんが投げてやるから打ってみろ！、そらよ。」

谷口「……」

父「このやろう、とうちゃんが真剣にやってりやなんだ。」

谷口「あんなひでえタマが打てるかよ！」

父「あ、そういうものなのかい。」

谷口「もうちよつと前でいいからこのへんに投げてよ。」

父「ぜいたくいいやがつて。ほらよ。」

ストライクの意味さえわからない父からボールを投げてもらって谷口は練習する。近所の
子供たちが二人のようすをみてクスクス笑っている。

谷口「なんでこんなことしなくちゃならないんだ……そうよ、こんどの学校でうっかりこのユニフォームを着たのがまちがいのもとだったんだ。この胸のマークをみればだれだつて青葉学院つてわかるよな、ここ数年来ずっと全日本で優勝しているんだもの。いまさら青葉で二軍の補欠をやつてたなんていえない……。」

父「やる気あんのかこのーつ。」

谷口「あ、やるやる。」

父「そらっ！」

父「そらっ！」

父「ぷーっ！」

父「いくら誤解にしてもよくもまあおめえなんかを青葉の選手とみたね、おらあ補欠つていわれたつて信じねえよ、ほんとに。いくぞ補欠！」

父から投げてもらつて谷口が打つ打撃練習がはじまつた。最初はしんにあたらなかつたタマがだんだんとあたるようになってきた。最初はひやかしていた子供たちもその真剣さに次第にだまつてしまった。二人の練習は夜遅くまで、毎日つづいた。

1・4 守備練習

毎日の家での練習で谷口のユニフォームはボロボロである。そのユニフォームで今日もタマひろいしていると……

丸井「ほんとに、どうしちゃたんだろ、さいきんの谷口さん。」

一年生A「うん、ユニフォームはボロボロだし、からだじゅうキズだらけになっちゃってさ。」

一年生B「もしや、世をすねてどこかでケンカでもしたんじゃない。」

丸井「けんか？」

一年生B「考えてもみる、名門青葉のレギュラーがここじゃずーっとタマひろいんだぜ、やけにもなるさ。」

一年生C「なるほど！」

二年生A「谷口くん、キャプテンがおよびだ。」

谷口「はいっ。」

中村「谷口、守備につけ！」

谷口「はっ、はいっ。」

二年生B「おい、守備だとさ。」

二年生C「うん！」

谷口「ついにくるときがきたか！」

佐々木「いくぞ！」

谷口「おねがいします。」

谷口のはじめての守備練習ということで部員全員が注目した……。しかし……キャプテンが打つボールがなかなかとれない。取れたとおもっても送球でミスる。部員のなかには「これで青葉のレギュラー選手なのか？」というたがう気持ちではじめる。

1・5 御岳神社で

その日からふたたびとうちゃんのかびしい特訓がはじまった。朝に……、晩に……、それこそ寝る間もおしんで……ノックができない父はお手製のマシンをつくって協力した。しかしどんなに努力してもなかなか強い打球がとれない。

谷口「だめだ、どうしてもとれない。ど、どうすりゃいいんだ。」

父「もう、あきらめるタカ、おまえが二軍の補欠だったことをキャプテンに正直に話すんだ。」

谷口「い、いまさら、そんな……。」

父「やるだけやって、だめだったんだ、胸はって話してこい！」

谷口「ううう……。」

父「いいんだ、いいんだ、よくここまでがんばってきた、とうちゃんおめえをみなおしたよ。」

谷口「ううう……。」

谷口は父の胸で泣きくずれた。

1・6 練習中

守備練習中、ノックをしているキャプテンのところに谷口がちがづいていく。

谷口「キャプテン……。」

佐々木「なんだ。」

谷口「あの…お話したいことがあるんです…」

佐々木「……、あとにしる。」

谷口「……」

佐々木「谷口、なぜ守備につかん！なにをぐずぐずしとる、はやくせんか！」

谷口「は、はいっ。」

佐々木「いくぞ！」

守備練習がはじまった。前回とはちがつてどんな形であろうと全力でボールをとろうとする谷口のすがたがあった。グローブがとどかなかつたらグローブのない手でボールをおさえ、強いタマでもこわがることなくからだでとめて投げかえした。うまいとはいえないが、部員はどんなタマにもくらくらいついていく谷口におどろくのだった。またキャプテンの打つタマは誰から見ても他の部員に打つときよりも速く強いタマだった。

結局キャプテンには青葉でのことは話ができずにおわった。

1・7 新キャプテン誕生

月日がながれて三月も末になった。三年生がとうとう卒業する日がやってきた。今日は卒業していく三年生から新チームのオーダーとキャプテンが発表になる日である。一、二年生の部員全員がキャプテンのことばに注目する。

佐々木「地区予選をまちかにひかえ、新オーダーならびにキャプテンを発表する。」
部員A「いよいよ発表か…。」

部員「おーっ!」

一番 ライト 島田

二番 ショート 高木

三番 ピッチャー 松下

四番 サード 谷口

五番 キャッチャー 小山

.....

キャプテンはオーダー順に発表した。名前が書かれるたびに部員からはどよめきの声がある。谷口の名前は四番目に書かれた。

谷口「あつ、よ、四番でサード。」

一年生A「さあすがあ!」

丸井「なっなっ。」

谷口「じゃ、じゃうだんじゃない、いくらなんだって…お、おれには重荷すぎる…。」

谷口は四番でサードという重要なポジションをあたえられたことにふくざつな思いであった…。そしてキャプテンは最後に新しいキャプテンの名前を発表した。

キャプテン 谷口タカオ

部員「おーっ……」
一年生A「やっぱり！」

丸井「ん！ 谷口さん！ ほら！」

谷口「キャプ……、キャプテンだつて、ち、ちよつとまってください、ぼ、ぼくはこのチームにはいつてまだまもないっていうのに、じょうだんじゃないです。」

部員「いいじゃないスカ、そんなこと！ 名門の青葉でレギュラーやってたことだし……」

丸井「谷口さんをおいて、ほかにキャプテンなど考えられませんか。」

部員「そうだ、そうだ。」

佐々木「谷口、みんなをたのんだぞ！」

部員「これからよろしくお願いします、どうかおてやわらかに。」

谷口は部員にかこまれながらもさつていくキャプテンをおいかける。

谷口「キャプテン！」

佐々木「どうした？」

谷口「ぼ、ぼくにはキャプテンをやる資格などありません。」

佐々木「どういふことだ？」

谷口「ぼくは青葉の野球部では補欠だったんです。そ、それも二軍の……」

佐々木「そんなことぐらいおまえが入部したときのプレイをみてひと目でわかった。」

谷口「えっ……」

佐々木「いまや、おまえには実力があるじゃないか。」

谷口「実力……？ まってください、ぼくは誤解から青葉のレギュラーとして期待されました。いまはただその期待をうらぎらないよう努力することで精いっぱいなんです。そ、それをキャプテンだなんて重大な……」

佐々木「おまえはその期待にりっぱにこたえたじゃないか、かげの努力でな！」

谷口「え……」

佐々木「そしていまやおまえは青葉のレギュラーにもまけないほどの実力をつけた。」

谷口「青葉のレギュラーにも……」

佐々木「どうだ、こんどはキャプテンとしてみんなの期待にこたえてくれんか。」

谷口「……」

部員「ぼくたちからおねがいます！」

部員「ひきうけてください、谷口さん！」

部員「おねがいます！」

佐々木「さあ！」

谷口「よ、よろしく。」

キャプテンから肩をたたかれ、部員の声にもはげまされてやっとで谷口の顔にも笑顔がこぼれた。新キャプテンの誕生である。



第2章 ほやほやキャプテン

谷口がキャプテンになって数週間がすぎた。月はかわり四月。新学期である。今日は新入部員がはいってくる…

2・1 新キャプテンの朝

谷口「はあ、ふう、はあ……」

父「タカ、朝っぱらからそんなりになにやってんだ？」

谷口「トレーニングだよ。」

父「キャプテンともなると、いうことがちがうぜ。」

谷口「だって立場じょう努力しなくちゃ。」

母「タカオ、いっただいどこほつつき歩いてたんだい、はやくごはんたべちゃいな！」

谷口「うん！ いただきます。」

母「ほらほら、とうちゃんものんびりしてていいのかい。」

父「おう。」

谷口「いつてきまーす！」

父「あのやろぅ、かばんをわすれていきやがった。」

ガラガラと音をたてて玄関があき、谷口がもどってきた。

谷口「いけね、かばん、かばん！」

母「いいのかいあんなんで……」

父「……」

あきれた顔で食事をつづけるがもう一度谷口はもどってくる。

谷口「いけね、ぼうしわすれた。」

母「……しかしよくまああれでキャプテンがつとまるねえ……」

父「……」

2・2 学校で

丸井「あ、キャプテンだ。」

丸井は登校途中の谷口を見つけた。

丸井「キャプテン！ キャプテン！ 谷口キャプテンでばっ！」

谷口は名前をよばれてはじめて自分がよばれていたんだときがつく。

谷口「シート、シート！」

丸井「どうしたんス、キャプテン……？」

谷口「あまり、キャプテン、キャプテンといわないでくれ、はずかしいじゃないか……」

丸井「キャプテン！ はずかしいとはなんスか、はずかしいとは！ あなたはキャプテンでしょっ！」

丸井の声がだんだんとおおきくなって、そのようなすをみていた生徒たちが笑っている。

丸井「ちよ、ちよっと。もつとキャプテンとしての自覚をもってくださいよ……きょうからは新入部員がはいってくるというのに、もつ……いいですか新入部員にせつする態度は最初がかんじんなんス、最初が。」

谷口「はっ、はいっ。」

丸井「はいはないでしよ、はいは、キャプテンらしくわかったとか、そうかとか、もつといいようがあるでしょうが！」

谷口「はいっ……いけね……」

丸井「ま……いいス、それから新入部員へのあいさつへのことは考えておいてください、じゃあ。」

谷口「あいさつのことはか……」

2・3 授業中

今は国語の授業中である。谷口は朝、丸井の言った新入部員へのあいさつのことばを一生懸命考えている。先生は授業がうわのそらの谷口をみつける……

生徒「春はあけぼのようよう白くなりゆく、山ぎは少しあかりて……」

教師「よろしい、そこまで、つき谷口！」

男子生徒「おい谷口……」

女子生徒「谷口さん……」

まわりの生徒にいわれてやっとで気がつく、すばやく立ちあがったが……

谷口「はっ、はいっ。み、みなさんこんにちは！ キャプテンの谷口です！」

生徒「ぶーっ！」

生徒「わっ、はっはっはっ……」

教師「……」

クラスのみんなに笑われてしまった、先生にはおこられ廊下で頭を冷やしてくるように言われてしまった。

2・4 新入部員へのあいさつ

そんなこともあったが、放課後となりました。谷口は部室の中で着がえをしています。さあ谷口キャプテンの新入部員へのあいさつは……

丸井「キャプテン、はやくしてください新入部員も全員そろってます。」
谷口「えっ。」

丸井「かわいいものですね。」

谷口「ああ……」

丸井「ささ、はやく。」

谷口「う、うむ。」

丸井「ぼくにも後輩ができるんだなあ、はやいですねえ一年たつのなんて」

窓からみえる新入部員たちの姿に緊張がたかまる谷口であった。

ユニフォームに着がえる谷口であったが手と足が自分のいうことをきかず、おもつように着ることができない。

そんなこんなでさあ谷口キャプテンのあいさつがはじまります。

丸井「では、キャプテンからあいさつをひとこと。」

谷口「み、みなさんこんにちは……、えーっぼ、ぼくがキャ……キャキャプ、えー

キャプ……あれ……キャプ、キャ、キャ、キャプ………」

小山「お、おいっ。」

丸井「ありがとうございます。キャプテンにひきつづきまして副キャプテンのあいさつ、どうぞ！」

谷口はあいさつの途中でだまってしまった。丸井の機転で副キャプテンのあいさつに変わった。

小山「う、うむ。副キャプテンの小山だ、きょうはこんなにおおくの新入部員をむかえることができてひじょうにうれしくおもっ……」

小山「キャプテン！、新入部員のきょうの日程はどうなってますか？」

谷口「え、あー、じゃあきょうのところは練習の見学でも……」

丸井「キャプテン、最初がかんじんなんす、最初が、あまやかしかやダメですよ！」

谷口「じゃあ、どうすれば……」

丸井「あるでしょ、草むしりでも、道具のていれでも！」

谷口「じゃあすみません、草むしりでもしてください。」

丸井「すみ……もつとキャプテンらしく命令調で！」

谷口「う、うむ、や、やれっ！」

丸井「このーっ、モタモタしてやがるとぶつとばすぞっ！」

一年生「は、はい。」

丸井「キャプテンがおとなしくいつてるからつてなめるんじゃねえっ。」

一年生A「あれで、キャプテンだつてさ。」

一年生B「かんろくねえなあ。」

丸井「まあ、キャプテンのプレイをみればなつとくするだろう。」

たよりないキャプテンという印象をもたれてしまったようですが、ようやく一年生が草むしりをはじめました。その中で一人だけネットに背をもたれて草むしりをしていない一年生がいます。

丸井「おい、そのサルみたいの！」

イガラシ「サルってだれのことなの？」

丸井「しっけい、しっけい、なまえがわからなかったから……」

イガラシ「で……なんですか？」

丸井「草むしりをしてほしいんだけど……」

イガラシ「草むしりをしたからって、野球がうまくなるわけじゃあるまいし。」

丸井「て、て、て、てめえ、いまなんていった！」

イガラシ「いえ、こつちの話。」

丸井「このう、一年生のくせに……」

グラウンドでは上級生の練習がはじまるうとしています。

谷口がノック役での守備練習がはじまるうとしているのですが…

谷口「いくぞショート！」

高木「おう！」

谷口のバットが空を切った。ボールがなかなかバットに当たらない。

一年生A「ちよつちよつちよつ……みるよあれ……」

一年生B「ん……？」

イガラシ「なんだこの野球部、じょうだんじゃないぜ！」

谷口は丸井にノック役をかわってもらいベンチに腰かけた。うつむきながら自分がキャプテンとしてほんとうにふさわしいのか疑問に感じていた。

谷口「キャプテン……か、まるであべこべじゃないか、みんなにめいわくばかりかけちゃって……」

考えこむ谷口だったが、前キャプテンにいわれた言葉を思いだしていた。

「あんなにへただったおまえが、かげの努力で期待にこたえてくれたじゃないか、こんどはキャプテンとしての期待にこたえてくれんか、おまえならできる！ みんなをたのんだぞ！」
そんなことを思いだした谷口だったが自分がなにをしたらいいのかわからないでいた。

2・5 ノック練習

谷口は今日のできごとをぼんやりテレビを見ながらまた思いだしていた。みんなにめいわくをかけたこと、ノックができなかったこと……

父親はテレビに夢中になっている。

なにをおもったのか野球道具をもつて一人神社に向かった。そして神社につくときよう失敗したノックを練習しはじめた。だがなかなかタマがあたらない。けれども何回となく挑戦しているとボールがバットにかするようになってきた。

谷口「あ、あたった！ フライになるということはバットをふるタイミングがはやいんだな。」

息をきらしながらも谷口のノック練習はつづく……

谷口「はあ、ふう、だいぶあたるようになったぞ、でもノックはおもったところに打てなくちゃ。」

谷口「はあ、ふう、はあ、まだまだ。」

谷口「がんばらなくっちゃ!」

父親が心配になって見に来たが練習していることがわかると声をかけずにじっと見つめていた…。

2・6 練習風景

谷口が守備練習をしている。そこには新入部員のあいさつに失敗した谷口の姿はなかった。のびのび、自信まんまんでボールをおいとして投げる谷口の姿があった。

一年生A「み、みろよ、あれキャプテンじゃないか?」

一年生B「えっ?」

一年生C「やるーっ、さすがキャプテン。」

一年生B「うまいなーっ。」

一年生A「おれキャプテンでいつもベンチにすわっているもんだとおもってたよ。」

一年生B「ぼくもさ。」

丸井「なんだ、なんだ、おめえらキャプテンをそういつぶうにみていたのかっ!」

一年生C「だ、だってこないだのノックひどかったじゃないですか。」

一年生B「なあ。」

丸井「……」

第3章 初めての試合

キャプテン谷口にとって最後の夏の大会はもつすぐはじまろうとしている。きょうはその一回戦の組み合わせが決まる日である。

3・1 一回戦は江田川中

地区大会の一回戦の対戦校を伝えるに二年生が走っていく……

二年生「伝令、伝令！ キャプテン地区予選のあいて校がきまりました！」

加藤「どこだ、どこだ？」

二年生「第一戦はなんと江田川中です。」

小山「な、なんだって。」

島田「ほんとかよ！」

部員「うほーっ、やったぞ！ こいつは春からえんぎがいいぜ。」

谷口「どうということなの？」

二年生「まるで、まるで、あいてじゃないの。なにせこれまで9回やってうちが全勝してるんです。」

加藤「それもコールド勝ちがなんと8回ですよ。」

小山「問題じゃありませんよ。」

谷口「ほっ。」

部員「なんだかきがぬけちゃったな。」

部員「ほんと。」

部員「ああ。」

丸井「キャプテンこういうときこそしめなくっちゃ！」

谷口「う、うむ。あいてがどんなチームだろうとゆだんはいけない、さあみんな練習、練習！これからシートノックをする。さあさあはやく守備について！いいかなーっ。」

丸井「あ、あのうノックはぼくが……」

谷口「ぼくの守備練習はすんだしいいじゃないかたまには。」

丸井「し、しかし……」

島田「お。おい。」

松下「うむ……」

一年生A「おい、ひさしぶりにキャプテンのノックがみられるぞ。」

一年生B「うん！」

丸井「お、お、お、おまえらボヤボヤしてしないで草むしりをしないかつ。」

一年生C「もう、むしる草なんてありませんよ。」

丸井「じゃあタマひろいだっ。」

一年生A「人づかいがあらいなあ。」

谷口「そういう丸井は守備につかないのか？」

丸井「いいんです、ぼくは、それよりキャプテンおつかれになったらいつでもかわります。はいっ。」

谷口「いくぞっ ショート！」

前回とはちがいカキーンと音をたてて谷口の打った打球がショートにいった。部員全員その上達ぶりにおどろいていた。

遠藤「どついうことだ？」

小山「さあ……」

丸井もまた前回のノックのことがあったので、谷口の横に立ってノックを見ていたが、その上達ぶりにはおどろいてしまった。

丸井「……あれなんだな、まえのキャプテンが谷口さんをえらんだ理由は……」

ふと気がつくバツクネットうらに対戦が決まった江田川中の野球部員の姿を丸井が見つけた。

丸井「みるよ！」

小山「江田川中じゃん。」

松下「敵情視察つてとこだな。」

加藤「いっちょカッコーいとこみせてやっか！」

丸井「あ、それいいっ。」

丸井「な、なんだあいつら……、いまあの連中へんなわらいかたしなかったかい……？」

高木「あ、ああそっぴやあ……」

丸井「ちえっ……こそそとムシのすかねえやつらだ！」
高木「試合でコチャンパンにやつつけてやつからなもう！」

3・2 試合前

さていよいよ地区予選の幕がきつておとされました。谷口君がキャプテンになってはじめての試合がおこなわれるのです……。

グラウンドでは江田川中が試合前の練習をはじめた。

「ほれ！」

「オーライ！」

「ガチン！」

「いてえな、このーっオーライっていったじゃねえか！」

「なにを、てめえオーライっていつてとったためしがあんのか！」

「あつ、このーでつかい声で……」

「バ、バカやめろ、みっともない。」

墨谷中のナインはベンチであきたかおで江田川中の練習をみている。

松下「やれやれ。」

高木「やつら、あれでやる気あんのかねえ……」

丸井「こりゃ三回でコールド勝ちですねキャプテン！」

谷口「そうかなあ……、おれにはよゆうがあるようにみえるが……」

丸井「キャプテン、それは考えすぎですよ、へんにしんちようだなあ。」
谷口「ま、はじめての試合だからな。」
丸井「やつらは試合をなげているんですよ、いつもあの調子なんスから。」
そのとき江田川中の練習ボールが墨谷中ベンチにころがつてきた。

井口「わりいわりい。なんでえイガラシじゃねえか！」

イガラシ「やあ！」

井口「ひさしぶりーっ、へーっおまえ墨谷第二にはいったのか、あれなにやってんの？」

イガラシ「みりゃわかるだろう。」

井口「バットみがきなんてあとにしるよ、ひさしぶりにあつたんじゃねえか。」

ずうずうしくベンチにはいりこんでイガラシと話をする江田川中の井口だったが、墨谷中ナインのつめたい目にきがついた。

井口「まじかったな、じゃ、みなさん、おれが投げつからよろしくな。」

松下「まったく、しつけないやつだ。礼儀をしらんらしいな、おまえの先輩は。」

イガラシ「同級生ですよ。」

加藤「なんだ？……あ、チクシヨウ。」

松下「あれが一年生の態度かよ、じょうだんじやないぜ一年生が投げるなんて……」

イガラシ「一年生だって力があれば投げさせてくれるんですよ、あの学校はね。」

松下「なにがいたいんだ。」

丸井「まあまあ、こいつのひがみつばいのは、いつもなんスよ。」

松下「しかし江田川もおちたもんだ、一年生に投げさせるなんて。」

丸井「まったく。」

イガラシ「しーらねっ」と……

3・3 プレイボール

試合前の練習がおわりとうとう試合がはじまった。一回の表は江田川中のこうげきからである。江田川中のバッターは墨谷を研究してきたらしくかなりいいあたりをするが、墨谷の守備のすばらしさもあり三者凡退でおわった。

そして一回の裏、今度は墨谷の攻撃である。江田川のピッチャー井口の投球練習がはじまった。井口のタマは速いことは速いがキャッチャーのミットになかなかボールがはいらない。

遠藤「あーあー……」

松下「どうにもこうにもひどいねーっ……」

高木「いいか、じっくりえらんでいけ！」

島田「えらぶもなにもバットをふらなきゃフォアボールですよ。……でももしあたったら……」

審判「プレイボール！」

井口の一球目はまともにバッターのからだにあたった。トップバッターのライト島田はそのばにたおれこんでしまっ。ベンチから谷口がすぐにとびだした。

島田「ううっ……」

谷口「だ、だいじょうぶか？」

島田「え、ええ。」

審判「テ、テイクワンベース。」

遠藤「ほんとにだいじょうぶかね、あいつ。」

松下「う、うむ。」

高木「じよ、じようだんじゃない、あ、あんなはやいタマぶつつけられちゃ、たまつたもんじゃない。」

二番打者はシヨートを守る高木である。バッターボックスにはいる前からややしりこみをしている。

高木「きたっ!」

審判「ストライク!」

高木「いけね!」

二番打者のシヨート高木にたいして井口の一球目はどまんなかのストライクだったが、高木は井口が投げると同時にバッターボックスからとびだした。

谷口「タ、タイム、どうしたんだよ。」

高木「だ、だってあんなはやいボールぶつつけられたら……」

谷口「あのぐらゐのボールでにげちゃダメだよ。」

高木「は、はい。」

井口の二球目はとんでもないボールでこんどは顔にぶつけてしまつ。高木ははなちをだしながらも一塁へむかう。三番はピッチャーの松下である。

松下「ど、どうなつてんだあのピッチャー。」

谷口「そんなにさがつちや打てないよ。」

松下「ぼくにもぶつかれていうんですか。」

谷口「……」

松下「い、いけね、チクシヨウどまんなかだよ!」

審判「ストライクバッターアウト！」
松下「す、すみません。」
谷口「さあ、こいつ」
ワンアウトランナー一塁、二塁、バッターは四番の谷口である。谷口はみんなにてほんをしめすためにややまえかがみになってバッターボックスにたった。そのときである、墨谷ベンチがなにやらさわがしい。松下がイガラシにむかっておこっているようである。

審判「タイム！」

松下「このやろういわせておけば。」

丸井「やめろよ試合中だぞ！」

谷口「なにをやってるんだっ」

丸井「イガラシがわるいんすよ、一年生のくせにすぎたことをいって。」

谷口「とにかくみんなベンチにはいれ！なんていったんだイガラシ？」

イガラシ「ボールに手をだすなっていったんです。」

松下「あ、てめえデッドボールになりやいいっていったろ！」

イガラシ「だって……キャプテンやつはいつもたちあがりがるいんですよ、しかし

いまにあの速球をビシビシきめてきますよ！」

松下「そうしてほしいよまったく、あんなにみだれちゃまともしほねえや。」

浅間「なっ！」

イガラシ「ハハハ……そりやいかった、いかった。」

松下「……」

部員「……」

イガラシ「あのねえいいたかないけど……やつぱりいまのうちにデッドボールでもなん

でもいいから得点をあげておいたほうがいいんじゃないですか、あんなたちの力じゃとても打てませんよ。い、いけね。」

松下「ほら、これなんスよ。」

審判「きみたちどうしたんだね。」

谷口「すみません。」

審判「プレイボール！」

井口の谷口への一球目はまんなかにきた。谷口は思いっきりバットをふるがバックネットにぶつかるファールになってしまった。谷口の手にはしびれがのこり、井口のタマが速くてももいことをかんじとった。谷口は二球目をレフト前にクリーンヒットするも、墨谷の走塁ミスと江田川の外野からのボールを中継したピッチャー井口の好判断でダブルプレーとなってしまふ。

審判「アウト！ チェンジ！！」

高木「や、やるなあ、あのピッチャー。」

島田「う、うむ。」

谷口「みんななめてかかっちゃダメじゃないか！」

高木「すみません。」

谷口「いま打ってみてわかったんだが、きみたちが考えているようなピッチャー

じゃないぞ。イガラシがいつてたようにもしあのタマがきまりでしたら、き

みたちには打てないよ。いいかつぎの回からはイガラシの忠告どおり、デッ

ドボールでもなんでもいいから得点をあげるんだ！」

部員「……」

谷口「さあ、がっちりこうぜっ！」

部員「……」

ナインは元氣なく守備につく。この回江田川中は四番からの攻撃でバッターは井口だった。それをみてベンチにいたイガラシはタイムをとり、サードを守る谷口のところへかけより敬遠し

たほうがいいとつげる。ナインはマウンドにあつまってきた。

谷口「ちよ、ちよっと、あのバッター敬遠しよう。」

松下「け、敬遠……」

丸井「よ、よしましようよ、江田川あいてに敬遠なんて。」

谷口「しかしかれには一発長打があるらしい……」

松下「それもイガラシの忠告ですか……」

谷口「なにをいつてる、かれをいちばんしっているのはイガラシじゃないのか！」

部員「……」

松下「わかりました。敬遠すればいいんですね。」

谷口「い、いや敬遠しないまでもいちおうくさいとこをついてみてよ、くさいと

こね……」

松下「はあ。」

審判「プレイボール！」

松下「やれやれなんだって一年生のいうことにいちいちふりまわされなきゃなら

ないんだ。いいかようくみとけっ！」

イガラシの忠告でマウンドにかけよったナインだったが。ナインのイガラシにたいする反感は予想以上で谷口はあいまいな返事でサードにもどった。

ピッチャー松下が井口にむかつて投げるが、ワンストライクをとったあとの二球目をライトスタンドにはこぼれホームランとされてしまった。谷口はドンマイドンマイと松下に声をかけるが、これは自分の責任だもつとはつきりと敬遠しろというべきだったと後悔する。キャプテンがあいまいな態度じゃないけないと気がついた。

しかし谷口がそれに気づいたときはすでにおそかった。江田川のピッチャーは予想いじょうにたちなおりがはやく、イガラシの忠告どおり豪速球をきめはじめた。いっぽう墨谷二中も一点こそゆるしたもののていねいなピッチングと好守備でそれいじょうの追加点はゆるさなかった。

3・4 最終回の攻撃

審判の声が高くひびいた。「ストライクバッターアウト!」

部員A「こりゃ、いよいよダメだな……」

部員B「まさか予選の一回戦でつぶれるとは……」

井口「へっへへへ、あとふたりね。」

審判の声が高くひびいた。「ストライク!」

谷口は自分の決断力のなさをこっかいしていた。そしてベンチでなにかうつてはないものかと考えていた。弱気になるな! なにかないか! なにか!

イガラシ「あーあ、どうでもいいけどみじめだねえ、二回から塁にでたのはキャプテンと左の加藤さんだけだもんな。」

部員「……」

イガラシ「い、いけね、またいつちゃった。」

谷口「……」

谷口が何かに気がついたように顔をあげイガラシの方をむいた。
審判の声がまたひびいた。「ストライクツー！」

谷口「タ、タイム！　ちよつとバッター！」

井口「どつたのバッター、いまさら往生ぎわがわるいんじゃない。」

高木「わかりました。」

谷口「たのむぞ！」

井口「……」

遠藤「あれ……、左にたつちやつた。」

イガラシ「な、なるほど。」

丸井「どういふことなんスカヤプテン？」

イガラシ「まあ、だまってみてなさいよ。」

井口「……」

左にたつたバッターになぜか井口は投げにくそうである。ボールがふたつつづく。

遠藤「どういふことだ急にみだれたしたぞ……」

丸井「う、うむ。」

谷口「どつして左だとコントロールがみだれるんだ？」

イガラシ「むかしからあれがやつの弱味なんですよ、しかしちよつとおそすぎたかも……」

審判「ストライク、バッターアウト！」

イガラシ「ねっ。」

谷口「きみも左にたつてくれ。」

松下「は、はいっ！」

審判「デッドボール！」

松下「おいでて……」

部員「やったーっ、チャンスとっらい！ キャプテンたのみますよっ！」

父「がんばれタカオツ！」

谷口「と、とうちゃん！」

父「勝つも負けるもおめえの一打にかかっているんだぞっ、ここでおまえがうつたらとうちゃん、タイヤきでもカツ井でもおめえのすきなものハラいっばい
くわせてやるぞっ！」

谷口「よ、ようし、みててくれとうちゃん！」

ベンチとスタンドからの声援をせなかにうけ谷口は右打席に入った。江田川のエース井口との勝負である。ランナーの松下に盗塁のサインをおくった。守備の悪い江田川の弱点をつくためである。

「ストライク！」

江田川バッテリーはランナーには目もくれず、バッターのみに集中した。

「ストライクツーッ！」

そのあいだにランナーは三塁まですんだ。次の球が勝負球である。

井口は全力の豪速球を投げた。カーン、谷口のバットから快音が聞こえボールはグイグイのびていく。「やった同点だ！」ベンチからスタンドからいっせいに声があがった。ボールは右中間をてんとしライトとセンターがボールをおう。外野から内野にボールをもどそうとしたとき中継ミスもあり、谷口は三塁をまわってホームをねらう。ボールがホームにかえってきた。谷口がすべりこむ。判定は？

「アウト!!」

審判の声がひびいた。ところがキャッチャーのミットからボールがこぼれおちている。

「いや、セーフ!」

こうしてなんとかキャプテン谷口にとっての地区大会一回戦は勝利をおさめた。一試合終わって谷口はからだのつかれよりも、キャプテンとしてチームをまとめていかなければならない精神的なつかれをかんじていた。

3・5 試合後のミーティング

小山「では、きょうの試合の反省会をはじめ。まず感想をキャプテンからおねがいします。」

谷口「こ、こまつたな、にがてなんだよこういうの、えー…みなさんのおかげで初めての試合に勝つことができました。」

谷口「でも一年生のイガラシくんのアドバイスがなかったら勝てなかつたとおもいます。ほんとうにありがとう。」

イガラシ「お礼なんていいですよ、それより試合にだしてほしいですね。」

谷口「いいとも、力さえあればいつでもだしてあげるよ。」

一年生A「試合だつてさ。」

一年生B「いいな〜っ。」

イガラシ「草むしりやタマひろいしかさせてくれないのに、どうして力がわかるんですかね。」

谷口「なかなか自信があるな、その気があるならいつでもみてあげよう。」

一年生A「あ、あのうぼくたちもいいですか？」

谷口「いいとも！」

一年生A「お、おいっ！」

一年生B「うん。」

谷口「がんばれよレギュラーになれるかもしれないぞ。」

一年生B「そりやがんばりますとも！」

一年生C「なっなっ。」

松下「ちよっとまってください。キャプテンは途中から転校してきたからごそんじ

ないとおもいますが、一年生はたとえどんなにうまくても九月まではレギュラーとしてつかわないという規則があります。」

谷口「どうしてなんだ。みんなこんなにやりたがっているのに。」

島田「その期間はチームになじませるということとどうじに基礎体力づくりをする事になつてゐるのです。それにまだ一年生ではわれわれのレギュラー練習にはついてこれないとおもいます。」

イガラシ「やってみなくちゃわからないですよ。」

島田「な、なんだとこいつ。」

谷口「ちよっとまでよ……だけど江田川のピッチャーは一年生だったじゃないか。」

高木「あれは例外ですよ。」

浅間「からだつきからしてちがうじゃないですか。」

イガラシ「ハハハ、野球っからだつきでするんだって。」

浅間「こ、こいついわせておけば！」

高木「よせ、かまうな！」

谷口「きょうの江田川をみておもうんだが、一年生にチャンスをあたえてやってもいいんじゃないか。」

3・6
帰り道で

小山「かりに一年生の中にレギュラーになれる者がいたとしても、いまから特定の人間をつくってはなにかとチームワークづくりに支障をきたすとおもいますが……とくにいまはチームワークづくりにたいせつな時期ですからね、なんといつてもうちのばあいチームワークのよさが原動力だとおもいます。」

谷口「……」

小山「いえ、もちろんそれはキャプテンがきめることですけど。」

谷口「考えさせてくれ……」

谷口「……」

丸井「いよいよだめになっちゃった。みてください……これ。」

丸井はこわれたグローブをたたきながら谷口のほつをのぞきこむが……

谷口「……」

丸井「まだ考えてたんスか。」

谷口「丸井はどうおもう？」

丸井「そりや九月までまっただぼがいいとおもいますね！」

谷口「そうか……」

丸井「まあ、もつとも責任のない立場ですからぼくは……でもやつぱりうちのばあいチームワークが主体ですからねえ……とくにイガラシみたいのがレギュラーになつたら問題ですよ。」

谷口「なぜだ……？」

丸井「あいつ、先輩なんてへともおもちゃいないんすから！ それにひがみつば

いし口のききかたさえしらないんすからね。」

谷口「たしかに口はわるいな。」

丸井「そうおもうでしょ、ねっねっ、ぼかあきらいだなあ、ああいうの、サルといおうかラツキヨといおうかかわいげのない顔しちゃってき、あいつをみるたびにひっぱたきたく……」

そのときだった、丸井と谷口が話をしている横をイガラシが通りすぎていく。

丸井「で、でもあれでかわいいところあんだな、すきだよほかあ……」

丸井は谷口に話したつもりのイガラシの悪口をとりつくろうとしていた。

丸井「き、きこえちゃったかなあ……」

第4章 チームワーク

キャプテン谷口にとって最後の地区大会、初戦はからくも2対1で勝利した。しかし二回戦の組み合わせがいつもきまって決勝に進出している金成中に決まってしまった。

4・1 野球部の練習中

丸井「キャ、キャプテンちよつと。」

谷口「なんだ？」

丸井「それがたいへんなことになっちゃいましたよ。あ、あのおどろかないでく

ださい。第二戦のあいてなんスが……」

谷口「じよ……、じようだんじやない……」

松下「どうかしたのか丸井？」

丸井「第二戦に金成中とあたるんスよ。」

松下「えっ、ほんとかそれ！」

小山「二戦までとは……、ついてないなおれたち。」

谷口「……」

松下「丸井、ざんねなんだつたな、せっかくグローブを買ったっていうのに。」

谷口「丸井、一年生をあつめてくれ。」

丸井「は……はい。」

谷口「レギュラーになりたい者はまえにでろ！ テストをする。」

一年生A「お、おいレギュラーだつてさ。」

一年生B「う、うん。」

イガラシ「そうこなくっちゃ！」

一年生A「お、おれもどうか、どうせダメだけど。」

一年生C「お、おれも。」

一年生D「じゃぼくもついでにでちゃおうかなーっと。」

二、三年生の部員はそのよつすをにらむようにじっと見つめていた。

一年生C「や、やつぱりやめとこ。」

一年生A「ぼくも……」

一年生D「エヘヘ、アハ……」

イガラシ「やれやれ、どいつもこいつもビクビクしやがつて！」

谷口「イガラシだけか……、ま、いいだろう。まずバッティングからだ。松下投げてくれ。さあみんなも守備について。」

松下「なんだ、なんだ、おまえたち、おれが打たれるとおもってんのかよ！」

島田「それもそうだな。」

遠藤「わりい、わりい。」

谷口「よし、はじめっ！」
松下「ふふ…一年生ごときにおれのタマが打てるとおもってんのか。」

ピッチャーの松下は自信をもってイガラシにむかってボールを投げはじめののだが……。カーン。

松下「あ…」

一年生B「すっごいセンターオーバーだ！」

一年生C「それもライナーでフェンスにぶつっちゃって。」

カーン、カーン、カーン。イガラシは松下の投げるボールをことごとくバットのしんにあてうちかえした。

松下「はあ、ふう、はあ、ふう…」

イガラシ「もう、いいんじゃないですか…」

谷口「よ、よしつぎは守備だ。得意なポジションはどこなんだ。」

イガラシ「得意っていわれても、よわったな……」

谷口「な、ないのか。」

イガラシ「いえ、ひととおり全部やってきたもんで。」

一年生A「ぜんぶだつてさ、すっごい！」

イガラシ「ま、しいていえば内野かなあ。」

谷口「よし、じゃあやってみる。」

谷口がノックしての守備練習がはじまった。イガラシはここでもすばらしい守備をみせた。

谷口「ようし、そこまでだ！」

イガラシ「どうです、レギュラーになれますかね？」

谷口「もちろんだとも。」

イガラシ「でもいいんですか…」

イガラシがゆびさした方には二、三年生のレギュラーがにらみつけるようにして見つめている姿があった。

谷口「そんなこといつてられる場合じゃない。」
イガラシ「ヘーッ。」

4・2 谷口の家で

谷口はイガラシをレギュラーにするために、だれをレギュラーからはずそうか一人なやんでいる。

父「タカ、なん時だともってんだ、いいかげんにねえか。」
谷口「う、うん。」

父「しんこくな顔しやがって、いつてえなにをやつてんだ。」

谷口「ひとりうまいのがいて、第二戦につかいたんだけど……だれをおろすかまよっているんだ。」

父「みんなにたりよったりなのか？」

谷口「実力からいえばはつきりしているんだけど……」

父「じゃ、なにも考えることはねえだろう。」

谷口「でも……レギュラーからはずされる本人の気持ちになると……」

父「なにいつてんだ、なにしろ試合にかたなけりやならないんだろ。」

谷口「そりゃ……」

父「人の上にたちやそういうこともあるさ、そこがキャプテンのつらいところよ。」

谷口「……」

4・3 次の日の練習

グラウンドに部員全員をあつめてメンバーの変更がつけられようとしている。昨晚おそくまで考えたためか谷口の目が赤い。丸井はそのことに気がついていた。

谷口「第二戦にそなえてオーダーを一部変更する。」

部員「……」

谷口「丸井のかわりにセカンドをイガラシに守ってもらう！」

丸井「え……」

部員「……」

丸井「いいんだ、どうせぼくがいちばんへたっぴいんだから……。どうせこうなるとおもっていたんだ。」

谷口「さあ、みんな守備につけ！」

イガラシ「オーライ、セカンドはまかしといてください。」

ナインはベンチにさがった丸井のことが気になって練習に集中できない。

谷口がノック役で守備練習がはじまった。

イガラシだけが大きなこえをだして元気にプレーしている。

谷口「いくぞ！ ショート！」
高木「オ、オウ…」

ショート高木とセカンドイガラシとのダブルプレイ練習がはじまったが高木のイガラシに対する送球がややそれたタマになってしまう。

谷口「ショート！ 送球がわるいぞ！ もういっちょ！」
高木「オ、オウ…」

今度も高木のイガラシに対する送球はややそれてしまった。

イガラシ「ちよっとう、このへんに投げてもらえませんか。ファーストへの送球がワンテンボおくれますからね。」
高木「う…」

イガラシは胸をおさえながら高木に向かっていった。

谷口「もういっちょ！」

ショート高木はゴロをはじいてしまう。セカンドイガラシがそのはじかれたタマをバックアップしてセカンドに送球しようとするがセカンドにはだれもない…

イガラシ「どつしたのセカンドにはいつてよ！ ぼくがカバーしたときはショートがはいってくんなくちゃ。」

イガラシ「まったく野球をやってんのかね！」

高木「く…こ、この…っ！」

セカンドに帰ろうとしながらイガラシはひとりごとのようにつぶやいたことばにショート高木はイガラシをうしろからおしたおしてなぐりはじめた。

谷口「な、なにをするんだ。」

遠藤「あーあー…」

谷口「練習中に暴力をふるうとはなにことだ！」

高木「だ、だってこいつ一年生のくせにナマイキなことばかりいつて…」

谷口「ブレイ中には先輩も後輩もない！」

高木「くっ…」

谷口「第二戦も近いというのにダメじゃないか！」

高木「はい。」

谷口「さあみんなも練習だ、練習だ！」

もめごとがあつたがナインは練習を開始した。そんな練習風景を見ることがなくベンチにはうなだれてすわっている丸井の姿があつた。

4・4

練習後部室前の手洗い場で

小山「はーっさっぱりした。」

島田「くたびれたなあ。」

松下「それより腹がへって死にそうだよ。」

加藤「丸井、なにつつたってんだよ、はやくあらえよ。」
丸井「い、いいんだ、ぼくなんかあとで……」

そういつて丸井は一人さきに部室の中にはいつてしまった。

松下「かわいそうに、すっかり気をおとしちゃってよ……」

島田「まったくなあ……」

加藤「しかしキャプテンもちよつとつめたかないか。そりや金成中が強いってんでイガラシをレギュラーにいられたのはわかるよ、でも丸井はどつなるんだ。セカンドを守るためにこの半年間、一生懸命練習に練習をかさねてきたっていうのによ。」

島田「そういや、グローブまで新調したっけな……」

加藤「いくら勝ちたいからって、おれはキャプテンのやりかたには反対だな。」

小山「そうだな……」

松下「おれも気にいらないね。」

加藤「みんなでキャプテンに抗議しようじゃないか。」

島田「うむ……賛成だ。」

松下「よし、いこういこう。」

そのとき部室のドアがあいた。

松下「丸井……」

丸井「みんなキャプテンのことをなんだとおもってんだ、かんたんに抗議だなんてきめちゃっているけど、キャプテンだってよく考えて決定したことなんだぞ。」

島田「そりやそうだろうとおもっけど……、いいのかおまえ。」

丸井「いいわけないだろ、そりゃおれだつてレギュラーでいたいし試合にだつてでたいよ、しかしキャプテンになつてくれとたのんだのはおれたちみんなじゃないか、そのキャプテンを信じられないのかよ。」

部員「……」

そのときグラウンドからイガラシがやってきて部室の中にはいるうとしていた。

イガラシ「丸井さんて、いい人なんだね。」

丸井「う、うるせえ！ てめえなんてだいつきらいだ！ あっちにいけ！」

イガラシは部室のドアをバタンとどした。

キャプテンの谷口は部室の陰で部員のようすを見もつていた。谷口はばらばらになりかけたナインの心をひきとめた丸井に感謝するとともに、レギュラーからはずされた丸井のためにも第二戦の勝利をちかうのであった。



4・5 金成中のデータ野球

試合前だというのに金成中はなにやら新しくレギュラー入りしたイガラシの性格を調べている。試合前の金成中のベンチの中では……

「かれは、短気ですね。」

「しかし、試合直前にメンバーをかえるなんて不安定なチームですね。」

「それに、あんなチビにそれほど実力があるとはおもえないけどなあ。」

「かつてなこと言わないでください、あの決断力に欠ける谷口がナインの反対をおしきって起用したですよ！」

金成中のノートにはぎっしり墨谷ナインの特徴が書いてあった。

谷口「いいか、敵は地区予選でいつも決勝に顔をだしている金成中だ、負けても

ともと、胸をかりるつもりでもいっきりぶつかつていこう。」

部員「オウ！」

金成中との試合がはじまった。先攻は墨谷、一番ショート高木、ピッチャー松下、そしてこの試合から丸井にかわって出場しているセカンドイガラシ、三人ともいいあたりをするが金成中の好守備もあって三者凡退にしりぞけられる。

その裏今度は金成中の攻撃である。ミートを主体にした確実な攻撃で1点を先制するが谷口、イガラシ、加藤とわたるダブルプレイでピンチをきりぬけた。

金成中の攻撃は守備の華麗さとはまるで逆であった。ランナーが一塁にいればバントでセカンドに送り、それをなんとかものにするという地味だが確実な点のとりかたをした。いっぽう墨谷二中のバッティングは目をみはるようなあたりばかりだった。しかしその攻撃も金成中のすばらしい守備にまつたくはばまれていた。

七回まですすんで5対1と金成リードで墨谷の攻撃をむかえた。金成中は墨谷二中を徹底的に調べ、わざと相手の好きなコースにボールを投げ、たとえいいあたりをされても前もって守備の位置を動かしておきアウトにするという作戦だった。

島田「キャプテン、どこに打ったらいんですか、おれ、頭いたくなってきた。」

谷口「そうだな……おまえはセンターまえにかえすのがとくいだから……」

小山「セーフティバントはどうでしょう!」

加藤「それより内野の頭をこすってのは……」

谷口「みんなためしてみたじゃないか、うーんなんかいいアイデアがないかなあ。」

うーん……」

小山「うーん……」

加藤「ああすればこつくる……」

谷口「ちよつとまで、おれたちさつきからいったいなにをやってるんだ、野球をやっているんだぞ、野球をつ!」

小山「……」

島田「……」

小山「そついやあ、まるでクイズがつめ将棋をやっているみたいだな。」

加藤「ほんと、おれ頭がかゆくなつちまったよ。」

谷口「もう小細工なんかやめておれたたちの野球をやるう、おもいきり打って、おもいきり走って、それで負けるのならしかたないじゃないか。」

イガラシ「そこなくっちゃ！」

松下「しかし、おれたちが細工をするまえだつてあのいいタマをおもいきりふつてたんですよ。」

島田「そうですね、それが打つとこ、打つとこあつまってきたさ……」

谷口「だったら、それいじょうの打球でこたえてやるうじゃないか。」

島田「しかし……」

谷口「いまさらあわてて策をたてたつて、むこうは策にかけちゃ一枚も二枚もうわてなんだ。ズルズルとむこうのペースにまきこまれるだけだ。」

小山「それもそうだな。」

島田「金成のペースにひきづられて、墨谷ほんらいの野球をわすれるなんておれたちもだらしがなかったな。」

松下「ようし、いっちょおれたちの野球をやつたらうじゃないか！」

部員「オウ！」

島田「やるぞ、くそっ！」

守備位置を相手を変えてくるので作戦をいろいろ変えた墨谷だったが、谷口のことばで守備位置を意識しないで打つ作戦にもどった。島田はいいあたりをするもセンターフライ、加藤もライトフライに終わった。アウトになるたびに金成中ベンチからは「ナイスバッティング！」という声と笑い声、そして拍手。ナインはくやくしてくやくしてたまらない思いをする。とうとう松下はベンチにあつたバケツをおもいっきり投げてしまった。

高木「おい、ものにあたりちらすのはよせよ。みじめさをさらけただけだぜ……」

松下「なにい…」

谷口「やめろよ。」

イガラシ「くそう…、もう、あ、あの連中ぶんなくってやるっ！」

丸井「おいイガラシ、なんのためにおれとレギュラーをかわったんだ、ケンカをするためかっ！」

イガラシ「……」

丸井「そんなにくやしかったら、くやしさをそのままボールにたたきつけるよ！」

イガラシ「す、すいません。」

浅間「くやしかったら、ボールにたたきつける…か、ようしこいっ！」

しかし浅間のあたりももう少しでヒットになりそうになるが好守備でアウトとなる。やはり金成中からは「ナイスバッティング！」という声が墨谷ベンチにかかる。

4・6 静かな墨谷ベンチ

そして九回をむかえた。得点は6対1で金成中リード。墨谷ベンチはしずまりかえっていた、それはあきらめのためでなく、くやしさのためにだれひとりとして口がきけなかったのである。先頭のショート高木は金成が予想した守備位置をもつすこしでぬけそだったが取られてしまった。だがだんだんと打球がのびてきた。

次の松下もバットをおもいつきりふった。墨谷応援席から歓声があがる。相手が予想してた位置よりもふかく、ボールはライナーでとび二塁打となった。さらにイガラシ、谷口とつづく……

イガラシ「ようし、みてる…丸井さんのためにもぜったい打つ！ さっ、こい！」

「カーン！」

イガラシの打球はライナーでフェンスにぶつかり二塁打となった。

谷口「つつくぞ！ イガラシッ！」

「カキーン！」

打球にのびのでてきた墨谷二中のバツティングはすさまじかった。金成中の守備位置の移動がかえって墨谷二中に屈辱をあたえて、墨谷ナインを爆発させてしまったのである。守備位置の移動だけでははかりしれない力のおそろしさによつやく金成中は気がついたが、もはや時おそく墨谷二中のあいてではなかった。

第5章 決勝戦にむけて

キャプテン谷口にとって最後の夏の大会、苦しみながらも勝ち進んで、とうとう学校はじまつてはじめて地区予選の決勝戦にすむことができた。とくに準決勝は延長戦のすえ隅田中を倒しての勝利だった。

5・1 野球部の練習中

生徒A「まったく、すごい人気だな。」

生徒B「そりや、なんたつてうちの野球部が地区予選の決勝に進出したのははじめだからな。」

ナインはフリーバッティングの練習をはじめた。

ファーストの加藤のところにあがったボールをピッチャーの松下、ライトの島田がとりあうようにボールに向かっていく。

加藤「オーライ！」

松下「オーライ！」

島田「オーライ！」

加藤「わっ、いてえな、このー！」

谷口「なにをやってるんだ、いまのはファーストのボールだぞ！」

生徒C「みんな、はりきっているなあ！」

生徒D「そりや、青葉学院と対戦するんだもん、とうぜんだよ。」

生徒C「青葉っていえば日本一も同然だからな。」

生徒D「対戦できるだけでもしあわせだよ。」

決勝で対戦する青葉学院はここ数年たてつづけて全日本大会で優勝しており、地区代表は青葉学院がい考えられないほど強いチームであった。

加藤「ナイス、セカンド！」

校長「おおっ。」

生徒C「やるーっ。」

校長「だれかね、あのセカンドを守ってる生徒は？」

生徒C「いやだなーっ、知らないんすか校長先生。イガラシって一年生ですよ。」

校長「ほう、一年生でレギュラーをつとめておるのかね。」

生徒C「守備も、バッティングもばつぐんですよ。なにしろ二年生の丸井がはずさ

れたくらいですからね。」

生徒D「よせよ！」

話をしているところをイガラシがいったためにレギュラーをはずれた丸井がうつむきながらバットをもってあるいていく。

生徒C「あゝ、き、きこえちゃったかな…？」
生徒D「レギュラーをはずされてからあまり元気がないからな。」

5・2 練習後の部室で

部室の前の手洗い場ではナインが練習の汗をおとしている。

高木「いやー、きょうもきつかったなあ。」

松下「なにいつてんだこのぐらいやんなくちゃ、青葉といい試合なんかできないぞ。」

高木「わかつてるよ、そりゃ負けるにしてもいい試合だけはしたいからな。」

島田「そうよ。」

部室の中では丸井が退部届けを持って、いつキャプテンにとどけようかなんでいた。そこにナインよりもさきに谷口がはいってきた。

谷口「なんだ、丸井ここにいたのか。ちょっと相談したいことがあるんだ…」

丸井「ぼくもキャプテンに話があるんです。」

谷口「なんだ話って？」

丸井「どうぞ、キャプテンおさきに。」

谷口「じつはナインのことなんだが…、どうもほんとの青葉がわかっていないようだ。このさい青葉の練習を見学させようかとおもってな。」

丸井「はあ…。」

谷口「かといって青葉の練習をみて、ナインが自信をつしなってもこまるしなあ。」

丸井「そんなにすごいんですか？」

谷口「まあ……」

丸井「だったら、みせたほうがいいんじゃないスカねえ、みんな青葉といい試合がしたいっていつてるんですから。」

谷口「うーむ。」

そこに部員が汗をながしおえて部室にはいつてきた。

松下「あれ、ふたりともまだそんなかつこうしてんですか。あいてますよ手洗い場。」

谷口「みんなちよつときいてくれ、あ、丸井、おれに話があつたんじゃないのか？」

丸井「い、いえ、いいんす。」

谷口「あすは、青葉へ見学にいくぞ。」

松下「いいですね、敵情視察ですね。」

島田「おれ弁当もつていこつと。」

部室の外で丸井が退部届けをもつて考え込んでいる。

丸井「キャプテンも決勝をまえにたいへんなんだなあ、退部届けはおりをみてわたそつ。」

5・3 青葉学院見学

次の日、バスにゆられて青葉学院までやってきた。バスの中で谷口はあまり部員と話をせずにつつまきかげんにすわっていた。

バスが青葉学院についた。

松下「なつかしいでしょキャプテン！二年ちかくもかよったんですから。」

谷口「まあな……」

松下「青葉学院っておもったより小さいですね。」

谷口「ここは野球部の寮だ。」

部員「寮……？」

谷口「青葉は野球の名門だ。そのため部員は全国各地からあつまってくる。だから寮が必要なんだ。」

部員全員あぜんとしてキャプテン谷口の話をきいていた。

ナインはグラランドにはいつてまた驚いた。青葉のグラランドはまるでプロなみの設備と陣容だったからである。

谷口は昔顔なじみの吉田をみつめて青葉の部長に見学の申し出をした。

谷口「あ、あのう墨谷二中の谷口といいますが見学させてほしいんです。」

青葉部長「スミヤ……？ たしかうちと決勝でぶつかるんじゃないかな？」

谷口「は、はいっ！」

青葉部長「そうか、みんながんばったね。まあゆっくり見学していきなさい。」

谷口「ど、どうも。」

青葉部長「吉田、ベンチに案内してやれ、あそこならゆっくり見学できる。」

青葉の部長は谷口の顔をおぼえていないようだった。

青葉の練習はあまりにもすごかった。バッティングピッチャーの投げる球の速さもそうだがその球をバッターはかたんに外野スタンドにまではこんでいた。そのすごさにおどろきながらも墨谷ナインは青葉の練習をみていた。

青葉部長「ようし！ 二軍の練習はそこまでだつ。補欠はグラウンドの整備にかかれ！」

加藤「に、二軍だつて……」

部員「……」

そこに青葉のレギュラー選手がグラウンドにはいつてきた。

5・4 青葉学院見学後、部室で

谷口「みんな、きょうの見学で青葉がよくわかったとおもう、それでこれから

このスケジュールでやってほしい。」

小山「ふへっ。」

松下「朝、四時からだつて……」

遠藤「しかし、ただ練習時間をながくしたつてからつて、そうきゅうにつまくなるとはおもえませんが……」

高木「そうですよ！」

イガラシ「やらないよりましでしょ！」

遠藤「そ、そりやそうだけだよ。」

谷口「ただしこれからはシートノックもフリーバッティングも定位置の半分の距離からおこなう。」

5・5 練習中

きびしい練習は雨の日もつづけられた。はじめての決勝戦進出ということでおおぜいいた見物人もあまりの練習のはげしさに、みるにたえかねだれもいなくなった。

谷口「みんな、よくやったなあ。半分の距離からなんとか捕球できるようになっ

たじゃないか」

小山「おかげさまで。」

松下「苦しかったけど、やればなんとかできるものなんですネ。」

谷口「そのとおりだ。それできょうからは三分の一の距離にちぢめる。」

部員「え……」

松下「は、半分だって……そんな、いくらなんでもむちゃですよ。」

谷口「まともに青葉と試合をするにはこれしか方法はないとおもっただけど。」

イガラシ「ないね、これしか。」

加藤「それもそうだな、このままじゃいい試合どころか足もとにもおよばないぜ。」

高木「うむ。」

小山「ようしみんなやろっじゃないか。」

松下「やろっ、やろっ！」

島田「あしたからがんばろっぜ！」

イガラシ「ブッ！」

谷口「あしたからじゃない、いまからだ！」

高木「だってもうタマなんかみえませんよ。」

谷口「タマがみえなくてもすぶりはできる。」

5・6 練習後の部室

ナインは今日の練習でできたケガのであてをめいめいしている。

加藤「まだか、ぬれタオル。」

島田「うわっちっち！」

高木「そーっとだぞ、そーっと。」

谷口「みんなとれるまでつづけるぞ。みんなあすもはやいがおくれるな！」

そういつて谷口はナインよりもさきに帰った。

小山「そ、そんな。」

松下「半分でどうにかやつたっていうのに、いくらなんでもむりですよ。」

谷口「青葉のナインとはからだつきからしてちがうんだ、二倍も三倍もやらないと負けちゃうよ！」

松下「ま、負けちゃうって……、勝つつもりなんですか……？」

谷口「なんだ、おまえ負けるつもりで練習してたのか？」

松下「え……？ い、いや、そういうわけじゃ……：……よわったねどうにも。」

イガラシ「ああすつきりした。いい試合ができりや負けてもいいなんてきいちゃうと、どうにも練習に身がはいらなくって。」

部員「……。」

イガラシ「さあキャプテンはやいとこはじめましょう。」

谷口「さあみんなもはやく守備につけ！」

部員「えーい、どうにでもなれ！」

高木「ちゃつ、まったくキャプテンがうらやましいぜ……ただノックさえしていりゃあいいんだからな。」

小山「みてくれこのアザ……」

遠藤「おれなんて三本もつき指だぜ。」

島田「おれたちだつて生身の人間だ、ちつとは考えてほしいよ。」

浅間「ほんとになあ……」

小山「こんなことつづけていたら、試合までにぶっこわれちまうよ。」

遠藤「まったくだ。」

松下「試合まえにこわれちまったらもともこないぜ。みんなキャプテンに抗議しようぜ！」

加藤「そうだ、そうだ。」

イガラシ「すきだね、抗議が……」

小山「松下よせよ、こんなバカあいてにするの、それよりはやくいこうぜ。」

あやうく松下とイガラシがケンカしそうになったが、小山が中に入りことなきをえた。ナイはきがえをすませて谷口の家までむかった。もちろん猛練習の抗議をするためである。部室にはイガラシ一人だけぼつんととりのこされたかっこうになった。

イガラシ「まったくどうやってあんな連中をキャプテンはここまでひっぱってきたんだろつ。」

5・7 谷口の家

イガラシをのぞくナインが谷口の家に来た。丸井も特訓には参加してなかったが、きのうわたしそこねた退部届けをもってみんなといっしょについてきた。

部員「こんばんはーっ。こんばんはーっ。」

母「おや、タカオの友だちかい？」

松下「あ、のう、野球部のもですがキャプテンいますか。」

母「タカオなら御岳神社にいつているよ。」

松下「御岳神社……？」

母「ここをまっすぐいったつきあたりだよ。」

部員は谷口の母親からつけられた道を歩きはじめた。

加藤「神社なんかになににいったのだろう？」

松下「青葉に勝ちますようになんて願をかけにいったんじゃないか。」

神社にちかづくとなにやら音がきこえてくる。

「ズン！」「バキ！」

父「ほら、しっかりしろっ。」

谷口「うーっ。」

そこでは谷口と父親が練習をしていた、父親の手づくりマシンからくりだすタマを谷口がとろうとしていた。

加藤「キャプテンじゃ……」
松下「しっ。」

加藤が谷口に声をかけようとすると、松下にとめられる。ナインは谷口と父親の学校以上のきびしい練習にあつとうされる。

父「いくぞっ。」

谷口「く、くそっ。」

父「だいじょうぶかタカ！　いくらなんだってちょっとむちゃすぎじゃねえか。」

谷口「お、おれみたいに素質も才能もないものはこうやるしか方法はないんだ。」

父「しかしなあ……」

谷口「さあつづけてよとっちゃん。」

けつきよくナインは谷口に声をかけずにきた道をひきかえしはじめた。

松下「お、おれたちのコーチにおわれてこんなところで練習してたんだ……」

部員「……」

加藤「おれ家までランニングしよっと。」

松下「お、おれも！」

小山「おれも！」

島田「おれも！」

丸井「……」

丸井は一人神社のまえにとりのこされてしまった。ポケットにいれてあった退部届けをだしてじっとみつめている。

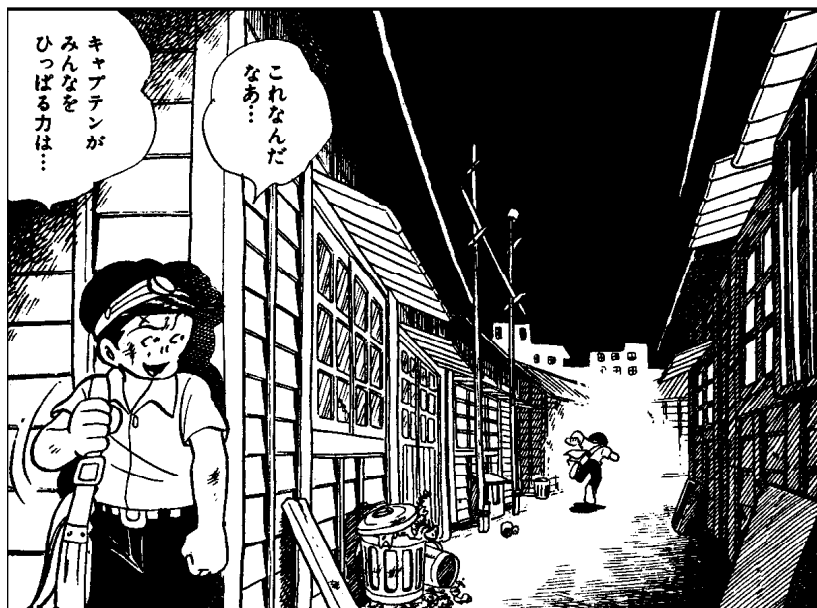
丸井「く、くそっ。」

退部届けをビリビリにひきさき、地面にたたきつけた。そしてナインの後をおうように走りだした……。

このようすをとくからみている一人のすがたがあった。

イガラシ「これなんだなあ…、キャプテンがみんなをひっぱる力は…。」

イガラシはナインに気づかれることなくそつとあとをつけてきたのだった。



第6章 対決青葉学院

墨谷二中にとってはじめて体験する地区予選大会決勝戦、対青葉学院との決戦の日がやってきた。全日本野球大会への進出をかけた一戦である。

6・1 対決の朝

谷口「さあて、いよいよ青葉と決勝戦だ！」

谷口は起きるとまくらもとにおいてあったバット、グローブ、ユニフォームを確認した。昨日は緊張のためかあまりよく眠れなかった谷口だったが、目ざめはよかった。待ちに待った決勝の日がやってきたからである。

となりの部屋から両親の声がきこえてくる。

母「ぼちぼちおこしたほうがいいんじゃないのかい」

父「よせ、ゆうべはあまりねられなかったみたいだから。タ力のやつよつぽど緊張してたんだろな、夜中に三度もトイレにいきやがってよ。」

母「そういうとうちゃんは、四度もいったじゃないか、まるで子どもなんだから。」

父「ということは、おめえもねてねえってことじゃねえか。」

母「とうちゃんじゃあるまいし、あたしやめざとい夕チなんぞでね！」

父「ぷっ！」

谷口「おはよう！」

母「なんだい、おきてたのかい、はやく顔をあらってきな！」

谷口「すごいごちそうだね。」

父「あたりめえよ、決勝戦だからたっぷり栄養をつけなくっちゃな！　みる、弁当だってデラックス版よ、おめえのすきなりのまきだのおいなりさんがどうちやうよ。」

母「ちよつと、とうちゃん、なんだいそりや……」

父「これはおチャケ……」

母「バカだね、お花見じゃないんだよ。じゃあ、あたしもお茶もっていこつと。」

父「なんだ、おめえもいくのか？」

母「あたしがいつてわるいのかい？」

父「い、いや、そういうわけじゃねえけどよ。」

谷口「ただでなく父、母ともにこの日を楽しみにしていた。」

6・2 選手更衣室

広い選手更衣室をふたてにわかれて墨谷と青葉がユニフォームにきがえている。青葉学院のほうでは墨谷ナインのようすをみながらなにやら話をしている。

二軍遊撃「なんだ。あいつらのユニフォームボロボロじゃねえか。」

二軍左翼「うちとやるってんでそうとう練習したんだろう。」

二軍遊撃「そっぴゃあ、こないだけんがくにきてたな。」

二軍左翼「なかなか研究熱心じゃないか。」

こちら墨谷二中は谷口が試合前の注意をナインに話をしているところであつた。

谷口「いいか、みんな決勝戦だからって緊張したらダメだぞ。いままでの練習の成果をじゅうぶんだしきるんだ……」

話をしているときに昔顔なじみだつた青葉学院の山下が声をかけてきた。

山下「よーっ、谷口じゃねえか。」

谷口「やあしばらく!」

山下「なんだおまえ墨谷にいったんか。きょうの試合にでるのか?」

谷口「ああであるよ。」

山下「へーっ、ほんとかよ出世したもんだなあ! おいちょっと、ちょっと、谷口が試合にでるんだとさ……」

墨谷部員「……」

山下は同じく顔見知りの吉田をよぶが、吉田はおおあわてで山下を墨谷ナインからひきはなそうとしている。

吉田「バ、バカなことをいうな！ 谷口は墨谷でキャプテンをつとめているんだぞ。」

山下「あ、そう、な、なにーっ、キャプテンだって！！」

山下「あ、わるいこといつちゃったかな…、ま、おたがいにがんばろうや。」

谷口をあとにして山下は青葉学院のほうにむかう。

谷口をのぞく墨谷ナインは山下のほうをにらみつけていた。

山下「おれも墨谷にいきやあよかった……」

6・3 応援席

とうとう試合がはじまる。両チーム整列し試合前のあいさつが終わった。

墨谷応援席では大きな声で墨谷ナインを激励する声がかかっていた。

「フレッツ、フレッツ、す、み、や！」

「フレフレ墨谷、フレフレ墨谷ーっ！」

対照的に青葉学院応援席はしずかである。それもそれはすだれも応援にきていないのである。全国大会優勝があたりまえの青葉にとって地区予選の決勝戦なんかは勝つに決まっている試合であり、眼中になかったのである。

ピッチャー松下が投球練習しているとき谷口が声をかけた。

谷口「その調子、その調子、おちついていこうぜ！」
松下「はい！」

はじめての決勝戦ということで松下はやや緊張している。

6・4 一回表青葉の攻撃

「プレイボール！」審判の合図でとうとう試合がはじまった。松下の一球目はストライク、じょうじょうのであしのようなものである。が、松下の投球を見てやや青葉学院ベンチでは部長をはじめとしてまどいの表情があつた。

青葉部長「なんだ、いまの…スローボール投げたのか？」
二軍捕手「さあ…」

審判「ストライクツー！」
谷口「ナイスピー、その調子だ！」

二軍捕手「べつにスローボールつてわけじゃないらしいですね。」

青葉部長「しかしまあ、あんなタマでよく決勝まで勝ちすすんでこられたな。」

二軍投手「まったく！」

青葉部長「バッター、ふりきっちゃいかん、ボールにあわせていけっ！」

ツーストライクからの三球目、バッターがはじめてバットを振った。：がレフト側スタンドに入るファール、松下のタマが遅くタイミングがとれないらしい。

青葉部長「ふりきっちゃいかんといってるだろ！」

二軍中堅「は、はあ、おかしいなあわせただけのつもりだが……」

松下の四球目やはりレフト側のファールになる。青葉のトップバッターはたまらずタイムをとり、青葉ベンチに向かう。

二軍中堅「タイム！」

二軍左翼「どうしたんだよ？」

二軍中堅「重いバットでなくちゃとてもまちきれないよ。」

バットをかえて、バッターボックスにたった。

松下からの五球目をかるくあわせて左中間にはこぶ二塁打となった。

センター浅間の返球をうけたイガラシはすでに二塁ベース上に立っているトップバッターの足の速さにおどろいた。

つぎは二番バッターである。二番バッターも初球をふりきり一番バッターと同じようなレフト側ファールにしてしまう。

青葉部長「ふりきっちゃいかんといってるだろ！ バカめ！」

二軍左翼「すみません。やりにくいね。」

二軍左翼「こんなもんかね。」

二番バッターの打球はレフト遠藤とセンター浅間とのあいだにとぶ平凡なフライだった。谷口からは「レフト！」のこえがかかる。しかしレフトとセンターがぶつかってしまい打球はグラウンドをてんとする。谷口がバックアップするが二塁ランナーはかるがるホームインし、結果は三塁打となってしまう。

応援席からは取れる打球だったので「もったいねえな…」の声があがる。

一点をとられまだノーアウト三塁のピンチがつづく…

三番打者の打球はライト前にあがった小飛球だった。島田が前進しがっちりおさえるが、とつたことに満足してしまつてバックホームを忘れてしまふ。三塁ランナーはタッチアップから勞せずして二点目のホームをふむ。

ナインの動きがぎこちないのを見て谷口がタイムをとつてマウンドにナインをあつめた。

谷口「みんなおかしいぞ、あいてが青葉だからってあがっているのか？ おれた

ちはやるだけやったんだ、リラックスしてやればこかくに戦えるんだぞ、いかみんなおちついていくんだぞ！」

部員「はい！」

谷口「さあ、バッター四番だぞ、がっちりいこうぜ！」

部員「オウ！」

四番打者もかるがる松下のタマを三遊間にはこぶが…谷口が横つとびでおさえて、すばやく一塁に投げた。

「アウト！」

応援席からは「ナイスサード！」「いいぞツーアウトだ！」の声がとんだ。
青葉学院ベンチでは…

二軍二塁「あのサードけっこうやるじゃねえか。」

二軍遊撃「うむ…」

二軍二塁「もっともあのぐらいうちでももらわないとしまらないからな。」

二軍遊撃「まあ…」

つぎの打者もセンターオーバーかというあたりだったがセンター浅間の好守備でアウトとなる。

審判「バッターアウト！ チェンジ！」

谷口「ナイスセンター、その調子だ！」

松下はマウンドでホッと息をつき、ナインからはナイスセンターの声がかかる。

青葉ベンチでは…

二軍投手「へーっ外野もいいにやるじゃねえか」

二軍中堅「うむ…」

二軍投手「おい、はやく守備にっこうぜ。」

二軍中堅「あ、そうかチェンジだったな。」

二軍捕手「はやかっただなあ。」

二軍投手「たった二点じゃ三回でコールド勝ちできないぞ。」

二軍中堅「そつだな、いままで地区予選はぜんぶ三回コールド勝ちだからな。」
二軍捕手「なんとしても三回までに11点いれなくちゃ。」

結局一回表は二点をとられて攻守交代となる。

6・5 一回裏墨谷の攻撃

墨谷応援席からは大きな声がとぶ。

「かつとばせーっ、かつとばせーっ、すーみーやーっ！」

「かつとばせ、かつとばせ、すー、みー、やーっ！」

「かつとばせ、かつとばせ、すー、みー、やーっ！」

青葉ピッチャーが投球練習をはじめた。

吉田「部長、ウォーミングアップでしずかなちゃいました。」

青葉投手が投球練習をはじめたとたん応援席が静まりかえってしまう。

「は、はい！」

「セカン！」

「ああ……」

「す、すげえ肩だ……」

またキャッチャーのセカンドへの送球の速さにもおどろいてしまう。

審判から「プレイボール」の声がかかる。いよいよ墨谷の攻撃開始である。

トップバッターショートの高木への一球目は内角ひざもとへのストレートだった。

審判「ス、ストライク！」

高木「へんだなあ、こんなはずじゃないんだが…」

二軍投手「ふふ…」

二球目もストライクだった。高木はみおくるが、ベンチから谷口がとびだした。

谷口「タイム！」

谷口はバッターの高木をよびよせる。

二軍捕手「また、タイムのはやいこと。」

高木「特訓で練習したタイミンクとちがいますね…」

谷口「バットをかえてあわせていけ！」

高木「どうも！」

二軍捕手「どう軽いのあった？ おたがいにバットで苦勞するね。」

二軍投手「ふふ…」

ツーストライクからの三球目、高木のバットからは「カーン！」という音をたてた。しかしサードゴロである。

二軍投手「あ…」

二軍三塁「おやおや、打ちやがったよ。」

一塁塁審「アウト！」

応援席からはおどろきの声があがる。

「あ、あのはやいタマを打ったよ。」

「へーっ、うちの野球部もやるなあ！」

「そっぴゃあ、そうとつきつい練習してたもんな！」

「やるーっ！」

「さすがトップ！」

青葉ベンチでも…

山下「どういことだ…？」

吉田「まぐれ、まぐれ、いままで地区予選でやつのボールにさわったやつがいたかよ。」

山下「それもそうだな。」

二番打者、ピッチャー松下は初球を打つがレフトフライとなる。

二軍左翼「あれあれ、外野にとんできたよ。」

松下「さんねん！」

応援席がいちだんとにぎわってきた…

「ま、また打った…」

「ナイスバッティング！ チクシヨウおしかったなあ！」
青葉ベンチでも…

吉田「外野にもっていかれたぜ…」

山下「やるじゃねえか、あいつら。」

二軍捕手「タイム！」

いつもと違ってがちがうので、キャッチャーがピッチャーにかけよる。

二軍捕手「どうもぜんぶ三振とはいかないようだな…」

二軍投手「まぐれにきまつてるだろう、いちいちくるなみっともない！ どうせやみくもにふってんだ。」

応援席からはつぎのイガラシに期待をかける…

「イガラシ、いっぱつたのむぞ！」

イガラシ「まかしとけて！」

二軍投手「ずいぶんちっこい三番だぜ…」

二軍投手「あ…」

イガラシは初球をバントした。ピッチャーはいひょうをつかれ、サードが処理するがイガラシは一塁セーフとなる。

「やった！ やった！」

「ナイスバント！」

「ついに一塁にでやがった！」

吉田「まぐれじゃないぜ、タマがちゃんとみえてなくちゃバントなんてできやしない！」

山下「う、うむ…」

二軍三塁「どうもようすがちがうな。」

いままでの試合と勝手がちがうことに青葉も気づいてきた。

「たのむぞ谷口！」

応援席から声がとぶ。

二軍捕手「タイム！」

イガラシ「おたくもタイムがおおいね！」

二軍捕手「いったいどうなちゃてんだ、べつにおまえの調子がわるいわけじゃないし…」

二軍投手「う、うむ…」

二軍三塁「つぎは四番だ、いちおうけいかいしていったほうがいいな。」

二軍投手「そつだな。」

青葉投手はセットポジションから谷口に投げるが、谷口は左中間をやぶる二塁打となる。イガラシは一塁からホームをねらうが…

審判「セーフ！」

「ナイス、バッティング！ いいぞ墨谷ーっ！」
応援席からは歓声があがる。

吉田「て、点をとられちゃった…」

五番小山もかかんにうつが、ライトフライとなって二塁ランナー谷口残塁となりこの回の墨谷の攻撃が終わった。

審判「チェンジ！」

二軍左翼「うれしいね、ひさしぶりにてこたえのあるチームにぶつかったぜ。」

二軍一塁「よせよ…」

吉田「点をとられたのがそうとうショックだったんだよ。」

山下「地区予選はこれまですべてノーヒットでおさえてきたからなあ…」

二軍二塁「ようし、このへんでうちの力をおおいにみせてやろうじゃないか。」

二軍遊撃「そうだな！」

一回を終わって2対1青葉リードで二回をむかえた。

谷口「がっちりこうぜ！」

この回青葉の先頭打者のあたりはセンターにぬけそうなライナーだったが、セカンドイガラシがバックハンドでとる。

青葉部長「よくとるな。」

つぎの打者のあたりをライト島田はフェンスにぶつかりながらも捕球する。

二軍左翼「ハハハ、またとられちゃた。」

サード谷口はラインぎわのボールをバックハンドでとり一塁に矢のような送球をする。

審判「アウト！ チェンジ！」

青葉部長「なかなかやるじゃないか、はやく守りにつかんか。」

二軍左翼「あ、そうか、チェンジでしたね。」

二軍捕手「三人でおわっちゃったぜ……」

二軍左翼「地区予選でこんなことは前代未聞だぞ……」

二軍捕手「みるよ、かえったらこつてりしぼられるぞ……」

二軍左翼「う、うむ……」

青葉部長「あのサードだろ、うちの二軍の補欠にいたというのは……」

吉田「は、はい。」

墨谷ナインをひっぱるキャプテン谷口の好打、好守備に、青葉部長はなぜあんなすばらしいプレイヤーが二軍の補欠だったのかわからなかった。

6・6 青葉エース登場

リラックスした墨谷ナインは特訓の成果を攻守にわたって発揮し、七回をおわったときは7対6と逆転していた。

青葉ベンチでは部長がベンチをみわたす。二軍ナインはそうすにビクビクするが…

青葉部長「佐野。」

佐野「はあ。」

青葉部長「このウラからおまえ投げろ。」

佐野「はい。」

二軍投手「ぶ、部長まってください。地区予選に青葉のエースをつかうんですか…、われわれの手でなんとかします。」

二軍捕手「そうですよ。」

青葉部長「なんとかできるか、ほんとに。」

二軍投手「い、いえ…」

二軍捕手「ど、どうも…」

佐野「しょうがねえな…、おいうけてくれ。」

一軍捕手「うむ。」

佐野「まさか地区予選にでるとはおもわなかったぜ。」

一軍捕手「まったく。」

審判「チェンジ！」

「いいぞ墨谷！ 三者凡退だ〜！」

佐野「やれやれ投球練習するひまもないのか。」
青葉部長「ピッチャーこうたい。」

松下「や、やった、ついにエースをひきずりおろしたぞ。」

谷口「いよいよ一軍のエースの登場か……」

島田「い、いまなんていったんですか？」

谷口「きみたちはしらなかったんだな、青葉にとっちゃ地区予選など二軍の試合
なれの場にすぎないんだよ。」

松下「……、というのであれば二軍なんですか？」

谷口「そうだよ。」

応援席からヤジがかかる。

「さっきよりずいぶんちつこいのがでてきたな、そんなに墨谷の打線をおさえられるのかーっ！」

一軍エース佐野の投球練習がはじまった。応援席が静かになる。

「ああ……」

「お、おれみえなかった。」

「どうもおかしいとおもったよ、全日本で連続優勝する青葉をうちがぎやくにおしてたんだからなあ……」

「一点リードしてたから期待してたのにがっかりさせやるぜ。」

「まったくなあ。」

「もはやこれまでか。」

谷口「あのスピードだよ。」

部員「えっ……」

谷口「わからないか？ ほらっ、三分の一の距離から投げさせたタイミングと同じじゃないか！」

谷口のことばに、ナインみんなピッチャーの投球練習に注目し、そのタイミングを確認する。

松下「ほんとだ。」

イガラシ「いよいよ、特訓の成果を生かすときがきた。」

審判「プレイボール！」

試合再開と思われたが、谷口がバットを持ってイガラシにかけよる。

谷口「タイム！」

佐野「熱心だね！」

谷口「だめだよ、それ重いバットだろ、自分のをつかえ！」

イガラシ「あ、いけね、さっきまでタイミングをあわせるために重いバットをつかってたんだっけ。どうも。」

二軍捕手「バットをかるくすりゃ打てるとおもってるんだから。」

審判「プレイボール！」

ピッチャー佐野は足を大きくあげてイガラシに対して投げこんだ。

「カーン！」

佐野「う……」
二軍捕手「あ……」

イガラシの打球は左中間をやぶった。

墨谷ベンチからは「まわれ！ まわれ！」の聲がかかる。

6・7 青葉一軍登場

イガラシの打ったボールは左中間をてんとする。青葉ナインはぼうぜんとたちつくす……

青葉部長「レ、レフトなにをやってるかーっ！」

レフトが打球を処理するも三塁打となる。

部員「やったーっ！」「ナイスラン！」

応援席、ベンチから大きな声で歓声があがった。

「いいぞーっイガラシーッ！」

「ナイスバツティング！」

佐野「……」
青葉部長「し、しんじられん……」

青葉部長「な、なにをしてる！ 一軍はからだをあつためておかんか！」

エース佐野が打たれたことで青葉ナインはマウンドに集まってきた。互いにイガラシに打たれた打球が信じられないという表情でただ立ちつくすだけだった。

審判「さあ、はやく守備につきなさい！」

青葉ナインは審判にうながされて守備についた。

ノーアウトランナー三塁でつぎのバッターは四番谷口である。応援はいやがうえでももりあがる。

谷口は青葉バッテリーの動揺を見逃さなかった。青葉をたたくのはいましかない。

応援席からは大きな声がとぶ。

「かつとばせーっ、かつとばせーっ、た、に、ぐ、ち！」

谷口は佐野の初球をおもいきりたたいた。打球はサードのあたまをこえ、レフト線にころがる二塁打となる。

「やったやったまた一点追加したぞーっ！」

青葉内野陣はマウンドにあつまった。

二軍一塁「ど、どうなっちゃったんだ……」
二軍遊撃「なあにまぐれさ……」

佐野「まぐれでおれのタマが打てるか？」

二軍遊撃「い、いえ…」

佐野「どうやら、おまえたちにまかせたのがまちがいらしい、とてもおまえらの
あいてじゃない！」

「うーて、うーて、こー、やー、まーっ！」

ノーアウトランナー二塁で小山が打席にたった。

そのときである、セカンドにいる谷口に矢のような牽制球が佐野の手から投げられた。谷口は逆をつかれた…

谷口「し、しまった…」

タイミングは完全にアウトだったが、セカンドとの呼吸があわずセカンドがうしろにタマを
そらしてしまった。谷口は三塁へむかう。

審判「セーフ！」

「ナイスラン！ いいぞ谷口ーっ！」

応援席から谷口に声がかかる。青葉のセカンドはその場に立ちつくした。ピッチャー佐野は
あんなタマも取れないのかというような顔でセカンドをにらみつける。セカンドは佐野のほう
を見て「すみません。」とかぼそくいうのがやっとであった。青葉ベンチから部長が審判に選手
交代を告げた。

青葉部長「セカンドこうたい！」

青葉学院はピッチャー佐野につづき、一軍セカンド中村に交代した。

中村「バカが、なにをやってるんだ！」

二軍セカンドは中村の声を背中に受けうなだれながらベンチにもどった。

ノーアウト三塁、バッターは五番キャッチャー小山である。小山も初球をたたくが…

小山「く、くそっ、サードゴロか！」

小山のサードゴロを三塁手が一塁に投げるふりをして三塁ランナーをアウトにするトリックプレーを見せるが谷口にみやぶられる。

「うまいぞ谷口！」

「ノーアウト一塁、三塁だーっ！」

佐野「なにつつたつているんだよ。」

サードとサードカバーにはいったショートはみずからベンチに向かって走っていく。

青葉部長「そろいもそろってなんてザマだ！ サード、ショートこうたい！」

佐野「たのむぞ！」

後藤「まかしとけて！」

チャンスが広がり応援にも力がある。ノーアウトランナー一塁、三塁で六番のファースト加藤に打順がまわった。

「うーて、うーて、かー、とー、うーっ！」

応援の声を背中にうけて加藤は打席にはいるがサードゴロとなって一軍サード、一軍セカンド、ファーストとわたるダブルプレーとなってしまふ。

今までの二軍の守備とちがい一軍のプレーをまざまざとみせつけられた。墨谷側応援席からは「谷口がサードにくぎづけじゃねえか」

「それよりも打者もファーストランナーもはんぶんも走らないうちにアウトだぜ。」

「これが青葉の一軍なんだ……」

といった声がかこえた。

ツーアウトランナー三塁となった。バッターは七番センター浅間である。内野陣がてあつくなったため浅間は外野をねらうが……サード後方にあがったレフト前のハーフライナーにショートのアインプレーがでる。

墨谷ベンチはあぜんとする。

谷口「あれだよ、一軍のプレイは……」

6・8 最終回の青葉の攻撃

谷口「さあ、いよいよさいごの守りだ、一点のリードを守れば勝てるんだぞ！ おちついてひとつひとつかくじつにアウトにしていこう！ ただしこれから一軍がくわわってくる。打球が強いから気をつける！」

部員「はい！」

谷口「さあいこうぜ！」

部員「おう！」

応援席からも声がとぶ。

「がんばれよ！」

「しっかりな！」

青葉部長「バッターこうたい！」

二軍投手「やつのたまはおそいからじっくりまったほうがいいですよ。」

藤田「二軍のくせにいつから意見ができるようになったんだ？」

二軍投手「す、すみません。」

審判「プレイボール！」

松下「さっそく、一軍の登場か…、打たせて行くぞ！」

部員「おう！」

交代した一軍センター藤田は一球ようすをみた。

藤田「しょうがねえな、二軍のやつら。こんなスローボールにてこずってやがって…」

バッター藤田は二球目をあわせるかんじでバットをふった。レフトフライと思われた打球はぐいぐいのびて前進してきた遠藤の頭の上をこえていった。

遠藤「い、いったいなんて打球だ…」

谷口「がちりいこうぜ！」

遠藤「は、はいっ。」

ノーアウトランナー三塁で青葉の攻撃がつづく…

青葉部長「バッターこうたい！」

谷口「おちつけ、一点ぐらいやったってかまわないんだぞ、それに一軍はここまです。」

松下「そうですね、あの打者が14人目ですからね…」

「カーン」松下のあたりをバッターはセカンドイガラシの頭上をこえて、フェンスにあたるライナーをうつ。

一点かえされてまだノーアウトランナー二塁のピンチがつづく…

青葉部長「バッターこうたい！」

谷口「タイム！」

谷口がサードから球審のもとに走っていく。

谷口「青葉はすでに14人でています！ もうメンバーチェンジはできないはずですよ！」

球審「なるほど、そういえば…、抗議をみとめる！」

青葉部長「ちよつとまで！ だれがそんな規則をきめたんだね？」

谷口「中学でも高校でもブレイができるのは14人ってきまつてるでしょう。」

イガラシ「常識だよそんなこと！」

青葉部長「なにをいってるとるんだね、全日本中学野球大会の規則書にはそんなことはか
いとらんよ。」

球審「ちよつとまつてください。」

審判員があつまつて規則書を調べるが…

球審「なるほど…」

塁審「しかしかいてないからつていままで14人いじょうつかつたチームなんてき
いたことがないな、常識からすればやはり14人が正當じゃないかな…」

球審「それもそうだな。」

青葉部長「そついうあいまいなことではこまるなあ、ハハハ…、われわれは規則書に
したがつて試合をしとるんだよ。14人までとかいとらんじようなんん人つか
おうとかまわんことじゃないかね。」

球審「し、しかし…」

青葉部長「なんならそついう規則にして再試合をしてもかまわん！ まあ結果はやる
までもないが…」

球審「やはり規則書にのつてないじよう…」

塁審「うむ…」

球審「では代打をみとめます。」

青葉部長「さあいけっ。」

谷口「しかたがない守ろう！」

イガラシ「まったくふりかまわねえんだから。」

青葉部長「全日本野球大会のためにも強いチームが勝つべきなんだ！」

中村「よかったですな部長！」

青葉部長「ダ、ダメレ！ わ、わしゃこんなにはじをかいたことはない！」

ベンチにすわった青葉部長は身体をふるわせながらどなった。

小山「がっちりいこうぜ！」

部員「オウ！」

小山が声をかけるも…つぎの打者に松下はホームランを打たれてしまう。

青葉部長「これでいいんだ。」

逆転して青葉部長はつぶやいた。

谷口「タイム！」

谷口のことばに墨谷ナインはマウンドにあつまった。

谷口「気をおとすな、たった一点リードされただけじゃないか！ いいか人数に制限がないとなれば敵は全員一軍にかえてくる。打球にはじゅうぶん気をつける、するどいからな！」

部員「はい！」

谷口「みんな、ひとつひとつがうちりいこうぜ！」

部員「オウ！」

佐野「どうやらこれできまっただかんじだな……」

一軍三塁「うむ！ しかしやつらもよくやったよ！」

一軍遊撃「まったくこんなに苦戦するとはなあ……」

しかし墨谷は青葉に連打を打たれてこの回いきよ五点をうしなってしまう……

松下「す、すいません……」

谷口「なにをいつてんだ、たったの三点リードされただけじゃないか！」

小山「よわねをはくなんて松下らしくないぞ。」

松下「し、しかし。」

加藤「うちは後攻なんだぞ、倍にしてかえしてやるぜ。」

浅間「そうとも！」

松下「わかった……」

応援席もただただ青葉のすさまじい攻撃にちんもくしてしまっただが、谷口の父親が応援席最前列にでて応援の指揮をとる。

父「どけ、どけつ。」

応援団「……と」

父「おつやじゃねえんだ、パーッと景気よくやんねえか。」

父「フレー！ フレー！ すー、みー、やー！ それっ！」

墨谷生徒「だれだ、あれ……」

墨谷生徒「さあ……」

父「ゴチャゴチャいつてねえでいっしょにやらねえかい。」

墨谷生徒「は、はいっ。」

父「フレー！ フレー！ すー、みー、やー！ それっ！」

「フレーッ！ フレーッ！ すーみーやー！」

谷口「と、とっちゃん。」

松下「ようし。」

逆転されてきおちしていた墨谷ナインに応援席が元気づけた。

6・9 松下負傷！ ピッチャーイガラシ

九回の表青葉の攻撃中……青葉学院三点リードでランナーはいないもののまだノーアウト……

バッターの打ったタマはピッチャー松下の右肩を直撃した。はじめたボールを谷口がバックアップして一塁に送球するもわずかにバッターの足がはやくセーフとなる。しかし松下が右肩をおさえてたおれている。

小山「ま、松下！」

松下「うっ……」

谷口「だ、だいじょうぶか！」

ナインがマウンドにかけよった。松下はおきあがるが…

谷口「ちよつとみせてみる！」

松下「いえ…もうだいじょうぶです！」

つぎの打者に対して一球目を投げようとした松下だったが、右肩をあげたとき激痛がはしりふたたびマウンドにたおれてしまう。

谷口「タイム！」

谷口「だいじょうぶか？」

浅間「しっかりしろ…」

松下を谷口と浅間がだきかかえてベンチにはこんだ。

谷口「だれかタオルをぬらしてこい！」

島田「は、はい。」

審判「そのようすじゃこうたいするしかないね。」

遠藤「こうたいするにもかわりのピッチャーがいないんです…」

審判「それじゃ気のどくだが棄権しますか？」

谷口「じょうだんじゃない、ここまできて試合をすてるなんて…」

高木「ま、まだ投げさせるんですか？」

谷口「おれが投げる！ 丸井セカンドにはいつてくれ、イガラシはサードをたのむ！」

加藤「キャプテン、投げたことあるんですか？」

谷口「いや、ない。しかしこうするしかたがないだろ、さあいこう！」

小山「じゃあ、ぼくがなんとかリードします…」

谷口「たのむ！」

マウンドで谷口が投球練習を開始した…

イガラシ「ちょっと、キャプテン…プレートにスパイクをかけるんですよ!」

谷口「こうか?」

イガラシ「そうそう。」

谷口「どうだ?」

イガラシ「もうすこしスタンスをひろげたほうがいいですね。」

谷口「スタンスね…、おまえくわしいな。」

イガラシ「ええ、まあ。」

谷口「投げたことがあるのか?」

イガラシ「ひととおりぜんぶのポジションをやってみましたから。」

谷口「ちょっと投げてみる。」

イガラシ「どうかな、しばらくやってないからなあ。」

谷口がイガラシにボールをわたした。今度はイガラシが投球練習をはじめようとしている。このようすをみていた青葉ベンチでは…

佐野「なんか、草野球じみてきたな…」

中野「うむ…」

イガラシが小山に投げた。小山のミットからズバーンという音になる。マウンドではナインみんなびっくりした顔でみつめあう。

青葉部長「なかなかいいタマをほうるじゃないか。」

中野「はじめからだしいいものを…」

中村「まったく!」

結局ピッチャーがイガラシ、セカンドが丸井に交代して試合が再開される。

審判「プレイボール！」

イガラシの一球目は内角へのシュートボールだった。バッターはみおくるも二球目同じコースのシュートボールを三遊間に打たれる。

ノーアウトランナー一塁、三塁まだまだ墨谷のピンチはつづく…

二人目のセカンド中村に対しても同じようにイガラシは内角へのシュートで攻める。中村の打った打球は谷口へのサードゴロとなる。サードランナーをけんせいし一瞬セカンドへ送球しようとしたが、セカンド丸井が試合からとうざかっていたことに気がつき一塁に送球する。

これでワンアウト二塁、三塁となった。

青葉部長「ちよつと…、いまのシュートしずまなかったか？」

中村「え、ええ、そういえば手もとにきてすこしおちたかんじです。」

青葉部長「タイム！」

青葉部長はバッターをよびよせ指示をだす。

青葉部長「どうやらしずむシュートでサードゴロにうちとるハラらしい。ひっぱらないでライトにながせ。」

一軍一塁「はい。」

青葉部長「万が一ゴロになったとしてもあのセカンドはあなのようだからな。」

バッターは指示どおりにライト方向へのヒッティングにでた。打球はセカンド丸井の横をぬけるかとおもわれたが、セカンド丸井がよこつとびで捕球し、すばやくバックホームする。ホームはクロスプレーとなったがアウトとなる。

谷口「ま、丸井のやつ…」

応援席からも声がかかる。

「いいぞーっ丸井ーっ！」

「ナイスセカンド！」

青葉部長「くそーっ、いつばいくわされた…」

小山「ツーアウトだぞ、がっちりこつぜ！」

部員「オウ！」

青葉部長はつぎの打者に対しても指示をする。

青葉部長「内野はダメだ、なんとしても外野にもっていけ。」

藤田「しかし、まえのふたりはあのしずむシュートにつまってますが…」

青葉部長「それがやつのねらいだ、だったらファールにしていけばいいだろ。」

藤田「あ、そうか。」

青葉はシュートをファールで逃げて、他のタマで勝負という作戦にでた。

藤田「ふふふ…」

イガラシ「くそっファールでにげようってんだな、そうはいくか！」

イガラシはゴロを打たせようとシュートを投げつつける。

藤田「まったくバカのひとつおぼえみたいにシュートしか……」
審判「ス、ストライクバッターアウト！」

イガラシのしつようなシュートのあと、最後はカーブでバッターは三振する。
バッター藤田はあぜんとした顔でイガラシをみるが…イガラシは笑顔でこたえた。

藤田「き、きったねえあいつ！」
小山「ぷっ…」

応援席からはイガラシの好投に声がかかる。

「ナイスピッチ！」

「うまいぞ、イガラシ！」

6・10 三点差をおう最後の攻撃

最終回、九回の裏墨谷最後の攻撃である。得点は九回の表、青葉がいきよ五点をついかしたため11対8、三点を墨谷がおいかける形となった。

谷口はベンチ前でナインに最後の注意をあたえていた。

谷口「さあ、みんななくてもわらってもこれが最後の攻撃だぞ！ いいかタマに

くいついていけよ！ なんとしても三点をはねかえすんだ！」

部員「はいっ！」

この回はラストバッターライト島田からの打順である。

島田「ようし、なんとしても塁にでるぞ！ さあこいつ！」

島田は初球をひっぱって三遊間をぬくかと思われたあたりだったがショートがうまくまわりこんでアウトとなってしまう。

高木「くそっ。」

谷口「た、たのむぞ！」

高木「まかせといてください！」

高木「さあ、きやがれ！」

高木の打球はセンター前にこrogった。一軍センターがもうダッシュしてきて一塁に送球する。

審判「セーフ！」

二番加藤は右中間のまん中にとぶ、センターとライトがおいかける。だれもがぬけたと思うあたりだったがセンター藤田がジャンプしてこの打球をとった。

一塁ランナー高木はぬけたと思って二塁に向かって走りだしていた。とられたのをみて一塁ベースにいそいでもどる。センターからのボールが一塁にもどってくる。高木がすべりこむ…

審判の判定は…

審判「セ、セーフ！」

青葉部長「どたんばでやっとうちらしくなってきたな。」

吉田「あとひとつですね。」

墨谷応援席は…

父「ちくしょう…」

応援団「ツアウトになっちゃった…いよいよダメか…」

父「なにいつてやがる、おめえがそうだからダメなんだ。いせえよくパーツと

やんねえか！」

応援団「し、しかしあれで声がでますかね…」

墨谷生徒「……………」

父「それもそうだな…」

墨谷応援席は静まりかえっていた。

谷口はバッターボックスにむかう丸井に対してアドバイスをおくる。

谷口「丸井！ いいかものすくはいいからな、バットをみじかくもってなんと

かあててけ。」

丸井「はいっ。」

谷口「たのむぞ！」

九回の裏、ツアウトランナー一塁の場面で、松下のかわりに二番にはいった丸井に打順がまわった。谷口は激励をおくるが…丸井は特訓に参加していなかった…谷口は丸井も参加させ

ておくべきだったと後悔する…ベンチにもどろろとしてナインを見るとみんなおどろいた表情で見つめていた。

谷口「どうかしたのか？」

谷口がふりかえると…

小山「みてください丸井のやつ！ あれ二本ともマスコットバットですよ！」

そこには元氣よく「ビュッ！ ビュッ！」と音をたててバットをふる丸井の姿があった。谷口は九回表の丸井の好守備、そしてこのバットの振りぐあいといい、影でそつと練習をやっていた丸井に気がつく…

谷口「丸井！ あてていくことはないぞ、おもいつきりひっぱたいていけっ！」

丸井「まかしといてください！」

佐野「さっきかわった補欠だな…」

丸井は佐野の一球目フルスイングをするが空振り、丸井はおもわずバランスをくずしてたおれこんでしまう。

小山「あああ…」

佐野「くくっ…」

丸井「いけね…」

ピッチャー、キャッチャー、審判までも失笑していた。谷口はベンチから丸井に声をかける。

谷口「丸井、やっぱりあててけ！」
丸井「すみません…さあこいつ！」

バッターボックスの丸井は気をとりなおし佐野の二球目を待った。

「カーン！」

丸井のバットから快音がなった。打ったタマは三塁手左をぬくヒットとなる。墨谷ベンチから応援席から「や、やったーっ」の声がでた。ツーアウトながらランナー一塁、二塁で三番イガラシに打順が回った。

「かっぱせーっ、かっぱせーっ、イー、ガー、ラー、シーッ！」
応援席からの大きな声がイガラシの背中にとどく。

イガラシ「おれも打たなくっちゃ、こう丸井さんにかつやくされちゃポジションとられちゃうからな。さあこいつ…」
佐野「……」

青葉ベンチでは…

青葉A「またしがみついてきやがった…」
青葉B「まったくねちっこいチームだぜ…」

イガラシは佐野の初球を右中間に打つ。打球はフェンスに直接あたる二塁打となる。セカンドから高木がホームインして一点かえした。

墨谷ベンチ、応援席ともにおおさわぎである。それもそのはずツーアウトながらランナー二塁、三塁、一打同点で打順がキャプテン谷口にまわったからである。それにひきかえ青葉ベンチでは

青葉部長「い、一軍をそろえたというのに、いったいどうなつとるんだ…」

山下「……」

二軍中堅「……」

谷口がバッターボックスにむかう。応援席からは「かつとばせーっ、かつとばせーっ、たーにーぐーちーっ!」の大きな声が…

青葉部長「ちよ、ちよつとバッテリー!」

青葉部長はピッチャーとキャッチャーをベンチに呼びよせた。

青葉部長「し、しんじられんことだが、ストレートに完全にタイミングをあわさる。カーブでタイミングをはずせ…」

佐野「は、はいっ。」

審判から「プレイボール!」がかかった。応援席ではいままでベンチ上で応援団の先頭にたつて声をだしていた谷口の父親の姿が見えなくなっていた。タカオの責任重大な場面を見るにかねて自分の席にもどるところだった。

父「とてもみぢやいられない…」

自分の席には谷口の母親がいたが、母親は両手で顔をかくしうつむいていた。

父「なんでえおめえもかよ。」

佐野の谷口に対する一球目は部長の指示どおりカーブだった。

審判「ス、ストライク！」

佐野の二球目谷口はタマをカットしファールにする。

審判「ファール！」

谷口「内野ゴロにしとめようって気らしいが、そうはいくか！」

佐野「味なまねをしやがる…これでどうだ！」

佐野のくりだす変化球を谷口は必死でカットした。

イガラシ「あ、ちくしょう、おれもやりたかったね！」

谷口は佐野のくりだす変化球をカットしなんとかうちやすいタマがくるのをまった。佐野の息づかいがあらくなってきた。

墨谷ベンチ、青葉ベンチともにこの谷口対佐野の対決をみつめる…

そして佐野の手からややすっぱぬけたボールが…

佐野「し、しまった…」

谷口「き、きたっ！」

「カキーン！」

谷口は打った。打球はレフトフェンスに直接ぶつかった。レフトがおいかけける。三塁からは丸井がホームインし一点差、イガラシが三塁を回ってホームをねらう…

レフトがキャッチャーに送球した。きわどいクロスプレーになった。すべりこんだイガラシ、タッチしたキャッチャーたがいに審判の判定をみるが…

「アウト！」

「試合終了！」

その声をきいた青葉エース、佐野はマウンドにしゃがみこんでしまう。

しばらく二塁ベース上で立ちつくす谷口だったが氣をとりなおしてベンチに歩みはじめた。ベンチにもどろろとした谷口だったが…イガラシがホームベースをさわったままたちあがらない…

谷口「どうしたイガラシ…？」

ホームベースにたおれたままのイガラシに谷口がかけよる。

谷口「イガラシ…」

審判「どこかケガでもしたのかね？」

谷口「いえ、だいじょうぶです、やるだけやったんじゃないか！ さあいこう！」

谷口はホームベースに倒れたままのイガラシを抱き起こそうとしたとき、あの氣の強いイガラシが泣いているのがわかった。ナインがとびだしてくるが、みなイガラシの涙を見ておもわず涙ぐむ…

丸井「グス…」

谷口「メソメソするな！」

青葉部長「谷口くんとかいつたね？」

谷口「はあ…？」

なにかを谷口に言おうとした青葉部長だったが、ふりかえった谷口の目に涙が光るのをみた。

青葉部長「い、いや、いいんだ…」

そういつて青葉ベンチの方に歩きはじめたが…

青葉部長「二軍などをだしてまったく失礼なことをした…しかしわからん…かれがう

ちの二軍の補欠にいただなんて…」

青葉部長には谷口の墨谷にきてのがんばりがわかるはずはなかった。

イガラシをとりかこんでいた墨谷ナインに谷口が声をかける。

谷口「さあ、みんなかえろ…、またつきがあるじゃないか！」

部員「は、はいっ。」

「みんな、よくやったぞーっ！」

「いいぞ墨谷ーっ！」

ベンチにむかって歩きだした墨谷ナインに応援席からおしめない拍手と歓声がおくられた。

第7章 対青葉再試合決定

苦しみながらも勝ち進んだ地区予選での決勝戦で11対10で青葉学院に敗れ、準優勝におわった墨谷二中だったが、気持ちをきりかえて谷口は最後のつとめである来年のチームづくりを考えていた。

7・1 新聞部のインタビュー

谷口が野球部部室にむかつて歩いていく…下級生が谷口を見つけてなにやら話をしている…

男生徒A「お、おい、さいきんいやにかんろくがついてきたみたいじゃなか。」

男生徒B「まったくなあ…」

女生徒A「ちよつと谷口さんよ。」

女生徒B「すてきーっ。」

みんなの視線をあびてちよつとてれくさそうに歩いていく谷口であつたがそこに新聞部の生徒がやってきた。

新聞部女「新聞部のものですがインタビューさせていたきたいんですけど…」

谷口「は、はあ…ど、どうぞ。」

新聞部女「地区予選でのご健闘ほんとうにおめでとうございました。」

谷口「は、はあ、どうも…」

新聞部女「本校で地区予選決勝大会に進出したのは野球部がはじめてとみんなおおさわぎなんですけれど…」

谷口「は、はあ…」

新聞部女「どうやってそんなに強くなったのかしらたいんですが…」

谷口「た、ただ、みんなとがんばっただけです。」

新聞部女「なるほど…、ここまでナインをひっぱってきたリーダーとしての苦心談をおきかせください。」

谷口「く、苦心談なんて…みんなががんばってくれたからですよ！」

新聞部女「ずいぶんひかえめですね、あなたにとつて野球とはなんですか？」

谷口「えーと、ぼくにとつて野球とは…なんですか…ですね。」

新聞部女「たとえば野球をとおしてまなんだこととか…」

谷口「がんばる…つてことかな。」

新聞部女「がんばるがんばるですね。ちよつと記事になりにくいなあ…これからの目標は…？」

谷口「目標ね…、えーと…、うーんと…」

新聞部女「やっぱり、がんばるつていうこと…ですか。」

谷口「そうです…」

新聞部女「あ、ありがとうございました…」

谷口「い、いいえ。」

谷口がさつたあとインタビュ担当の女子生徒と写真担当の男子生徒が話をしている…

新聞部女「がんばる、がんばる、がんばるか…、まるでモーレッツキャプテンね。」

新聞部男「モーレッツキャプテンおおいにがんばるってタイトルどつだ！」

新聞部女「あ、それいい！」

新聞部男「あはは！」

新聞部女「これじゃ記事にならないわ…」

新聞部男「まったく…」

7・2 選抜大会出場決定！

谷口が野球部の部室にはいつてきた、みんなはもうすでにきがえをはじめている…丸井、島田、高木がなにやら新聞をのぞきこんでいる…

谷口「やあ、みんなはいいな。」

島田「やあ、キャプテン！」

丸井「青葉が順当に勝ちすすんでいますね。」

谷口「まず青葉の四年連続優勝はかたいだろうな。」

丸井「そうですね！しかし青葉とやった地区予選決勝はおしかったなあ…」

島田「全国大会に出場できる選手の人数が14人までって規則がありやなあ…」

丸井「そうすりやおれたちが勝ってたかもしれないぜ！」

島田「まったく…」

丸井「なあ、もしおれたたちが勝ってたらどのへんまでいけたとおもう？」

島田「いい線いつてたかもな！ なにせ青葉の一軍と戦ってあれだけの試合ができたんだからな。」

高木「そうよ！」

谷口「いまさらすんだことをいうな、こんど勝てばいいじゃないか！」

高木「それもそうだな！」

丸井「ようし、こんどあったときはメツタメツタのクツチャンクツチャンにしてやろうぜ！」

谷口「そうとも、そのいきだ！」

イガラシ「しかしそれにしちや、うちは選手の層がうすいんじゃないですかねえ。」

谷口「たしかにそうだ、いまのままで全国大会には通用しない。しかしこのところ一年生にだってかなり実力がついてきてるじゃないか。この調子でいけばレギュラーとしてつかえるものがどんどんでてくるぞ！」

イガラシ「それもそうですね！」

丸井「おれたちもがんばらなくっちゃ一年生にポジションとられちゃうぞ！」

イガラシ「丸井さんの例もありますしね。」

丸井「ひとことよけいだ！」

部員「あはは……」

そのとき部室のドアがあきケガをした松下がはいってきた。右手はまだ三角巾でつつたままである。

谷口「や、やあ、松下……いいのか医者にとめられているんだろう。」

松下「ええ、でもここにこないとおちつかなくて……」

谷口「そつだろつな……、どうだプレイはできないだろうが後輩のめんどつをみてくれんか？」

松下「そのつもりでしたんです！」

谷口「そうか、じゃあ一年生がひとりでもおおくレギュラーになれるようにたのむよ。」

松下「まかしといてください。」

部員がグラウンドにて練習を開始した。グラウンド五周をまわったとき校舎から先生方がとびだしてきた……

校長「谷口くん！」

丸井「校長先生だ……」

校長「いいか、心をおちつけてようくんのだ！」

谷口「は、はあ……」

校長「次期選抜全国大会にきみたちがえらばれたんだよ！」

谷口「え……」

校長「ほんらいならば青葉学院だけなんだが、地区予選の実績をかわれてこの地区からは特別二校出場ということになったんだよ。」

谷口をはじめ部員全員あぜんとして校長先生の話をきいていた。

校長「き、きみたちがこの地区の代表として全国中学大会に出場するんだよ！」

丸井「キャ、キャブテン！」

校長「いますぐって話じゃないけど、だいじょうぶなのかね調子のほうは？」

谷口「一年生も実力がついてきていることだしなんとかやってみせます！」

校長「そうかよかった、よかった、地区代表としてはじゃないチームにならなくちな。」

さっきインタビューした新聞部の生徒もこのさわぎをききつけてやってきた。

新聞部男「やっと記事になりそうだな。」

新聞部女「とんでもない、大特集ものよ!」

新聞部はさっそく谷口にふたたびインタビューをするが：

新聞部女「谷口さん次期選抜にえらばれたご感想を!」

谷口「がんばります!」

新聞部女「……」

谷口はすぐに部員をあつめた。

谷口「みんな、わかっとうるだろうが全国大会選抜にでてくるのはつわものばかりだ。それに選抜にでてくるだけの学校はすでにその準備をすすめている……われわれはそれらの学校に勝つための練習をしなくてはならない。いいか、きょうから特訓にはいる!」

7・3 新聞取材

墨谷二中がはじめて来年の選抜大会出場校に選ばれたことで新聞社から取材にきた。

新聞記者「ずいぶんせまいところでやってるんだな。」

新聞記者「毎朝新聞の者だけど、春の選抜のことをききたいんだが…」

谷口「は、はあ…」

新聞記者「きみたち三年生は卒業しちゃうんだろ、戦力のほうはだいじょうぶなのかね？」

谷口「はい、みんながんばってますので。」

新聞記者「ところで、えらばれた理由は地区予選で青葉学院に善戦したからだってね。」

谷口「はい。」

新聞記者「まあ、全国大会四年連続優勝校青葉があいてじゃとうぜんだろう。そのときのスコアをおしえてくれない？」

谷口「11対10です。」

谷口からスコアをきいた新聞記者はややおどろいた表情をみせた：

新聞記者「ふーん、11対10ね。青葉は地区予選では二軍しかつかわないというが…それにしてもたいしたもんだ！」

丸井「そんなことないスよ。途中から一軍がでてきたんスからね。しかもあげくのはてに全員一軍にかえちゃつてさ、14人いじょうつかいやがつてきつたねえつたらありやあしねえ。な。」

新聞記者「青葉が14人いじょう…？」

丸井が谷口と新聞記者のあいだにはいつて青葉戦のことを話すが新聞記者はとりあつてくれない…

新聞記者「と、ところで現在のチームの調子はどうなの…」

丸井「あれ信用してないんだな。だれかスコアブックもつてこいっ！」

谷口「いいじゃないかすんだことは！」

丸井「だって…」

新聞記者「い、いや、ぜひ、みせてもらいたい！」

一年生「どうぞ…」

スコアブックを一年生が持つてきて新聞記者にわたした…

丸井「そうです。」

新聞記者「で、抗議はしなかったのかね？」

谷口「もちろんしました。しかし規則書にのってないからってみとめられなかったんです。」

新聞記者「ちよ、ちよと、これかりてくよ！」

丸井「どうしたっていうんだ、いったい？」

谷口「さあ、そんなことより練習、練習！」

シートノックの練習をはじめがしばらくするとさっきの新聞記者が谷口のもとに走ってくる…

新聞記者「はあ、はあ、き、きみ…、ちよときてくれ！」

谷口「はあ…？」

新聞記者「ワケはあとで話す。」

谷口「みんな練習をつづけてくれ！」

7・4 全国中学野球連盟

谷口はわけがわからず新聞社の車に乗せられた。車から降りるとそこは全国中学野球連盟というかんばんがかかれた建物があった。

新聞記者「さあ、こっち、こっち。」

新聞記者「さきほど電話でお話した墨谷二中のキャプテンをつれてきました。」

大田原「全国中学野球連盟委員長をつとめている大田原です。」

谷口「ぼ、ぼく谷口です。」

大田原「ま、かけなさい。」

大田原「ちよつと、そのスコアブックみせてくれんか。」

谷口からスコアブックをつけると連盟委員長の大田原は墨谷対青葉戦のスコアに目をとおした。

大田原「ちよつとまっけてくれ、いま青葉の部長がくる。」

ちよつどそのとき、ドアをノックする音がした。

大田原「はいりたまえ！」

ドアが開くとそこには青葉部長が立っていた。谷口と目があつとややおどろいた顔をした。

大田原「なぜよばれたかわかつとるだろう？」

青葉部長「はい、電話でうかがいましたので。」

大田原「なぜ14人いじょうかつたのかね？」

青葉部長「それは規則書に人数の制限をしるしてありませんでしたので……」

大田原「きみはわれわれの大会が全国高校野球にそつた条件でおこなわれているのをしつとるはずだ……」

青葉部長「は、はあ……」

大田原「だつたら常識として規則書にうたわなかつたことぐらいわかるとおもつが……」

青葉部長「……」

大田原「学生野球にかぎらずアマチエアスポーツというものは、おなじ条件のもとできそいあうのが本来の姿なんだが……。ちかごろのなにがなんでも勝ちさえすればいいという風潮には、わしゃうんざりしてるんだよ。」

青葉部長「じゃあ、どうすればいいんですか？」

大田原「問題はそこだが……」

青葉部長「優勝旗をおかえしすればすむことだとおもいますが！」

大田原「ほほーっ、まるできみの手で勝ちとつたかのようだな。きみの気持ちはそれですむかもしれないが、きみにしたがって血と汗で勝ちとつた生徒の気持ちはどうなるのかね？ わたしはどうもそのことが気になつてな……」

大田原は席を立ちあがつて外の景色を見ながら考えこんでいる。

突然に大田原が口をひらいた……

大田原「おなじ条件のもとで墨谷二中と再試合をしなさい。」

うつむいていた谷口が顔をあげた。

大田原「全国大会がすんだばかりだし、すぐにともいかなだろうから30日後でどうかな。」

大田原の一言で青葉学院対墨谷二中の再試合が決まった。

新聞記者「部長、再試合についての意見をきかせてください。」

青葉部長「このさい、白黒をはっきりさせてやる。」

新聞記者「墨谷二中についてひとこと！」

青葉部長「強い、たしかに強い。」

7・5 野球部の部室の中で

谷口が部員にきょうのことを話をしている。誰もがおどろいた顔をしている…

丸井「ほ、ほんとですか？」

谷口「30日後だ！」

丸井「ようし、谷口さんら三年生がいることだしメッタンメッタンのクッチャンクッチャンにしてやろうぜ。」

島田「おうよ。」

次の日の練習では引退まじかだった三年生をふくめて、新たな目標に向かって練習する墨谷ナインの姿があった。その中で一人、一年生でピッチャーをつとめるイガラシはややおもしろい気持ちで練習していた。

7・6 練習後、学校からの帰り道で

谷口「イガラシどうしたんだ、今日は元気がなかったじゃないか。」
 イガラシ「ぼく青葉学院をあいてに九回も投げるとおもった……ちよつと、たしかに地区予選では一回をおさえましたけど……正直いってあれだけの打線じゃ三、四回が精いっぱいですよ。」

地区予選では三年生の松下が八回まで投げていたが、相手の打球を肩にうけケガをしてしまった。イガラシは九回の一回を投げただけだった。

谷口「それもそうだな。しかしバックがしっかりしてきていることだし、打たせていけばいいじゃないか！」

島田「そうだよ、おれたちにまかせとけてんだ。」

加藤「弱ねをはくなんてイガラシらしくないぞ！」

イガラシ「すみません。」

谷口「じゃあな。」

丸井「さいならー。」

島田「またな。」

7・7 練習前の野球部部室で

写真部「われわれ写真部の者ですが、校長にたのまれてこれを……」

丸井「なんスかそれ？」

写真部「青葉の特訓のようすをビデオにとってきたんです。」

谷口「青葉の特訓！ それはありがたい、さっそくみせてもらいたいな。」



そこには青葉学院の卒業生までもが参加しての猛特訓の練習があつた。ピッチャーをイガラシにみたてての練習、部長みずからがノックをしての守備練習、相手のエースの変化球練習……墨谷中部員はそれを見ておどろき、圧倒されてしまった。

谷口「どうもありがとう。」

写真部「い、いえ、どういたしまして。」

谷口「さあ、みんなどうしたんだ、練習だ！ 練習！」

部員「……」

谷口「くよくよしたつてはじまらないぞ、青葉に負けないように練習すればいいじゃないか！」

部員「は、はい。」

青葉のビデオの練習があまりにもすごかったので、練習していてもみんな元気がない。ピッチャーのイガラシは投球練習をしているが、気持ちばかりがあせつて球にいきおいがない。守備練習のノック役を丸井に変わってもらい谷口がイガラシの投球練習のようすを見に行つた。

谷口「イガラシ、もっと肩の力をぬいてみる。」

イガラシ「こつですか？」

谷口「だいぶよくなつたぞ、でもまだまだ肩に力がいっているぞ。」

イガラシ「はい。」

谷口「そつだイガラシちよつとみてくれないか。おまえが三、四回しか投げられないっていうから、あれからちよつと練習してみたんだ。」

谷口の投げたボールはやや山なりのボールだった。球にはあまりスピードがなくキャッチャーもあきれた顔をしてボールを投げかえした。イガラシもすこしとまどいを感じていた。

谷口「どうだ、どこがわるいかなあ。」

イガラシ「も、もう一度、投げてもらえませんか？」

谷口「どうだ？」

イガラシ「もっとバックスイングで腕をおおきくのばして投げたほうが、いいんじゃないですか。」

谷口「こうか？」

イガラシ「いいんじゃないんですか。」

谷口「なるほど、バックスイングねエ……」

腕をのばして、おおきくふる。谷口はイガラシが言ったことをつぶやきながら投球練習をした。腕をのばして、おおきくふる。

谷口はイガラシがアンダーシャツをきがえに部屋にいったあとに投球練習をつづけた。腕をのばして、おおきくふる。

イガラシ「まったく、あんな投球で青葉につうようすると思っているのかな、なんにもわかっていないんだから。」

イガラシは一人部屋の中でつぶやいた。

7・8 谷口の家で

腕をのばして、おおきくふる。自分の部屋で投球練習をしている谷口の姿があった。足をおろすたびにたたみがミシ、ミシと音をたてている。

母「またはじめたよ。」
父「キャプテンとしてなんとかしようつてのはわかるが、二週間たらずじゃなあ……」

そのあいだにもミシ、ミシと音が聞こえてくる。

谷口「ちよつと神社にいつてくるね。」

神社ではかべにむかつて投球練習をする谷口の姿があった。

腕をのばして、おおきくふる。

だんだんわかってきたぞ！

腕をのばして、おおきくふる。

そうだこんなかんじだ！

腕をのばして、おおきくふる。

谷口はすこしのひまもおしんでピッチングの練習にはげんだ。



7・9 グランドが見える教室で

グランドには雨の中、一人マウンドからバックネットに向かってボールを投げる谷口の姿があった。グランドが見える教室ではそのようすを見ながら食事をおえた生徒が雑談している…

生徒A「みるよ、この雨の中！」

生徒B「よくやるよ。」

生徒C「しかしナインの間じゃ、とても青葉には通用しないって話だぜ。だけど谷口にとって最後の試合だからいいらしい…」

7・10 試合まであと一週間とせまった練習中

練習中にこの前の新聞記者がたずねてきた。もちろんこんどの地区優勝をかけた試合の取材にきたのであった。

新聞記者「どうかね調子は？」

丸井「まあまあです。」

新聞記者「あそこで投げているのはキャプテンの谷口くんじゃないのかね？ ピッチャー

もやるのかね？」

丸井「と、と、とんでもない、た、ただのあそびですよ！」

新聞記者「よゆうがあるんだなあ、試合まであと一週間だっていうのに、そんな状態じゃないはずだが………」

丸井「………」

7・11 練習が終わったあと部室の前で

谷口が投球板に向かって投げ続ける音が聞こえている。「コーン……」「コーン……」

島田「まったくいつまでつづける気なんだ……」

イガラシ「よしなさいよ。」

島田「そ、そりや、キャプテンの努力はかうよ、しかしやってやれないことと、やることとがあることをしるべきだよ。」

加藤「まったくだ、試合まで一週間しかないってのによー！」

丸井「イガラシは陰でコソコソいうなっついてんだ！」

加藤「そういうおまえだっって新聞記者にきかれてこまっっていたじゃないか。」

丸井「そりや、そりやよおれだっってこのドタン場にきてさ、キャプテンのやつっていることはうなすけないさ。でもよ学校中のわらい者にされてさそのうえおれたちナインが陰でコソコソいやみをいってよ、キャプテンがかわいそうで……」

部員が話をしている間も谷口の投げ続ける音が聞こえてくる。「コーン……」「コーン……」

丸井「イガラシ！ キャプテンにあきらめるようにいってこいよ！ おまえピッチャーなんだし、だいいちおまえが最初にはつきりいつときゃこんなことにならなかったんだ。それに……」

イガラシは丸井をずっと見ている。

丸井「な、なんだよ。」

イガラシ「おれにはいえませんよ。」

丸井「な、なんだよ。」

イガラシ「だいたいおれがそんなことをいえるからかい、三、四回しか投げられないなんて弱ねをはきやがつてよ、おまけに青葉の特訓のビデオをみたぐらいでオタオタしやがつて、ところがどうだいキャプテンは、やるのがなんであらうとあきらめやしない！ 最後まですてやしないじゃないか！」

部員「……」

イガラシ「最後まであきらめないああいっ態度はだいいじなんじゃないですか。」

部員「……」

丸井「みならわなくっちゃな……」

さらに墨谷の猛特訓はつづいた。すこしの時間もおしんで練習にはげんだ。谷口一人だけの昼休みの練習にも、部員全員が参加していた。ナインのひとりひとりがあきらめまい、試合をすてまいという態度にかわっていた。

松下「ただ谷口さんてふしぎな人だ……たとえやるのがなんであるうと、またみんなをひっぱりあげてしまった。ふしぎな人だ……」

ケガをしてこんどの試合には出場することのできない松下が練習のようすをみてつぶやいた。谷口はあいかわらずひまさえあればボールをほうっていた。

「コーン！」

谷口「だいぶおもったところへ投げられるようになったぞ。しかしこれじゃまだ打たせてとるタマだ！」

「コーン！」

イガラシが谷口の投球練習をしているそばにやってきた。

「コーン！」

何かにおどろいたようすである…

「コーン！」

そんなイガラシに丸井がきがついた。

丸井「どつしたんだよ、イガラシ？」

「コーン！」

イガラシは谷口の投げるタマにおどろいたのである。谷口が投球板に投げたタマが谷口のあしもとにまではねかえってくるのであった。

イガラシ「どつやらセットポジションもおぼえてもらったほうがよさそうだな。」

「コーン！」

部員全員谷口のもとにあつまってきた。だれもが谷口の投げるボールにおどろいた…そして決勝戦の再試合の日がやってきた。

第8章 白熱！！ 決勝戦

ついに日本一をきそう全国中学大会のひびたがきられた。そして谷口にとってこれがキャプテンとしての最後の試合でもあった。

8・1 緊張感

球場の更衣室で墨谷ナインがきがえをしているが…

イガラシ「だいじょうぶですかね、あんなにあがって…」

谷口「こんな大試合はじめてだからな…」

イガラシがユニフォームにそでを通しながら谷口に話しかけた。谷口もそうだったが、ナイロンも足が地面についていないようだった。そしてイガラシも…

谷口「それ、おれのユニフォームだぞ…」

イガラシ「い、いけね…」

谷口「おちつけよイガラシ。」

イガラシ「は、はい。」

きがえが終わり、係員につれられ更衣室からグラランドに向かう廊下を歩きだす。ナインの耳にはみようにスパイクの音が響いてきた。

谷口がナインに向かって声をかける。

谷口「おちついていこうぜ！」

だが、ナインはなぜかうわのそらで谷口の言葉を聞いていた。

8・2 大観衆

グラランドに足をふみいれると、そこには墨谷、青葉両大応援団がきそうように応援合戦をくりひろげていた。さきに練習していた青葉ナインは大舞台を経験しているだけに余裕をもって墨谷ナインをみつめていた。

中村「なんでえ、まるで足が地についてねえじゃねえか。」
遠藤「あれでまともにたたかえるのかねえ。」

グラウンドにはいつてきた墨谷ナインがとまどっているので青葉部長が声をかけた。

青葉部長「さ、どうぞ、どうぞ、いまかたづけさせますから。」

谷口「ど、どうも、さあみんな、キャッチボールをやるう!」

全国大会決勝戦ということとその異様な雰囲気墨谷ナインはのまれてしまっていた。

「がんばれ、がんばれ、すーみーやーっ!」

「がんばれ、がんばれ、すーみーやー!」

青葉生徒「こっちもまけずにやるうぜ!」

「フレッツ、フレッツ、あーおーばーっ!」

「フレッツ、フレッツ、青葉!」

「フレッツ、フレッツ、青葉!」

試合前の両軍の練習が終わり両軍選手がホームベースをはいさつをした。とうとう全国大会の決勝戦が開始される。青葉学院は四連覇をめざして、もちろん墨谷二中は初優勝をめざして……

青葉トップバッター、セカンド中村がバッターボックスにはいった。

審判「プレイボール!」

ピッチャーイガラシの一球目は膝元にくるストレート、バッターはみのがしてストライク。谷口からイガラシに声がかかる。

谷口「いいぞ、その調子だ！」

二球目のタマをバッターは打つがひっかけてショートゴロになる。

中村「し、しまった！」

ナインから「ショート」という声がかかり、ショート高木がボールをとった。しかし一塁へ送球しようとしたボールが手からこぼれおちてしまった…エラーである。青葉中村はなんなく一塁セーフとなる。

高木「い、いけね…」

谷口「おちついていこうぜ！」

イガラシ「ドンマイ！ ドンマイ！」

高木のところにナインから声がかかる。

青葉二番打者はセンターを守る藤田である。藤田の打球もショートゴロとなる。

ピッチャーイガラシから声がかかる。

イガラシ「ショート！」

高木「あ…」

が…こんどは後方にそらしてしまった。ダブルプレイをねらってセカンドにはいていた丸井が高木のそらしたボールをバックアップする。

高木「す、すみません。」
谷口「肩の力をぬけ。」

しかし大観衆のまえであがっていたのは高木だけではなかった。

青葉三番打者のあたりは簡単なセンターフライ、センター浅間が前進してとろうとするがこれを落球してしまう。

谷口「タイム！」

谷口はナインをマウンドに呼びよせる。

谷口「どうしたんだよみんな、どれも目をつぶたってとれるタマじゃないか！ い
いかおちついていこうぜ！ いつものとおりやればいいんだ！」
部員「は、はいっ。」

ノーアウト満塁で青葉の四番打者をむかえた。

イガラシがファーストランナーのリードが大きいとみて、牽制球を投げた、しかしこのタマをファースト加藤がうしろにそらしてしまう。ライト島田がカバーした。島田からの返球をファースト加藤がうける。イガラシが加藤に声をかける。

イガラシ「サード！」

しかし加藤はまったくまにあわないキャッチャーのところにボールを投げてしまい労せずして二点を失ってしまう。また一塁ランナーも三塁に進塁する。

イガラシ「サードっていったのがきこえねえのかよ！」

谷口「タイム！」

谷口がイガラシのもとに走っていく。

谷口「短気をおこすな！」

墨谷ナインがマウンドにあつまる。

谷口「みんな深呼吸をしろ！」

マウンドに集まったナインは谷口の指示通りに深呼吸するが、イガラシだけマウンドの土を
けている。

谷口「イガラシ、ここでおまえがくさったらどうなるんだ！」

イガラシ「す、すみません……」

ナインは気をとりなおして守備につく。ノーアウト三塁まだ墨谷二中のピンチはつづく。
四番バッターの打球はサードゴロだった。谷口はこのゴロをとり、ランナーを牽制して一塁
へ送球する。

審判「アウト！」

送球を受けた加藤は前のエラーがあつたのでホッと胸をなでおろした。

谷口「この調子でいこうぜ！」

はじめてのアウトでややホッとした墨谷ナインだったがワンアウト三塁ピンチにはかわりがない。

つぎの打者にたいしてピッチャーイガラシは投げたが…

「カーン！」

バットから快音が聞かれ、打球はレフトスタンド上段にすいこまれていった。

イガラシはなぜ打たれたのかわからなかった、バッターの苦手なコースになげたはずなのに…打たれたのが信じられない顔で打球がとんでいった方向を見つめていた。谷口がマウンドにかけよった。

谷口「どうして外角の高めなんかにはうつたんだ？」

イガラシ「どうしてって…あつ…つ、つぎの六番とかんちがいしちゃった。」

谷口「おちつけよイガラシ！」

青葉ベンチでは…

遠藤「この調子じゃなん点はあるかわからねえな。」

一軍捕手「まったく。」

青葉部長「あまくみるとひどいめにあうぞ。」

一軍捕手「へ…？」

審判「スリーアウトチェンジ！」

一回の表は結局打者一順して六点とられてしまった。この回の失点はイガラシが打たれたというよりも自分たちのエラーの失点がほとんどだった。

墨谷ベンチでは円陣をくんで谷口がナインに注意をあたえている。

谷口「いいかおまえたちはやつのだまを地区予選で打っているんだ、自信をもっていけよ、こんどは変化球も投げてくるはずだ、おちついてたまをみていくんだ。」

部員「は、はい！」

丸井「ツーストライクまで投球をみていきましようか？」

谷口「そんな必要はない、それよりもまずおちつくことだ。」

トップバッターセカンド丸井がバッタボックスにむかう。谷口は声をかけた。

谷口「いいか、おちつけば打てるんだからな！」

丸井「は、はいっ。」

丸井がバッターボックスに立とうとしたとき、墨谷応援団が丸井に声援を送った。

「かっとなせー、かっとなせー、まーるーいーっ！」

丸井は応援に聞きいつてしまつてなかなかバッターボックスにはいろうとしない。

審判「きみ、はやくバッターボックスにつきたまえ！」

丸井「どうも、どうも……」

「かっとなせー、かっとなせー、まーるーいーっ！」

佐野の一球目、丸井は空振り、二球目も…、三球目はものがして丸井は三振をきつしてしまふ。

佐野「ぶつ、どこみて打ってんだい。」

二番打者高木も丸井とおなじであつた。自分に対しての応援の声に佐野のボールが見えなくなつていた。

審判「ストライクバッターアウト!」

しかし高木はバッターボックスに立つたままである。

一軍捕手「きみ、アウトだよ!」

その声を聞いてやっとでバッターボックスからベンチにかへつた。青葉応援席からは笑い声が…

谷口「これじゃダメだ。」

墨谷応援団は…

「おい、おれたちが応援するとよいあがつちゃうんじゃないか…」

「そうだな、そうつとしようか。」

応援団は口到人差し指をあて応援生徒に静かにするよう合図を送つた。

谷口「イガラシ、気分をかえるために一発たのむぞ!」

イガラシ「まかしといってください!」

イガラシがバッターボックスに立った。

イガラシ「さあ、こいつ！」

佐野「こいつはまともらしいな……」

「カーン！」

イガラシは佐野の初球、カーブをフルスイングした。打球はレフト方向にのびていく。レフトがバックする。フェンスぎわでイガラシの打球を捕球した。

審判「チェンジ！」

イガラシ「まったくよくとりやがるぜ……」

「おしかったなあイガラシ。」

「やっぱりだまっててよかったのかな？」

「うむ。」

8・3 反撃！ 墨谷二中！

地区予選しかしらなかった墨谷ナインは全国大会決勝という大試合の重荷とその球場内の熱気あるふんいきにのまれあがりにあがっていた。しかし谷口のおちつかせようとするさいさんの注意が効をそうしたのか、回がすすむにつれおちつきをとりもどしてきた。

青葉は初回到六点、二回到二点、三回到一点をとった。墨谷は無得点のままであった。四回をおわって青葉が九点リードのまま青葉学院の攻撃がはじまる。

打球がショートにころがった…ショート高木はなんなく捕球し一塁に投げる。

審判「アウト！」

谷口「そうだ、その調子だ！」

谷口がおちつきを取りもどした高木に声をかけた。高木は笑顔でこたえる。

一軍捕手「塁にでなくなっちゃったな！」

遠藤「うむ…、しかしああいやなコースにきめられちゃあな…」

一軍捕手「まったくだぜ！」

打球がセンターにあがった…センター浅間も前進してなんなく捕球する。

審判「チェンジ！」

五回の表、青葉は無得点におわった。

どの打者に対しても全力投球するピッチャーイガラシにだいぶ疲労がたまってきた。

イガラシ「はあ、ふう、はあ…」

谷口「だいじょうぶかイガラシ。」

イガラシ「なあにまだまだ！」

この回は六番センター浅間からはじまる。

審判「ストライク！」

浅間「くそっ、こんなタマがみえなかったんだからな…」

カーン！ 浅間は佐野のストレートを思いつきりたたいた。セカンド横をぬきセンター前どころがるかと思われた打球をセカンドが横っ飛びでボールをとり一塁に投げた。

審判「アウト！」

七番遠藤もジャストミートしたのだがセンターフライに終わる。

応援団は一回のイガラシの打席からあいかわらず静かなままであった。ベンチから丸井がでて応援団に向かって声をかける。

丸井「おまえら、なにつつたんでんだよ、お通夜じゃねえんだぞ！ せえの！ かつ

とばせーっ、かつとばせーっ、かーとーうーっ！」

応援団「かつとばせーっ、かつとばせーっ、かーとーうーっ！」

「かつとばせーっ、かつとばせーっ、かーとーうーっ！」

九点リードした青葉ベンチでは…

吉田「なんだ、やつら九点もとられちゃってやけおこしたのか？」

山下「そりゃ九点も差をつけられちゃあな。」

吉田「それもそうだ。」

青葉部長「やつらが試合をなげるようなやつじゃないことをしつとるくせに、バカなつよがりはやせ、げんにうちがおされてるじゃないか。」

二軍選手「……」

青葉部長「ま、心配するな、イガラシはもう限界だ、いよいよになればつぶせばいい。」

二軍補欠「ぶ、部長……」

二軍補欠選手が指さした方向は墨谷ベンチの投球練習場であった。そこでは谷口がキャッチャー小山を相手に投球練習をはじめていた。谷口が投げるたびにキャッチャー小山のミットから「ズバーン!ズバーン!」と音がしていた。

応援団A「野球部にまではなされたっていうのに、どういうこつたい……」

丸井「このーっ!てめえらキャプテンをなんだとおもってんだ!」

応援団B「す、すみません。」

丸井「なめやがって、まったく!」

このようすを見て青葉ナインもあわてていた。マウンドの佐野のところに集まって谷口の投球練習をみていたが……

審判「きみたち、はやく守備につきなさい!」

一軍捕手「は、はいっ。」

「かつとばせーっ、かつとばせーっ、かーとーうーっ!」

ピッチャー佐野がバッター加藤に投げようとしたが谷口の投球練習が気になって集中できない。加藤はその佐野のタマを右中間にはこんだ。

「かつとばせーっ、かつとばせーっ、しーまーだーっ！」

九番島田もつづく…、あたりは左中間だったがレフト、センターおたがいボールをとろうとしてぶつかってしまふ…青葉のエラーである。ツーアウトランナー二塁三塁でバッターはトッポバッター丸井に回った。

ピッチャー佐野は一塁側ブルペンで投球練習をしている谷口が気になってしかたがない。小山のミットから「ズバーン！」と音がするたびに佐野だけでなく青葉ナインが一塁側ブルペンのほうをみる。

丸井「どつたの！ カモン！」

佐野「くそっ！」

「カーン！」

丸井は佐野の変化球をジャストミートした。あたりはぐんぐんのびてライトスタンドにはいつてしまった。スリーランホームランがでた。

谷口「やった！」

谷口は投球練習場から思わず声をだした。そして丸井をナイン全員でむかえた。

「いいぞ丸井！」

「こんちくしょうめ！」

9 対 3、墨谷二中はその差六点差にせまった。

青葉部長「タイム!」

青葉部長はタイムをとりナインをベンチ前にあつめ落ちつくように指示した。

残念ながらつぎの打者二番高木の打球はライト線の打球だったが、ライトの好守備もありアウトに終わった。

審判「チェンジ!」

青葉ナインは無言のままベンチにもどってくる…

谷口「なんだ、まだ投げるつもりか!」

イガラシ「この回だけ、あとは投げるってたってどっちみち投げられっこないんですからね。」

谷口「むりをするなよ、いつでもかわるからな。」

イガラシ「はいっ。」

谷口「みんな、こっちのペースになってきたんだ。おちついていこうぜ!」

部員「オウ!」

小山「がっちりいこうぜ!」

部員「オウ!」

キャッチャー小山がみんなに声をかけて雰囲気をもりあげる。

8・4 谷口のケガ

六回の表の青葉の攻撃がはじまった。この回イガラシは先頭打者をセカンドフライ、二番目の打者をサードゴロに打ちとってかんたんにツーアウトをとった。

三人目青葉のキャッチャーの打ったボールは三塁後方のファールフライだった。谷口がおいける。

イガラシ「サード、もういつちょう！」

谷口「オーライッ！」

谷口は手をあげてボールを追いかけるが、ボールをキャッチした瞬間いきおいあまって青葉ベンチにつつこんでボールをおとしてしまう…

谷口「すみません。」

青葉部長「ナイスファイト！」

青葉ベンチにあやまった後、おとしたボールをひろってイガラシに投げようとしたとき谷口の右手に激痛がはしった。

谷口「うっ…」

谷口はその場にすわりこんでしまう。イガラシがすばやくかけよるが…

イガラシ「キャ、キャプテン！」
谷口「ぐぐぐ……」
イガラシ「だ、だいじょうぶですか……」
外野を守っていた選手も三塁側青葉ベンチ前に集まってきた。

遠藤「どうしたんだよ。」

島田「つ、爪が……」

青葉部長「だれか救急箱をもってこい！」

谷口はファールボールをおって青葉ベンチにつつこんだときに爪をはがしてしまったのである。
応援席からも

応援団「どうしたんだ、いったい」

一年生「つ、爪をはがしちゃったんです！」

応援団「……」

部員「……」

遠藤「こ、これじゃあイガラシのリリーフはむりじゃねえか……」

イガラシ「バ、バカな！ サードだってむりだ……！」

谷口「なあにサードならだいじょうぶさ。」

審判「き、きみ、むちやをいつちやいかん、こうたいしなさい！」

谷口「だいじょうぶです、指をかばえばなんとかやれます！」

審判「ま、まあ、きみがそういうならむりにはとめんが……」

イガラシ「キャプテン、ほんとうにやるんですか？」

谷口「そのかわり、おまえにつづけて投げてもらうしかないぞ。」

イガラシ「まかせといてください！」

部員「……」

イガラシは谷口の指に包帯を巻きながら投げることを約束した。

イガラシ「いいですか、これで。」

谷口「ありがとう！」

小山「イガラシ、そんなことをいっておまえだいじょうぶなのか？」

イガラシ「最後の最後まで試合をすてないってことをキャプテンからいやっていうほどおしえられましたからね。」

イガラシ「さあ、みんな守備につこうぜ！」

青葉部長「気の毒になあ……」

遠藤「せっかくいい試合になってきたっていうのにざんねんだなあ。」

後藤「まったく！」

青葉部長「おまえたち、たのもしいことをいうじゃないか。」

青葉一軍「……」

イガラシ「みんな、ツーアウトだぞ、がっちりこっぜつ！」

部員「オ、オウ……」

イガラシ「サ、サード！」

ケガをした谷口のとこに打球がいった。谷口はタマを捕球するも一塁への送球はやまなりのタマになってしまった。投げおわった谷口の指には激痛がのこっている……

審判「セーフ！」

谷口「わるい、わるい!」

谷口はケガの痛みをこらえながらナインにあやまった。

遠藤「しよせん、爪をはがしてやるつてのがむちゃなんだよ。」

イガラシ「タイム!」

イガラシがタイムをとり谷口のところにいく……

イガラシ「やつぱり、かわったほうがいいですよ!」

谷口「すまん、すまん。こんどはもうすこしましな送球をするよ。」

イガラシ「……」

イガラシは次打者に対して谷口のところに打球がいかにように外角へのカーブを投げた。打ったタマはセカンドゴロとなって丸井が捕球して一塁に送球する。

審判「アウト、チェンジ!」

イガラシ「だいじょうぶですか?」

谷口「そんなことより自分のことを心配しろ。」

イガラシはベンチにすわっても肩で息をしている。

谷口「肩をひやすなよ。」

イガラシ「ど、どうも……」

谷口の負傷でリーフの希望をたたれ気おちしたのか、六回の墨谷の攻撃は三番イガラシからの好打順だったが三者凡退におわった。

8・5 死闘！ 墨谷対青葉

イガラシは力をふりしぼって投げつづけた。もうすでに体力の限界をすぎたイガラシであったが、さらに歯をくいしばって投げつづけた。負傷しながらも最後の最後まで試合をすてない谷口の態度がイガラシをふるいたたせて、ただ気力で投げさせていたのである。そして八回の表青葉の攻撃は…

谷口「その調子だ、がんばれイガラシ！」

イガラシは肩で息をしている。「はあ、ふう、はあ……」

バッター佐野に対する二球目、セカンド横センター前にぬけるかとおもわれたゴロだったがセカンド丸井が横つとびでとろうとする。しかしグラブに当ててはじいてしまふ…しかしショートの高木がこのタマをバックアップして一塁に投げた。

審判「ア、アウト！」

加藤「ナイス、ショート！」

ショート高木のファインプレーがでた。

トップバッターにかえてセカンド中村はイガラシのタマをおもいきってひっぱった。サードゴロとなる。谷口は指の痛みにくらえながら一塁に向かって投げた。送球は一塁手手前でワンバウンドしたが加藤ががっちりこのタマをとった。

審判「アウト!」

谷口はアウトの声を聞くとホッと息をついた。しかしイガラシのようすがおかしい…

イガラシ「はあ、ふう、はあ…」

谷口「タイム!」

谷口がタイムをとりマウンドまでいった。

谷口「だいじょうぶかイガラシ!」

イガラシ「そんなことよりいたむんじゃないですか、顔が真っさおですよ。」

イガラシの強気なことはに谷口はサードにもどる。

中野「よくやるぜ、ボロボロになりやがってよ!」

一軍捕手「まったく。」

後藤「しかしいいかげんにおりてほしいぜ、あいてをしているおれたちがかなわねえぜ。」

中野「やりずれえよな、まったく。」

ツーアウトをとって次の打者はセンター中村である。中村はイガラシのタマをおもいつきりひっぱる。レフトファールグラウンドにハーフライナーとなったタマをレフト遠藤がもうすこしで取れそうだったが、フェンスにぶつかりボールをおとしてしまう。

審判「ファール！」

遠藤「く、くそっ！」

浅間「だ、だいじょうぶか……」

遠藤「バ、バカヤロウ！ これしきのこと……」

遠藤はおとしたメガネをかけながらようすを見にきたセンター浅間に答えた。
青葉ベンチからはこのファイトにただおどろくばかりであった。

丸井「がんばれ！ イガラシ！ ツーアウトだぞっ！」

イガラシ「はあ、ひい、はあ……」

イガラシはつかねながらも全力投球をする。バッター中村は再びひっぱってレフトに大きなあたりを打つ……

レフト遠藤はバックする。今度はフェンスに頭をぶつけながらも打球をとる。

審判「アウト！」

しかしレフト遠藤がたちあがらない……

浅間「え、遠藤……」

審判「だいじょうぶか、きみ……」

遠藤「ボ、ボール……」

浅間「安心しろ、おとしちゃいないよ。」

遠藤「ホッ。」

レフト遠藤は浅間の肩につかまりながらベンチにもどった。

イガラシもマウンドからベンチにもどるが途中でたおれそうになる…

谷口「だいじょうぶかイガラシ！」

イガラシ「だいじょうぶですって。」

谷口「だれか、タオルをぬらしてこい！」

イガラシ「はあ、ふう、はあ…」

イガラシはベンチでよこになった。

このようすを見ていた青葉ナインはベンチからあぜんとしていた。

青葉部長「はやく守備につかんか！」

青葉部員「は、はい。」

この回のトップバッター島田はイガラシのがんばりにこたえるかのように佐野のタマを打った。
次の打者丸井も…高木も…そしてつかれているイガラシも…ケガをしている谷口も…

谷口が負傷していちどは絶望したナインだが、最後の最後まであきらめまいとする谷口の態度がイガラシをふるいたたせ、そしてナインをたちあがらせた。またしても不死身のようにはいあがってきた墨谷ナインのおそろしさに青葉ナインはようやく気がついた。

8・6 ピッチャー谷口

回は八回、この回墨谷は二点をくわえ9対5、四点差にせまってまだノーアウト満塁、青葉ナインはマウンドに集まっている。

審判「きみたち、はやく守備につきなさい！」

三塁には高木、二塁にはイガラシ、一塁には谷口、そしてバッターは五番小山である。小山の打ったタマはレフトフライとなった。三塁ランナーはタッチアップしホームインする。ワンアウト一塁、二塁となった。

部員「たのむぞ浅間！」
浅間「まかしとけ！」

つづく六番浅間は三遊間をぬくレフト前ヒットとなるが…

三塁に向かっていた二塁ランナーイガラシが三遊間でたおれてしまう。おきあがれないイガラシ…。二塁に向かっていた谷口はイガラシにかけよる…

谷口「イ、イガラシ！」

谷口「イ、イガラシ、ど、どうしたんだ！」
イガラシ「はあ、ひい、はあ、ひい、ちよ、ちょっとあしがもつれちゃって…」

イガラシは息をきらせながら答えたが…、そのときレフトから打球をうけたセカンド中村が二人にタッチする。

審判「スリーアウト、チェンジ!」

イガラシ「す、すいません…」

中村「なんだかわるいことしたみたいだな…」

佐野「まったく。」

青葉部長「バカが! そんなきどつてるばあいか!」

部員「……」

墨谷二中は最終回の守りにはいった。マウンドで丸井がイガラシに声をかける。

丸井「がんばれ、イガラシ、最終回だぞ!」

イガラシ「ひい、はあ、ひい…」

イガラシは最後の力をふりしぼって三番サード後藤に向かって投げた。

「ズバン!」

審判「ストライク!」

キャッチャーミットから大きな音がした。イガラシが投げたタマは初回のとときとおなじくらいの威力あるタマだった。バッターの後藤はもちろん青葉ベンチもあぜんとする…それにひきかえ墨谷応援席は声をからして応援する。

「ナイスピーっ!」

「いいぞイガラシーっ!」

イガラシの二球目を後藤はセンターにはこぶがセンター浅間がこのタマをバックハンドでキャッチする。

応援席からは激励の声がかかる。

「ナイスセンター!」

「いいぞーっ、イガラシーっ!」

マウンドに墨谷内野陣が集まってイガラシを上げます。

谷口「がんばれイガラシ! あとふたりだぞ!」

イガラシ「ひい、はあ、ひい…」

青葉部長「タイム!」

青葉部長はバッターボックスに入ろうとしていた四番打者をベンチ前によんだ。

青葉部長「ファールでつぶせ。」

一軍捕手「は、はあ…? やつはだいぶバテてますよ。それに三点リードしてますし…、それに…」

青葉部長「………」

一軍捕手「わ、わかりました。」

イガラシの一球目、あきらかなストライクのタマをバッターはファールにする。
二球目もファール…、三球目もファール…、四球目、五球目…
応援団からヤジがとぶ

「きたねえぞーっ!」

「正せい堂どうと打ちやがれーっ!」

青葉部長「これでいいんだ!」

イガラシは投げたあとたおれこんでしまふ。投げたタマはボールとなる。

谷口「だいじょうぶか、イガラシ!」

丸井「くそっ、きつたねえまねしやがつて!」

イガラシ「よしなさいよ! おれが三振とれないのはあいてがうまいからなんで、それをこつたつてしょうがないでしょ!」

丸井「そ、そりゃ、そうだけど…」

イガラシ「心配しなさんなつて、なんとしても三振にきつてとりますよ!」

谷口「そうだ、その意気だ! ワンアウトだ、みんながつちりいこうぜ!」

イガラシは息をきらせながらきわどいコースに投げるが…

審判「ボ、ボールツー!」

イガラシ「こいつはどうだっ!」

カいっぱい投げたボールをバッターはファールにする。そしてボール、カウントはツーストライクスリーボールとなった。

フルカウントからイガラシは投げるがマウンドの土に足をとられてたおれこんでしまう。投げたタマは小山がとびつき捕球するが、これでフォアボールとなってしまうた。

審判「テ、テークワンベース！」

小山「イ、イガラシっ！」

イガラシが倒れたマウンドに墨谷ナインが集まった。

谷口「ピッチャーとサード交代します！」

ナイン全員谷口の顔を見る…

谷口「イガラシ、サードにはいれ。」

イガラシ「そ、そんなむちゃな！」

谷口「おまえよりました、さあみんなも守備につけ！」

谷口「練習タマはけっこうですから、プレイをかけてください。」

審判「ブ、プレイボール！」

ピッチャー谷口に対しても五番中野は初球のストライクを見送った後はファールボールで逃げた。谷口は四球目とんでもないボールを投げてしまう。キャッチャー小山はとびついてこのボールをおさえる。

谷口「すまん、すまん！」

たった四球投げただけなのにケガの痛みをこらえて投げる谷口はもう汗びっしょりになっていた。ツーストライクツーボールから中野はなおもファールボールで逃げる。キャッチャー小山は谷口に返球しようとしたとき谷口の投げたタマに血がついていることに気がついた。キャッチャー小山はユニフォームのスボンでタマをこすってから谷口に返球した。

そのときである…青葉応援席から…

「いいかげんにしろ！」

中野「タイム！」

青葉応援席からの声の中野はタイムをとり応援席を見つめる。

再度バッターボックスに立ち谷口のタマをファールにする。

また青葉応援席から中野にむかってヤジがとんできた。

「やめろやめろ！」

「そうだそうだ！」

「それが名門青葉の野球かよーっ！」

「そんなことまでして勝ちてえのかよっ！」

「やめちまえ！」

「ピーピー、ピー」

中野はバッターボックスをはずしてこのヤジをきいていた。

審判「きみ、はやくバッターボックスにはいりなさい！」
中野「は、はいっ。」

青葉部長「な、なんてやつらだ！」

青葉部長がベンチからでて応援席をにらみつけていると……

「カーン！」

バッターの中野が谷口のタマを打った。打ったタマはセカンドライナーとなり丸井がダブルプレイにとめる。

審判「アウト！ チェンジ！」

「やった、やったーっ！」

「谷口、イガラシいいぞーっ！」

応援団は大きな声でベンチに戻る墨谷ナインをでむかえる。

谷口「イガラシ、よくがんばってくれたな！」

イガラシ「そんなことより、キャプテンの爪だいじょうぶなんですか？」

谷口「うお……」

イガラシが谷口の指のようすをみようとかるくふれた…
谷口は指を押さえたままベンチにすわりこんでしまう…

谷口「うつ…」

丸井「バ、バカ、爪をはがしてんだぞ…」

イガラシ「……」

イガラシはあぜんとした顔で苦しがつている谷口を見ている。

丸井「ど、どうしたんだよ…?」

イガラシ「ゆ、指が…、おれている…」

部員「……」

谷口は指が折れているにもかかわらず、今までナインにかくしとおしてきたのだった…

丸井「きゅ、救急箱! そ、そえ木になるものをさがせ!」

イガラシが谷口の指を包帯でまく…

イガラシ「な、なにも、こんなにまでして…」



8・7 栄光の日本一

骨を折ってまで投げぬいた谷口の指をイガラシが包帯をまいている。谷口を取り囲むようにナインが集まっている。

谷口「いいみんな、勝つも負けるもこの最後の攻撃にかかってるんだぞ、わかっているな！」

浅間「いわれなくてもわかってます。」

この回トップバッター浅間は大きなあたりを打つもセンターフライとなる。センター藤田はフェンスにぶつかりながらもこの打球を捕球する。

審判「アウト！」

藤田「ひゃあ、あぶねえ、あぶねえ。」

浅間「く、くそっ！」

墨谷応援席がしずまりかえる。

谷口「たのむぞ、加藤！」

加藤「まかしといてください！」

佐野「あとふたりね。」

佐野のタマを加藤は一、二塁間をぬく打球を打つ。ライトが全力で前進してきて一塁に送球する。判定は…

審判「セーフ！」

「やったー！ やったーっ！」

「たのむぞ島田ーっ！」

応援の声を背中にうけ島田はバッターボックスに立った。そして佐野のタマをレフト前に打つ。レフトが二塁に送球するもセーフとなる。ワンアウト一塁二塁でトップバッター丸井に打順が回った。

部員「たのむぞ丸井！」

丸井「キャプテンようくみててください、イガラシもよく目をあけとけ！」

佐野「くそっ！」

丸井「このーっ！」

「カーン！」

しかし丸井は力みすぎて、打球はセカンドフライとなってしまつた。これでツーアウトとなつてしまった。墨谷側応援席は静まりかえる。

谷口「高木、りきむなよ！」

高木「は、はいっ。」

ツーアウトとなつてしまつたことで高木は試合がはじまつたときと同じくらい緊張していた。それにひきかえマウンド上の佐野はロージンを手につけながら気合いを入れ直していた。

佐野「あとひとりね！」

佐野が投げた。高木が打つ。しかし打球はサードゴロとなってしまう。

佐野「サード！」

後藤「し、しめた。」

青葉ベンチは勝ったとおもい、墨谷ベンチはだめだとおもった…

しかしサード後藤は勝ちを意識したとたん、ボールをとるよりさきに一塁に目がいきタマから目がはなれてしまった。後藤はボールをはじいてしまう…

後藤「し、しまった！」

佐野「あ！」

青葉にエラーがでた！ サード後藤は自分ではじいたボールをとったがどこにも投げられない。ツアアウト満塁でイガラシに打席が回った。イガラシは荒い息のまま一度も素振りをしてないまま打席にはいった。

だがイガラシは佐野の変化球をフルスイングした。

打球はおしくもレフトフェンスに直接あたるファールとなる。

青葉部長「タイム！」

青葉部長はバッテリーに注意をあたえている…

佐野「え、し、しかし…」
青葉部長「いわれたとおりすればいいんだ！」

佐野「は、はいっ。」

審判「プレイボール！」

審判のプレイボールがかかるとキャッチャーが立ちあがった。ピッチャー佐野は高いボールを投げる。敬遠である。

墨谷二中応援席からは青葉にヤジがとぶ…

「きったねえぞ！」

「勝負しろーっ！」

審判「フォアボール！」

満塁なので墨谷二中が一点追加し9対7、一点差となる。

四番谷口に対してもキャッチャーは立ちあがった。三番イガラシ、四番谷口との勝負をさけ五番の小山と勝負する青葉の作戦だった。

審判「ボール！」

青葉応援席からも味方の佐野をやじる声がきこえる。

「にげるが勝ちか！」

佐野はマウンド上でやや力なくなっていた。そのときである…三塁ランナー島田がホームに向かって走ってくる…

一軍捕手「さ、佐野っ！」

佐野はいそいでキャッチャーに向かってボールを投げるが…

審判「セーフ！ セーフ！」

ランナーがそれぞれ進塁しツーアウト二塁三塁、たまらず青葉部長がタイムをとった。青葉ナインがベンチ前に集まってくる。

青葉部長「どうしたというんだ、佐野。」

佐野「す、すみません……」

青葉部長「はつきりいつてみる!」

佐野「勝負できないのがくやくしくて……」

青葉部長「なるほど。たしかにここで勝負すればおまえは満足するだろう。中野がファールしろといったのにもかかわらずヒittingにでてしまったのもおなじ気持ちからだろつ。いまさら中野の失敗の結果をせめるつもりはない。しかし、わしはその場のヤジに動揺しうさをはらし満足しようとした中野の気持ちはゆるせん! おまえたちの目的はなんだ。勝つこと以外になるがあるんだというんだ! いいか、佐野、目さきだけの小さな満足感のために試合の大局をわすれるんじゃない! ほんとうの満足感というものは試合に勝った者が味わえるものなんだ。」

部員「……」

青葉部長「さあ、はやく守備につけ!」

部員「は、はいっ。」

返事はしたものの、青葉ナインのあしどりは重かった。ベンチをあとにしてポジションに戻ろうとするが……そんな部員の姿をみて部長は……

青葉部長「ま、まで……」

青葉部長がナインを呼びもどした。

青葉部長「佐野、そんなに勝負してみたいか？」

佐野「い、いえ、そんな……」

青葉部長「ほかの者もそうなんだな！」

一軍捕手「い……いや……その……」

青葉部長「勝負してこい！」

青葉部長「……」

青葉部長「おまえたちのあらんかぎりの力で勝利をとってこい！」

佐野「あ、ありがとうございます！」

青葉ナインは部長の「勝負してこい！」のひとことで生き返ったように走ってポジションに戻った。

審判「プレイボール！」

審判からプレイボールがかかったがキャッチャーはすわったままである。谷口との勝負である。

「お、おい、キャッチャーがすわったままだぜ！」

「う、うむ！」

「いよいよ勝負にでるらしいな……」

「それでいいんだ！」

「佐野！ 三振にきつておとせーっ！」

「やっちまえ谷口！」

「スタンドにたたきこめーっ！」

墨谷応援団、青葉応援団それぞれが大きな声で声援をおくった。

佐野が谷口に向かってタマを投げた。

「ズバーン！」

キャッチャーミットから大きな音がした。青葉応援団が佐野に声援をおくった。

「いいぞ佐野！ その調子だ！」

「やっちまえ！」

二球目谷口はバットを振るが、佐野のタマを振り遅れてバットは空を切る。

墨谷応援団は静まりかえり、ぎやくに青葉応援団はいちだんと大きな声になってきた。
ツーストライクワンボール、佐野は最後の勝負球を投げた。

谷口のバットはわずかにタマにかすったがボールはキャッチャーミットに…

審判「ストライクバッターアウト！」

そのときキャッチャーのミットからボールがこぼれる…

審判「い、いや、ファール、ファール、ファール…」

佐野「さすがだぜ…」

谷口「タ、タイム…」

谷口のケガをしている右手がしびれている。谷口はバッターボックスを一度はずした。谷口はあれだけのタマを投げられたらとても打ちかえせない、あてるだけで精いっぱいだと感じ

た。なんとかして打たなくては……いやなんとしても打ってみせる……谷口はバッターボックスにはいった。

カウントは変わらずツーストライクワンボール。佐野は力いっぱい勝負球を投げた。

佐野「これが、とどめだーっ！」

「バキッ」

谷口のバットが折れた。谷口は打った打球のゆくえもみないまま一塁に向かって走った……。ボールはふらふらとあがってショート後方にあがった。しかしショートはこれをとれない。この間にサードランナー加藤がホームイン。同点である。二塁ランナーイガラシはサードコーチャーのストップの声を無視してサードをまわってホームにむかう……

イガラシ「ここでおれがホームをつかなくちゃ勝てない！ もうキャプテンもおれも投げられやしないんだっ！」

イガラシは全速力で走るが足がもつれてしまいホーム手前で倒れてしまう……レフトから返球を受けたキャッチャーはタッチをしようとするが……イガラシは倒れる力を利用してからだを一回転させてホームをねらった……

キャッチャーはその変則的な動きにタッチができなかった。そして気がついたときにはイガラシの足がホームベース上にのっている。

審判「セーフ！ ゲームセット！」

「ワッ!」

その瞬間、墨谷応援席からはグラウンドがわれるばかりの歓声があがった。テープがグラウンドに投げこまれる。中には喜びのあまりグラウンドにとびおりてしまう生徒もいた。

「勝った! 勝った!」

墨谷ナインはホームベース上のイガラシをとりかこんだ。

青葉ナインはうなだれてベンチ前に集まる。

佐野「す、すみません!」

青葉部長「わしがいままでしつとるなかでいちばんいいタマだったよ。あれを打たれたんじゃしかたない。さあみんな勝者に拍手をしてやらんか。」

青葉ベンチから拍手の音が:

青葉応援席からも:

墨谷応援団から、青葉応援団から、そして青葉ナインから球場内にいるすべての人から墨谷二中ナインにむかって祝福の拍手が:

こうして墨谷二中は10対9で青葉学院をやぶりついに日本一の栄冠をつかんだのである。かくして谷口にとって最後の試合は終わったのである。



第9章 谷口の苦悩

青葉学院との事実上の日本一を決める試合に勝利した墨谷二中。卒業を間近に控えたキャプテンの谷口にはもうひとつの大きな仕事があった。それは新キャプテンを誰にするかであった。

9・1 野球部の部室

丸井「さっ、キャプテン。袖を通してください。」

谷口「もう大丈夫だよ、丸井。着がえを手伝ってくれなくても…」

丸井「いいスから、いいスから。」

谷口「もうすぐ、包帯が取れるんだ。」

丸井「よかったでスね。」

青葉戦で右手人差し指を骨折した谷口であったが、その傷もあとわずかで完治する予定であった。

部室から出ると次期キャプテンについての取材で待ち受けていた新聞部につかまってしまった。

新聞部「谷口さん、新聞部ですが次期キャプテンは決まりましたか？」

谷口「いや、まだ……」

新聞部「まだですか、他の部ではもうとくに決まっているんですけど……」

谷口「もう少し待ってくださいないか。」

新聞部「あのうわざわざはイガラシ君が最有力候補だと言われているんですけど……」

丸井「しつこいぞ。おまえら。わが野球部は他の部とは違うんだぞ。なにしろ日本一の栄光を引き継ぐんだからな。キャプテンとしては慎重になつておられるんだあ……い。」

新聞部「あ……あ……」

丸井が新聞部にわって入って、谷口はほとと胸をなで下ろしグラウンドに向かって歩き続けた。

丸井「キャプテン、おれもやっぱり次期キャプテンはイガラシがいいと思うんでスけどね……」

谷口「どうしてだ？」

丸井「あいつ、一番野球知っていますからね。キャプテンになるからにはよく野球を知ってなければダメですからね。」

谷口「みんなどう思っているんだ？」

丸井「みんなも同じ意見じゃないスカね。」

練習が終わつての帰り道、谷口はまだキャプテンをどうしようか悩んでいた。学年が下のイガラシをキャプテンに決めてしまつていいものか……

9・2 病院の待合室

谷口の指に巻かれた包帯がようやく取れる日がやってきた。

看護婦「谷口さん。谷口さん。」

谷口「はっ、はい。」

包帯が取られ、谷口は自分の指を見つめている。

谷口「せ、先生。指が……」

医者「うむ。まっしばらくマッサージに通えばもう少し動くようになるだろう。」

谷口「もう少し……?」

医者「まっ日常生活にはさして支障はないじゃろ。」

谷口「そ、それじゃ、野球は?」

医者「そりゃ無理じゃな。」

谷口「む、無理つてずつとですか?」

医者「ああ、そうだ。」

谷口「そ、そんな。」

医者「どうしてこんなになるまで、酷^{こくし}使したのかねえ。」

病院を出た谷口は医者から言われた言葉が頭から離れなかった。もう野球ができない……。家までの帰り道、谷口の頭には今までの墨谷二中での出来事が浮かんでは消えていった。

父「どうしたんだ、タカオ?」

谷口は今日医者から言われたことを父に話した。話し終えた谷口はそのまま自分の部屋に入って行った。

母「そうだったのかい、かわいそうに。」

父「なあんてい、母ちゃんまで。」

タカ才が野球ができないことを父から知らされた母は涙を流していた。

母「だって、高校に行っても野球をやるんだとはりきっていたのに。」

父「タカ才は精一杯やったんだ。悔いを残しちゃならねえのよ。そうでなけりや、指と優勝をひきかえにした意味がねえやな。」

父「タカ才くっ、いつまでメソメソしてやんでえ、野球ばかりが人生じゃねえや。」

谷口の父はタカ才の部屋のドアを開けて、机の前にすわっているタカ才に向かってしゃべり始めた。

父「ばかやろう。てめえそれでもキャプテンか。おめえにはまだ最後の仕事が残ってんだぞ。新キャプテンを選ぶのはどうしたんだ。えっ、最後のけじめもちゃんとしねえで、なんだメソメソしやがって。おめえ、それでも男かい。」

谷口「わ、わかったよ、父ちゃん。」

父「わかったら、立派にちゃんとキャプテンのけじめを果たしやがれ。」

谷口「おれ、ちゃんと最後の責任を果たすよ。」

父「それが、男つてもんよ。」
母「と、父ちゃん。」

9・3 野球部部室

3年生部員が部室に集まって次期キャプテンについての話し合いが行われた。

中村「おれは、次期キャプテンはイガラシでいいと思う。」

松下「しかし、あいつじゃみんながついてこないとおもうな。」

遠藤「だけど、あいつ野球のセンスはいいからなあ。」

松下「それはおれも認めるけど、キャプテンとしてはどうか。おれは加藤の方が良いと思うけど。」

中村「キャプテンはどう思います。」

谷口「その前に他のみんなはどう思う。」

鈴木「下級生のキャプテンなんて前例がありませんからねえ。」

須藤「前例は抜きだよ、イガラシが一年生の最初からレギュラーになったのだから、前例にはなかったことだからねえ。」

鈴木「おれは高木をおすな。」

南「高木なら西田の方が良いよ。」

須藤「島田だつてやれないことはないぜ。」

中村「こんなところですけどねえ。キャプテン。」

谷口「うむ。」

松下「最終的にはキャプテンの決めることです。我々はキャプテンにしたがいますよ。」

中村「で、キャプテンは誰を？」

谷口「もう少し、考えさせてくれないか。」

9・4 練習を終わっての帰り道

練習を終えたイガラシが帰り道を歩いている。そこに丸井が…

丸井「おい、イガラシ〜。」

イガラシ「なんですか。」

丸井「おまえの野球のセンスはあいかわらしないな。でもさ、もっとみんなから好かれるようにならなくちゃな。」

イガラシ「どうしてですか。」

丸井「えっ、どうしてって、それじゃキャプテンが務まらねえじゃないか。なあ。」

イガラシ「誰がおれをキャプテンだなんて言っただんですか。」

丸井「イガラシを置いて、他にキャプテンになるやつはいないじゃないか、だろう。」

イガラシ「だって、他にいくらでもいるじゃないですか。」

丸井「てめえ、おれが親切に教えてりゃ。」

イガラシ「いらぬ、おせっかいですよ。」

丸井「な、なんだと〜。」

イガラシ「丸井さんこそ、そのすぐカツとなるくせを直した方が良いですよ。」

丸井「えっ。て、てめえ、このやろ〜、ばかやろ。ラッキョ、猿、ちくしよ〜。」

9・5 谷口の家で

谷口「ふ〜っ。」

父「ていへんだなあ、キャプテンを選ぶのも…。」

谷口「ああ。」

母「でも、もう候補はいるんだろ。」

谷口「候補だったら、みんなそうだよ。」

父「そんなことはあるめえ、タカオ。みんなをひっぱっていくのは、誰でもできるってもんじゃねえぞ。」

母「そうだよ。」

谷口「でも、おれがやれたんだから。」

父「おめえはよくやったよ、父ちゃんなんか腕が良くってもよあ、大工の棟梁とつりよう

としてみんなをひっぱっていくのは苦手にがてだしな。」

谷口「腕が良くっても……」

父「そうよ、いくら技術が良くつたって人の上に立つのは別よ。」

谷口「いくら技術が良くてもか……」

その時、玄関のドアが開いた。

丸井「こんばんは。」

谷口「やあ、丸井。」

丸井「キャプテン、もう神社で練習しないんすか。」

谷口「えっ……」

丸井「なぜですか。」

谷口「……」

丸井「なぜですかあ！ 卒業しちゃうから、もう関係ないっていうんすか。おれ

はどんな時でも一生懸命かげで努力する、キャプテンを尊敬していたんですよ。それなのに、おれはキャプテンをみそこないましたよ。」

谷口「丸井……」

父「丸井さんよ、タカオは練習したくて、もうできねえんだよ。」

丸井「えっ……」

母「と、父ちゃん。」

父「タカオの指はな、使い物になんねえのよ。」

丸井「えっ……、キャ、キャプテン。」

谷口「ああ……」

丸井「そうだったんスカ、そ、それを知らねえでおれは……」

谷口「丸井、おれはもうだめなんだ。」

丸井「キャ、キャプテン。」

谷口は言い終わると、こらえきれず背中を丸井に向けた。

丸井「なんでえ、なんでえ、キャプテンらしくもない、右手がダメなら、左手があるじゃないスカ。おれだって、何度野球をやめようと思ったか知れないスよ。で、でも一生懸命努力すればやれるんだって、教えてくれたのはキャプテンじゃないスカ、そ、そのキャプテンが弱音なんかはいちまつて……」

谷口「ま、丸井。」

振り返った谷口の目には涙があふれていた。

丸井「すいません。」

谷口「丸井。神社に行こう。」

丸井「ええっ。」

谷口「一緒に、練習をつきあってくれないか。」

丸井「ええっ、キャ、キャプテン。や、やりましょう。キャプテン。」

二人は野球の道具を持って御岳神社に向かった。

神社に着いた二人はさっそくキャッチボールを始めた。

けがが治ったにもかかわらず人差し指が使えない谷口の投げたボールは、山なりのボールとなり丸井の手前で落ちた。丸井はそのボールを見て谷口のけがの深刻さを知り、思わず涙がこぼれ落ちた。

谷口「いくぞっ、丸井。」

丸井「は、はい。」

谷口「それっ。」

谷口「泣くな！ 丸井。野球部を頼むぞ！ 次期キャプテンとしてな。」

丸井「え、ええっ…？。」

谷口「おれに、やる気を起こさせてくれたその気持ちで、みんなを引っ張って行ってくれ。」

丸井「キャ、キャプテン、おれなんかとても。」

イガラシ「お願いしますよ、丸井さん。」

谷口「イガラシ。」

イガラシ「キャプテンの家に行ったらこっちだと。」

丸井「イガラシ、どうしてキャプテンの所に行つたんだ。」

イガラシ「次期キャプテンは丸井さんが良いんじゃないかと、一言、言いに。」

丸井「て、てめえ、すぎたまねをしやがって。」

谷口「イガラシ、丸井を頼むぞ。」

イガラシ「まっ、しかたないですな。」

丸井「えっ、しかたないたあ、なんだ、しかたないたあ。」

谷口「丸井。」

丸井「は、はい。」

谷口「野球部を頼むぞ。」

イガラシ「丸井さん、キャプテンお願いします。」

丸井「は、はい。」

こうして次期キャプテンは丸井に決まった。

（原作 ちばあきお「キャプテン」 文 小澤茂昌）

付録A 付録

A・1 キャプテンの時代

岩波書店から発売されている『少年ジャンプ』の時代 子どもと教育（斎藤次郎著）という本にはキャプテンが連載された少年ジャンプについての歴史をまとめている。この文は「キャプテン」が描かれた当時の時代背景やあきおさんの先駆的発想にふれることができると思います。この本の中のキャプテンについての文を参考までにのせておきたいと思います。以下は本文からの抜粋はっすいである。

A・1・1 野球漫画の系譜

（中略）

新幹線、東京オリンピックに象徴される経済の高度成長期で、「根性」だしてがんばれば必ず報むくわれると信じられた時代である。「巨人の星」は六十八年からテレビ・アニメ化してヒットする。以後、「タイガーマスク」(プロレス)、「アタックナンバー1」(バレーボール)、「あしたのジョー」(ボクシング)などのアニメや、「柔道一直線」(柔道)、「サインはV」(バレーボール)といった実写ものなど、テレビでは雑誌漫画を原作としたいわゆるスポーツ根性路線が人気を集める。

スポーツ根性路線ということばは、テレビの「巨人の星」の主題歌の「思いこんだら試練の道を、行くが男のご根性」に由来している。単にスポーツものというのと、スポーツ根性ものというのと、ちよつとした違いがある。スポーツの世界に生きるヒーローの活躍を、それぞれのスポーツ固有のおもしろさで味つけした程度なら、それはスポーツもので、スポ根になると、悲劇的なまでに、「試練の道」の苦行くぎやうが描かれなければならない。

(中略)

スポーツ漫画は行き着くべきところに行き着いてしまったのだ、とぼくは「巨人の星」や「あしたのジョー」の連載が終った『少年マガジン』を眺ながめながら思っていたのだ。ところが、それがそうではなかったのである。『少年ジャンプ』から、脱スポ根ともいうべき、不思議な野球漫画が現れるのだ。『少年ジャンプ』の時代』の前身に少し深入りしすぎたかも知れないが、以上のような一応の流れをおさえておかないと、ちばあきおの野球漫画の革命的な意義を説明しにくいのである。

A・1・2 キャプテンの衝撃

ちばあきおの「キャプテン」の第一回が「がんばらなくっちゃ」というタイトルの読み切りとして『別冊少年ジャンプ』¹に登場したのは、「巨人の星」が完結してちょうど一年後のことであった。

ある日、東京下町の墨谷二中の野球部に二年生の新人谷口タカオが入部した。彼は、野球の名門、青葉学院（私立）からこの学校に転校して来たのだ。レベルが高い青葉学院では、タカオは二軍の補欠にすぎなかったが、墨谷二中の野球部は、青葉から来たと聞いただけで色めきたつ。つい自分の実力を告白しそびれてしまったタカオはやむを得ず野球のことなどにも知らない大工の父親相手に猛練習を開始する。その甲斐あつて次第に実力をつけていき三年進級をひかえた新オーダー発表のとき、サードで四番というレギュラー・ポジションを与えられたばかりか、キャプテンに任命されたのであった。

（中略）キャプテンの物語は、名門からはみ出るところからはじまるのだ。

「なんてこつたい……せつかくこんどの学校ではのびのび野球を楽しめると思ってたのに……どうすりゃいいんだ。」

青葉の名選手が転校して来たと誤解され、その誤解を必死でとこうとして果せず、がつくり帰る道々、空き缶が浮かぶドブ川を見下しながら、谷口タカオはこう呟く。スティックな、そ

¹ 一九七二年二月号

していくらかフアナティック²でもあったスポ根の余韻^{よゐん}からまだ自由でなかった読者に、このセリフは衣服の清涼感と共に野球マンガの原点がいまなお健在であることを思い出させてくれた。ぼくは、このページから受けたはげしいショックをいまでもよく覚えている。のびのび野球を楽しむために名門に背を向ける、そういう野球漫画もあったのだ、と改めて思った。

タカオは突然任命されたキャプテンを懸命に辞退する。誤解が原因の過重な期待に^{こた}えるために、精一杯努力した結果選ばれたキャプテンではあったが、「やったあ!」というふうには喜べない。ちばあきおの漫画では、栄光は、それをめざして必死の努力を傾ける目標ではなく、努力の結果、むこうの方からやってくるものなのだ。「タイトル」にもなったキャプテンは、責任^{えいよ}重い栄誉ある座には違いないが、タカオはそれをめざしていたのではない。(中略)

いくら辞退しても、チームメイトに口々に「お願いします」と迫られれば辞退できるものではない。タカオは嬉しさとテレで思わず帽子を口にくわえ、汗をまき散らしながら、こつ呟く。「とうちゃん、お、おれまた、がんばらなくちゃ!」その表情が実にいい。過去の努力の苦しさを思い出し、キャプテンの栄誉を深くかみしめて感動するのではない。タカオがかみしめているのは、汗くさい帽子である。

ちばあきおは、涙を描かない。彼が描いたのは飛び散る冷や汗だけだった。

「キャプテン」を読みだすと、いったいなぜそれまでの野球漫画は「血と汗と涙」にああも熱中できたのであろうか、と不思議に思えてくる。(中略)その空想世界は、読者である子ども

たちの現実から、あまりにもかけ離れてしまった、といえないだろうか。

ちばあきおの描く野球選手は、読者と等身大であり、読者の見果てぬ夢を奇蹟的に実現する超能力者ではない。読者のように、やりたいことをやりたいようにやって、そのことで自己解放というか自己実現に近づこうとしている、ふつうの少年なのである。彼らにとっては野球は求道の間でも人生のメタファ³でもなく、現実的な中学校生活の「部活」であり、広い意味での遊びの世界である。（中略）

したがって、墨谷二中野球部は、名門であってはならない。のびのび野球を楽しむ場ではなくてはならない。監督もコーチも顧問も、子どもをシゴキ、管理するおとなは一人もないほうがいい。タカオを中心とした猛練習の甲斐あって地区予選の決勝に進出したとき、ようやく学校中の注目を集めるようになり、校長先生はじめ何人かの先生が練習をようやく見る程度がちょうどよいのである。

それに引きかえ、地区予選で対決し、その後宿命のライバルになる名門青葉学院野球部には、選手をあごで使うサングラスをかけたいやみな監督が配置される。タカオが選んだ「のびのび野球」とは、子どもたちだけの野球だったのだ。（中略）谷口タカオの父は、しょげている息子をはげまそうと、練習相手になってくれるが、野球のことはからきしわからない。（中略）ちばあきおが作品世界に「おとなの倫理」が入りこむのを極力避けようとしたことを示しているだろう。

³ たとえるものとたとえ

A・1・3

野球漫画の新しい方向

月日は流れ、墨谷二中野球部をすばらしく強力なチームにし、事実上全国大会の決勝戦といわれる対青葉戦を、死闘のすえに打ち破った谷口タカオは、卒業を迎える。彼は墨谷高校に進学して、もちろん野球をつづけることになるのだが、この段階でちばあきおは、タカオと共に読者を高校野球の場に導いていかなければならない。タカオのあとを丸井が、そしてイガラシがキャプテンを継いで、墨谷二中野球部の物語がつづいていく。そして、墨高のタカオの物語は、一九七三年から『週刊少年ジャンプ』誌上で「プレイボール」として、新たに展開されることになった。

こういう分家方式とでもいうべきドラマ展開は、スポ根時代にはあり得ないことだった。栄光への道はつねに一直線だったからだ。連載の分岐という事態にあつて、ぼくたちは改めてちばあきおの主人公観、登場人物観を学ぶことになる。作者は、タカオをほかの墨谷二中のメンバーとは違う特別な存在としては考えてはいないのだ。名門からはみ出してきた少年を、なぜ特別扱いしなければならないのか。それはタカオがいちばん嫌がっていたことではないか。

もし特別視してしまえば、墨谷二中野球部は、ヒーローにとつての栄光への道の入口あたりのちよつとした道草にすぎなくなるだろう。けれども、よく考えてみれば、少年の日々は、たとえ道草に見えようとも、いつだってだれだって、そのときそのとき精一杯自分というものの最先端を生きているのだ。登場人物一人ひとりに行きわたるちばあきおのやさしい目差しは、スポ根ばけのぼくや子どもたちを正気に返してくれたのであつた。

さつき、中学時代のタカオの最後の試合、青葉とのたたかいを、ぼくは「死闘」と書いた。書

きながら、これは注釈が必要だと思っていたのだが、ちば漫画にも技術とエネルギーを使い果し、傷つき倒れる、という場面はめずらしくない。野球をたのしむというのは、手ぬぎやなれあいで野球を「弄ぶ^{もてあそぶ}」ことではない。遊びは真剣でなければおもしろくないのだ。しかし、描き方のデテール⁴が、やはりスポ根とは一味違うのである。

試合中にこんな場面がある。先発のイガラシは一年生のことだし、スタミナが心配だったので、タカオは一人黙々とピッチングの練習を積んでいたが、サードを守っているときファール・フライを深追いし、ベンチに転げ落ち、指の爪をはがしてしまふ。控えの選手などいるはずもなく、そのままサードを守りつつけるが、ついにイガラシが疲労困憊^{こんぱい}、リリーフに立たねばならなくなった。キャッチャーは血染めのボールを黙ってスポンで拭^{ぬぐ}う。ほかに青葉相手に投げられるものはいないのだ。辛^{かう}うじてダブル・プレーでピンチを切りぬけてベンチに帰ってくるタカオに、「だいじょうぶですか」とイガラシがかけ寄って、思わずタカオの右手にさわると、タカオは「うお……」と叫び、ベンチにうずくまってしまった。

次の三コマ、目をつり上げたイガラシを中心にサインの驚きと緊張の顔がならぶ。「ど、どうしたんだよ」という丸井の疑問に三コマ目でイガラシが答える。「ゆ、指が、おれている……」チームメイトは救急箱と副え木^{そえぎ}を探しに走る。応急処置を終えてイガラシが言つ。「な、なにもこんなにまでして……」

しかし、ちばあきおは闘志で痛みに耐える谷口の顔をアップにはしない。根性への詠嘆^{えいたん}はこ

こにはない。茫然とするナインと、最後の攻撃に奮起を促すキャプテンの指示がページ五コマつづき、試合再開である。スコアは9対6。このビハインドを、タカオのバットを折りながらのセンター前ヒットとイガラシの好走塁ではなかせし、墨谷二中は勝利をおさめる。指の骨折をおして投げかつ打つタカオに、悲壮感はなかった。少年たちの熱中の前では骨折さえもが相対化されてしまう。彼らの諦めを知らないファイトは、未来の栄光のために試練に耐える根性ではないのだ。墨谷二中ナインには「いま」しかない。

「いま」を未来の犠牲としないこと、あと先のことなど考えず「いま」に集中すること、スポーツの楽しさは、まさにここにあつたはずなのに、栄光へのコースが設定されてしまったために、「いま」はみんな階段状の試練というプロセスに組みこまれてしまった。このスポ根の限界を、ちばあきおは破ったのである。

丸井キャプテン、イガラシキャプテンとつづいていく墨谷二中野球部は、それぞれの「いま」を熱くさわやかに生きていく。特別の天才ヒーローはでてこないが、個性的な選手が生まれ、育つていく。のびのび野球をたのしむ伝統は、ハード・トレーニングと共に代々伝えられていくのだ。

一方墨高に進学した谷口タカオは、例の指の骨折以来、人差指が伸びずボールが投げられなくなっていた。それで一度はサッカー部に入ったものの、野球をあきらめられず、結局はまた野球部を続けることになるのだが、この墨高の野球部は地区予選の一回戦で毎年敗退している弱いチームだった。

今年の一回戦に代打用員として出してもらえたことになったが、タカオはナインから勝とうという気が全く感じられないのが、不思議でもあり不安でもあった。試合相手のエースが右投げか左投げかも知らず、むろん攻略法など考えてもみない、ただの野球好きの集まりだったのだ。それでもタカオの偵察ていさつノートとアドバイスのおかげで、バッティングのマトをしぼったり、投手が相手打者の苦手なコーナーをついたりして、善戦する。だが、試合中に人のいいキャプテンは、こう呟く。

「たしかに谷口のアドバイスは適切だ。じつさい効果もでているんだが……。なんかうちのチームにはじっくりこねえんだな。ようするにおれたちや、勝ち負けより野球をしてさえいりゃあ満足するんだが、やつには、それだけじゃものたりんらしい。」

「それだけじゃものたりん」のは読者だつて同じことだ。けれども、「勝ち負けより野球をしてさえいりゃ満足する」気持ち忘れてしまつてはならない。草野球として出発をとげた戦後日本の野球の原点はここにある。「のびのび野球をたのしむ」ことを身上にしていたはずの谷口タカオは、むろん、そのことを知っている。にもかかわらず、「それだけじゃものたりん」のである。

こうして「たのしむ」とはどういうことなのか、そこを掘り下げていくことが、この新しい野球漫画のテーマになる。「キャプテン」時代からのタカオの不屈の闘志が墨高野球部を徐々に変えていくのだが、それはむろん「たのしみ」から求道へあともどりすることではない。ひたすら技術をみがき、個々のプレーを勝利に結びつけていく努力を積み重ねていくのである。ヒッ

トを打つことも、好走塁もファインプレーも、それが勝利をもたらすからこそ、美しいのだし、たのしいのだ。

そのことをタカオは「自分のやり方」として徹底していく。代打でヒットを打ったことから守備にもつくようになったタカオだが、指の故障のため、ノー・バウンドの送球は不可能である。サードをなるべく浅く守り、早いタイミングでボールに飛びつき、一塁ヘワン・バウンドで送球する。学校のグラウンドで、夜の神社で、タカオの特訓はつづく。

地区予選の三回戦で当たることになったのは、シード校の東都実業である。試合の数日前キャプテンはタカオに、こう話しかける。

「おれは、おまえのいっしょうけんめいやろうとする姿は、とてもりっぱだとおもってるよ。しかし、東実に勝とうだなんて考えは、すてるんだな——これは、どう考えてもキャプテンの言うセリフではない。だが、そのつづきはこうだ。

「そりや、おれたちだって、おれたちなりの努力をして試合をするつもりさ。でも、おまえは高校野球つてもんをしらんからむりもねえんだろうけど、限度つてもんがあるんだなあ。たとえば東都実業みたいな野球の名門校ともなると、各地から力のあるやつらがぞくぞく集まってくるのよ。しかもその中には、将来野球でメシをくおうなんてやつらがいるんだぜ。そんなやつらとまともにはりあおうなんて、こんなおれたちじゃ、勉強どころかすべてを野球のために犠牲^{ぎせい}にしくっちゃ、はじまらんのだよ。まさかおまえだって、将来野球でメシをくおうつてんじやあるまい。」

これには一理ある。タカオも「わかりました」と答えざるを得ない。けれども、「勝ち負けよりも野球さえやっていりや満足」の少年たちが、「将来野球でメシをくおうなんてやつら」に勝つことはぜったい不可能だろうか。そんなはずはない、なにかあるはずだ。ちばあきおは、なんでも許される漫画の荒唐無稽さにも逃げず、精神主義にこり固まりもせず、墨高の現実から出発して、できる限りのことをやってみる。作者は「のびのび野球をたのしむ」側の少年たちの立場に立ちきろうとしたのだった。

少しでもはやいワン・バウンドの送球技術を身につけようとひたすら練習に打ちこむタカオの相手をするうち、内野手のバウンド処理はめきめき上達する。しかもノー・バウンド送球に切りかえたタカオは、曲がった指を使わずにボールをはさむようにして投げるうち、フォークボールのこつを掴むことにもなる。タカオ一人、東実相手に「実力をためす」はずだった試合は、墨高一丸となつての猛反撃に結実していく。その結果は――。

野球をたのしむというのは、野球の中に自分の全てを投入することだ。投入した結果が納得できればそれでいい。できなかったら、未来のためにではなく、「いま」の腐蝕をくいとめるために、よりいっそう深く没入していかなばならない。そのようなわれを忘れる熱中こそが、不可能を可能にする。エリートでなくても、ヒーローでなくても、だれだって自分の好きなことを本気でたのしもうとすれば、そこに道が拓ける。

スポ根の彼方に、ちばあきおはそういう野球漫画の新しい方向を示したのであった。

A・2 イチロー『キャプテン』を語る

大リーグに移籍し活躍めざましいイチロー選手が『キャプテン』を語っていた。今を感じる意味でこの文を紹介しておきましょう。

—小学生の頃、僕はこのマンガに感動し、そして夢中でした。—

イチロー（本名・鈴木一朗）

感動したマンガは？ という質問に、イチローが間髪いれずに答えたのは、ごくありふれた野球少年たちが主人公の不朽の名作だった。そう、我々も好きだったあのマンガ——考えてみれば、イチローは初めからイチローだったのではない。今やメジャーで首位打者を争う彼も、最初は我々とさして変わらない、ひとりの野球少年だったのだ。

（取材・文 石田雄太）

「小学生の頃、僕はこのマンガに感動し、そして夢中でした。」『キャプテン』。

すでに亡くなられた漫画家、ちばあきおさんが描いた、野球マンガの名作である。ごくありふれた野球部に所属する普通の中学生が、努力に努力を重ねて、名門

の野球部に挑むというストーリー。墨谷二中のキャプテンを4代に渡って描く、長編マンガだ。

「僕が『キャプテン』を初めて知ったのは、小学生の時かな。何しろ、友達に見せたら、野球部に入るって言い出したほどでしたからね。僕はコミックスではなくて、アニメで見たんですけど、感動しましたね。最初に見たのは、谷口キャプテンの時代でした」

野球の名門・青葉学院中で二軍の補欠だった主人公、谷口タカオは、東京の下町にある墨谷二中への転校を機に、楽しんで野球をやりたいと野球部の門を叩いた。しかし初練習の時、不覚にも青葉のユニフォームを着てしまったことから誤解を生んでしまい、墨谷の全校生徒から「青葉のレギュラーでサード」という過度な期待をかけられてしまう。口下手の谷口は真実を告げられずに思い悩むものの、猛練習を開始した。それなら練習をして、青葉のレギュラーと同じくらい野球がうまくなればいいじゃないか、と――。

やがて、谷口はその努力を認められて、3年生になると同時に4番でサード、しかもキャプテンに指名された。

「キャプテンになった谷口が、チームのみんなに対して猛特訓をするシーンがあるんですよ。でも、自分はグラウンドではみんなにノックするだけで、特訓を受けることはない。だからナ

インに不満がたまつて、ピッチャーの松下が、キャプテンに抗議しようぜ、と言い出すんです。もちろんイガラシだけは、そんなことするなんてバカじゃねえの、みたいなこと言ってるんですよ。で、谷口の家に行ってみると、谷口のお母ちゃんが出てきて、神社に行っていると言う。みんなは、どうせ青葉学院に勝てますようにって願かけにでも行ってるんじゃないかって言うんだけど、実は谷口は、みんなのノックに追われて自分の練習ができないからと、それよりも厳しい猛特訓を神社でやっていたんですよ。その姿を物陰から見つけたナインが、申し訳なかったという気持ちになつて一人、また一人と、走って帰る。それをさらに物陰から見ていたイガラシが、これなんだなあ、キャプテンがみんなを引っ張る力は……と独り言をつぶやく。そういう見えないところの姿というのは、グランドの上で何かを示すよりもはるかに強い影響をチームに与えてくれますよね。僕にとつても、そうかと思わせてくれる場面がたくさんあったから、このマンガに夢中になっていたんだと思います。僕なら抗議の仲間には加わらずにイガラシのようにこっそり見に行つて、でも独り言はつぶやかないで（笑）、イガラシと同じことを思ったでしょうね」

イチローが言う『松下』というのは、墨谷二中の背番号1。プライドは高いが投げるボールは遅く、弱小野球部の典型的な3年生エースだ。そして『イガラシ』とは、墨谷に入ってきた新入部員で、イチローがもつとも心惹かれるキャラクターである。体は小さく、見てくれはサルのようなイガラシは、シャープなバツティングで先輩達の度肝を抜く。さらに内野を守らせてみたらこれが抜群で、間違いなくレ

ギュラー級の実力を持つ。しかし、谷口は悩んだ。墨谷には、新入部員には中学野球のイロハを教えるために秋まではメンバーに入れないという不文律があったからだ。しかもイガラシは思ったことを口にしてしまい、その態度が先輩の反感を買ってしまっていた。

「みんな個性があつて、それぞれ面白いんですけど、自分に近いなと思うのはイガラシですね。顔も似てるし、上級生に対する生意気なところなんていうのも、僕と同じですから（笑）。僕も、小学校の3年生になってからじゃないと出られない試合に、小学校1年生の時から名前を変えて出ていましたからね。名前がそのままだとバレちゃうから、上級生の名前を使って出ていましたよ、その試合に」

「昔、青葉学院みたいなチームに震え上がったことがあります」

イチローが中学生の時。鈴木一朗というピッチャーを擁した愛知県の豊山中も、青葉のような強豪校だった。

「全国大会の、ベスト4までいきました。小学校時代、全国大会のベスト8まで行ったチームのメンバーが、ごそつと来ていましたから。特にセンターラインがすごく優秀だったんです。キャッチャー、ショートの、センター、まあ、ピッチャーは僕でしたけど、このセンターラインがものすごく優秀な選手ばかりで、最初からある程度、期待のできるチームでした。ですから、

どちらかと言えば、墨谷二中ではなくて青葉学院の方でしたね（笑）。でも墨谷に成長していくプロセスは、青葉学院の選手が見せられても感動するはずですよ。だった名門のチームにいる選手だって、最初からうまいわけじゃないですからね、みんな」

それでも、豊山中は、全国大会の準決勝で敗れてしまう。

「僕らにとつての青葉学院みたいな、驚くような強さのチームもありましたよ。全国大会の最後に負けた兵庫県の中学校だったんですけど、これはスゴイチームでしたね。僕が中学でピッチャーをやっていた頃は、同じ中学生を相手に打たれることなんてことはほとんどなかったんですよ。それがその兵庫の中学には、1番から9番まで全員、芯に当てられた。それはもう、あの打線のイメージは強烈でした。みんなに芯を食らって、打ち取ったと思って、ライナーとか、いい当たりばかりでしたからな。メチャクチャ驚きました。で、ピッチャーが2年生で……そういう意味じゃ、佐野と同じですね。佐野は左で、彼は右でしたけれど、やっぱり青葉だな、あの学校は（笑）。それでも、結局はあの中学から甲子園に出たようなヤツはいなかったんですよ。僕、出来る範囲の中で調べたんです。でも誰の名前も見つけられなかった。あの大会は彼らが優勝したんですけど、すごいチームだった。ホント、震え上がりましたよ（笑）」

ふと、思った、愛知県の一中学生だった鈴木一朗は、今、メジャーリーグの押しも押されもせぬスーパースター、イチローに成長した。そのプロセスの中で、墨

谷二中の谷口がそうだったように、鈴木一朗も凄まじい努力を重ねてきたに違いない。だからこそ『キャプテン』に思い入れているのだ、と。『キャプテン』に夢中になっていた当時のイチローは、今と何が違い、何が変わらないままなのだろう。

「僕は中学生の時、初めて監督という存在に出会ったんですけど、学校の監督というのは自分の形にはめたがるというイメージがあつて、あの頃は何を言われても聞かなかつたんです。でも今は、まず聞く自分がいる。しかも、それをさらに振り分ける自分もいます。そこは全然違いますね。同じところは……納得のいかない理由で何かを言われると、すぐに歯向かうところですかね。相手に食ってかかるところはあの頃と変わっていない……何せ、イガラシですからね（苦笑）」

（出典 プレイボーイ 第37巻 第34号 2002年9月17日 集英社発行）

A・3 「原作者 ちばあきお」について

キャプテンの原作者ちばあきおについて簡単に紹介しておこう。

本名・千葉亜喜生。昭和十八年（一九四三年）満州・奉天（現在の中国・遼寧省瀋陽）生まれ。昭和四十二年『サブとチビ』（『なかよし』）でデビュー。昭和五十二年『キャプテン』『プレイボール』で第二十二回小学館漫画賞を受賞。最後の作品となった『チャンプ』⁵を連載中、昭和五十九年没。享年四十一歳。

A・4 あとがき

何を思ったのか谷口キャプテンの話を本にしてしまった。ちょっとした道德の資料を作ろうとしたのだが、なんとなく中途半端な気持ちでとりあえず谷口君の墨谷二中でのキャプテンの場面だけを文字にしてみました。

自分がキャプテンを読んで涙した場面の印象がわすれられない、この感動をいまの子どもたちに伝えたい。マンガはマンガでもしろいがたくさんの人に伝えるのはなかなかできない。ましてや教室でその感動を伝えようとするのはなみだいていことではできない。そのためには文章にするのが一番いい。文章に大切な漫画のコマをはりつけければ充分に原作者の意図は

通じるのではないだろうか。またそうしておけばいつでも好きなときに子どもたちに紹介ができる。

今の時代の中に百年立つても生き続けているものがあるだろうか？ 情報社会といわれてから久しいが、科学技術が日進月歩で進化している中で百年後の世界に何が残っているのだろうか。わたしは思うのである。感動を伝えたい！「キャプテン」の感動は百年後にも必ず通用する。作品自体はもちろんフィクションだがその中には人にできないことは何一つ描かれていない。そう誰もが谷口君になることができるのである。谷口君の好きな野球のタマをサッカーボールに置き換えればそこにはサッカーが大好きな谷口君ができたのである。そう野球のタマを君が今打ち込んでいるものに変えるだけで君はちばあきおの描く谷口君になれるのである。

おざわしげまさ
小澤茂昌

キャプテン① 谷口キャプテンの巻

2002 年 10 月 28 日 初版第 1 刷発行

2004 年 10 月 28 日 改訂版第 1 刷発行

2006 年 3 月 17 日 改訂版第 2 刷発行

原作 ちばあきお

文 おざわしげまさ
小澤茂昌

発行者 小澤茂昌

発行所 和泉書院

郵便振替 00850-0-69925

落丁・乱丁本はありません。

定価はカバーに表示してあります。

Web-page: <http://plaza.across.or.jp/~furano>

mail: mailto:furano@po2.across.or.jp

